

の言葉もあり、二十兩の謝儀を贈ることにして持つて行つた處が、畫稿に思ひの外の日を費したとか何んとか云つて大變不足らしい口ぶりを示したので、寺でも案に相違したけれど、今更増額することも出来ず迷惑してゐた。するとそこへ岸駒の門人がやつて来て「先き頃贈られた二十兩は正に受納致しました、就いては、初めから何程か畫に添へて寄附をも致す考へでありました故、改めて百兩御修覆料の内へ寄附致します、是れは當座の納金で御座いますから御受納願ひ度い」といふ口上で、前日寺から贈つた儘の謝金を持つて來た。即答もならず、一時其の金を預かつて置いたが、寺でも少なからず弱つた。で度び／＼交渉した結果が、二十兩は元々通り岸駒に納めさせ、金百兩の空らの寄進札を寺の堂内へ掲げることにして、此の紛紜は落着した。

寄進金壹百兩

越前介岸駒

と書いた札を見て諸國の見物人は「岸駒先生は傑いものだ」と言つて駭ろいた。すると誰かと落首を作つて堂の柱へ貼つた。それは

百兩が岸か寄進か知らねども當時畫龍(畫料)の高い天井

文晁の悴の文二が、或る年京都へ行くことになる

「京都へ行つたら一度は岸駒に會つて見るがいゝ」

と文晁は悴に向つて言つた。訪ねて行けば、自分の前へ對しても悴を粗略には扱ふまいと文晁は思つたからだつた。

京都へ着くと、文二は父の言葉もあるので岸駒の家を訪問した。すると執事のやうな男が出て「何卒此方へ」と言ふので案内されて行くと、立派な廣い座敷へ通された。正面には御簾が垂れてゐて、白木造りの物々しい有様だ。暫時それで控へてゐると、突然

「シューツ」

と警蹕の聲が掛つたので、文二はびつくりして、思はず「はッ」と頭を下げると、

「文二か、よう参つた、緩る／＼休息致せ」

と岸駒が高い處から聲を掛けた。文二が再びはッと思つて頭を上げた時には、もう御簾はスル／＼と下つてしまつた。

江戸へ歸つて來て此の話をする、と、文晁は齒齧みをして口惜しがつた。

## (九) 晩年

文晁には八人の子があつた。其のうち三人が男で、文二は長男だつた。併し文晁は、長女の於宣に養子を迎へて文一と名乗らせ、自己の後繼者たらしめんとした。文一は宮津侯の侍醫利光氏の第二子であつたが、晝を養父に學んで痴齋と號し、山水花鳥を描くに工みで、文晁も大いに望みを囑してゐたが、性來多病で、文政元年三月齡三十二で病歿した。文晁は片腕をもがれたやうな氣がした。立派な葬式を行つて、淺草源空寺に碑を建て、碑文は龜田鵬齋が書いた。三男は早世し、二男は他家を繼ぎ、長男の文二が相續人になつた。文二は萍所と號して晝も描いたが、繪はまことに下手だつた。併し、懐ろツ子にしては大變才氣があつたので、文晁は非常に文二を可愛がつた。

文晁は、體は鶴のやうに瘦せた人であつたが、それでゐて精悍強力で、屢々遠國に杖を飛ばした。齡を取つてもよく大酒をした。殊に晩年の性格は曠達不羈に走り、寧ろ傍若無人だつた。杯を啣んで陶然として酔ふと、即ち筆を把つて縦横に晝いた。だから初老以後の作には、壯年

時代のやうな密晝が少なく、筆致は北宗に傾き、滿幅霸氣が漲つてゐた。鹽田士鄂は文晁とは莫逆の交りがあつた。文晁が老年に及んで晝名は益々世に噪がれてゐた頃、士鄂が晝を乞ふと、文晁は「私が二十年前に作つた晝には確かに観る可き物があるが、今は齡も古稀に餘つて、病衰して目が昏むでしまつたから本當の晝は出來ない。已むを得ず描く晝ばかりで、到底知己の爲めに揮毫するには堪へない」と言つてどうしても應じなかつた。

壯年時代迄の文晁は非常に研究心が強く、細心綿密で、しかも極めて博採主義だつたので、目に觸れる物は何んでも取り込んだ。彼は司馬江漢の影響を受けて西洋晝も一と通り研究した。或る年和蘭の甲比丹が八代將軍に西洋の花鳥晝を獻納すると、將軍は是れを嘉納して後に本所の羅漢寺に下賜された。寛政の頃、文晁は是れを見て模寫を試みた。それは長さ九尺幅四尺の絹へ、日本繪具を以て油繪の色彩を出さうとしたのであつて、ほど成功の域に達したのであつた。集古十種の編纂は、樂翁公の趣味であると同時に、文晁の旺盛な研究心の發露でもあつたのだ。

市井の一晝家で文晁ほど澤山の粉本を所藏してゐた人は古來になかつた。渡邊玄對が歿した

時文晁が十兩の香奩を贈ると、女對の遺族の者は香奩返しをどうしたらいいか分らぬので文晁の所へ相談に來た。すると文晁は「私の欲しい物は粉本のほかには何んにもない」と答へたので、渡邊家では女對の秘藏してゐた粉本の全部を文晁に贈つた。

文晁は、和漢のあらゆる流派を統一して別に一家を成した巨匠であつた。彼は綜合的の畫家だつた。だから、其の門下からは種々の傾向の畫家が輩出した。門人數百人のうち最も有名なのが、渡邊華山、田能村竹田、立原杏所、高久齋崖の四人で、是れを文晁門の四哲といふべく、次いで佐竹永海、楠木雲潭、喜田武清、依田竹谷、遠坂文雅、岡田閑林、相澤石湖、江岡坦庵等もそれ／＼當時名のある畫家であつた。

天保十年九月一日、文晁は七十七歳の壽延を兩國の萬八で開いた。其の日の來會者は、當代の名流、文人墨客の名のある者は悉く網羅されてゐたので、會場が狹隘を來し、近隣の龜清樓を借りて支會場とした程の盛會だつた。

それが文晁の最後の活動であつた。

其の頃文晁は中風を發して思ふやうに筆が執れなかつた。妻は數年前に世を去つてゐた。妻

は阿佐子と云つて、後妻だつたが、文晁に嫁いで文二を始めおほぜいの子を生んだ。阿佐子は賢婦人で、豪放磊落な文晁を助けてよく内助の功績をあげた。畫料を受け取るのは勿論彼女の役だつた。文晁が揮毫をする側に附いてゐて、「それは少し丁寧に」とか「これは極くざつ」とかいふ具合に指圖をするのも彼女だつた。そんな風だつたから彼女の在世中は家政も豊かだつたが、歿して後は亂れてしまつた。文二は不肖の子だつた。渡邊華山は彼を評して「文二不肖探信の如し」と言つた。探信は探幽の男である。其の上、母が歿して監督者を失つた後は娘達までが放恣に陥つて兎角失行があつたりした。家道は次第に衰へて來た。其の中で文晁は老病の床についてゐた。

翌天保十一年十二月十四日、文晁の病勢は俄かに重つて、

ながき世を化けおほせたる古狸尾さきな見せそ山の端の月

といふ辭世を残して永眠した。淺草五台山源空寺に葬られ、法名を本立院生譽一如法眼文阿彌居士とおくられた。

文二の代になつてからは家道が全く衰へてしまつた。源空寺の墓地に文晁の墓は建つたけ

池  
大  
雅

傳人畫朝本

れども、さしやかなたとの墓で、龜田鵬齋の碑文を載せた養子の文一の立派な墓とは比ぶべくもなかつた。

(一) 扇 流 し

池大雅は、橋の欄干に凭り掛つて、ぼんやりと川面を眺めてゐた。傾き盡した永い陽脚が其の影を遠く水の上に曳いてゐた。

水は勢よく流れてゐた。早瀬の處では夕陽が鱗のやうに碎けて美しく輝いてゐる。橋の真下は淵になつてゐた。青く透きとほつた水の底に微かに小石が光つてゐる。其處では水が靜かに渦を巻いてゐる。

大雅はさうして無心に水の流れを見てゐた。が、其の橋の上は可成り往來が劇しかつた。西から來る名古屋泊りの旅人は悠々として、馬の脊の上から川の景色を眺めたりして通つた。が反對の方角に橋を渡る旅人は、日暮れ前に次ぎの宿場へはいらなければならぬといつた風に、みんな急いでゐるやうに見えた。から荷を擔いだ青物のぼてふりが、日に焼けた赤い顔をして、地訛りのだみ聲で話し合つて通る。武家が通つたり、順禮が通つたりする。馬の蹄の音が、カタコトと絶えず橋板を鳴らしてゐる。けれども大雅の耳にはそれらの物音の一つさへ響

いてゐないかのやうに見える。

大雅は漠然とした哀愁に包まれてゐた。何んでそんな氣持がするのか深く考へて見やうともしなかつた。たゞ、かう味氣ないやうな氣持になつた。何んだかそれが水の上からでも湧き出てくる心持のやうにも感じられた。

彼は繪を賣る目的で、遙々京都から此の名古屋迄旅をして來たのだつた。繪と云つてもたゞの紙や絹へ畫いた物ではとても買ひ手が無いと思ふから、出來の佳い扇を仕入れてそれへいろんな繪を畫いて持つて來た。京都の名所を寫した山水の圖や、女子供にも喜ばれさうな風俗畫などもある。さうしてそれを一と脊負ひ脊負ひ込んで、名古屋を目當てにやつて來たのだ、處が、今日までかゝつても一本も賣れない。旅費をつかつて、宿錢を拂つて、それで品物は一向減らないのだ。彼は諦めて京都へ還ることにした。名古屋を發つたのが既に七ツ下りだつた。其の橋は楳斐川へ架かつてゐる枇杷島の橋だつた。

繪が賣れないでは困る——には違ひ無かつた。が、そんな事は大して彼の心を苦しめてはゐなかつた。「拙い繪だから賣れないのだ」と考へてもよし、また「賣り様が下手だから賣れないのだ」と諦めてしまつても構はない。どちらも事實だ。自分でも、自分の繪がうまく畫けてゐると思つたことは一度も無い。が併し彼よりもつと／＼ずつと下手な繪畫きの畫いた繪だつて商の仕方が上手なら幾らでも賣れてゐる。うまい繪の畫けないことは悲しいけれど、自分はまだ若いのだから仕方が無い、と考へる。生涯繪が上手にならないとはきまつてゐない……。

「そんなことは分り切つたはなしだ、それなのに何故俺は恁んな味氣無い氣持になるのだ……？」

大雅は、ぼんやりそんな考へに耽つてゐた。いつまで経つても考へは解けなかつた。段々重苦しく氣分が減入つて來て、體まで水の中へ吸ひ寄せられるやうな氣持がした。さうしてゐる彼の後ろ姿や横顔をば、何んだか迂散臭さうな眼で見遣り乍ら通り過ぎる者もあつた。

大雅は何氣なく、手に持つてゐた扇をひろげて見た。それにも自作の繪が載つてゐた。彼は一寸其の繪を眺めて見たが、直ぐ詰まらなくなつたので眼を離して、指先でそれをおもちやにしてゐた。涼しい風が橋の下から吹き上げて來た。

「あッ——」

と思つた時、彼は手を滑らせて扇を落してしまつた。扇はヒラ／＼と空中を舞つてゐた。白い蝶々が一羽舞つてゐるやうだつた。最後に扇はクル／＼と二つ三つ大きく廻つて川の流れの中に落ちていつた。渦巻きの上だ。扇は靜かに水面に浮かんで泡と一しよに漂つてゐた。が暫らく経つと、つと輪の外へ突き出されて、今度は水流と一しよに威勢よく走り始めた。早瀬の上を、扇はフハリ／＼とさも楽しさうに流れて行つた。

大雅はじつとそれを見送つてゐた。到頭扇は見えなくなつてしまつた。大雅は其の時莫迦に面白い事を發見したやうな氣持になつた。

「もう一本流して見やう」

彼は脊負つてゐた荷を卸して、風呂敷を解いて、箱の中から新らしい扇を一本取り出した。さうしてそれを展げて川の上へ投げた、扇はクル／＼と舞ひ乍ら水の上に落ちて、渦に巻かれて、それから今度も同じく瀬の方へ流れて行つた。大雅は益々面白くなつた。沈んでゐた心が急に明るく引き立つて来て、子供のやうに楽しい氣分になつた。自分の畫いた繪が金で買はれずにしまつて、恚うして綺麗な水の上を何處ともなく流されて行くといふことが、それ自身に

適はしい運命だと云つたやうな氣持もするのだつた。

「もう一本流して見やう」

大雅はさうして扇を流し流しゝた。最後に箱の中には一本の扇も残らなくなつた。

大雅は京都の生れだつた。父は菱屋嘉右衛門といひ扇屋を商賣にしてゐた。大雅は享保八年に生れた。通稱を秋平と云ふのだつた。秋平は三歳の時にほゞ字をおぼえて、五歳になるともう立派に字を書いた。其の年のこと、黄蘗泉堂禪師の前で揮毫をして禪師を驚かしたりした。

「菱屋に神童が出来た」

と言つて世間では専ら評判をした。父の嘉右衛門は寧ろ貧しい暮しはしてゐたが、相應に風流心を有つてゐる人だつたので、我が子の將來に矚目して益々學問を奨励した。秋平は字を習つたり、書物を読んだり、それから土佐光芳に就いて畫を習つたりした。が、自分では繪が一番好きだつたので繪畫で身を立てることに決心した。最初は土佐繪ばかり畫いてゐたが、少し歳がいつてくるとそれではあきたらなくなつて来て、漢畫の研究を始めた。丁度其の頃は、南宗風の文人畫が芽をふき始めた時代で、和歌山の祇南海、江戸の服南郭、郡山の柳里恭等各

々名聲を馳せてゐたので、大雅はそれらの影響を受けたのであつた。十六歳の時初めて柳里恭の門を叩いて其の教へを受けた。それ以來大雅の畫風は一變して同時に著しい進歩を遂げた。處が、間も無く彼の身の上に大きな不幸が見舞つて來た。それは父嘉右衛門の死だつた。彼は自分の腕で老いたる母を養つて行かねばならなくなつた。繪では到底生計は立たないので、父の業を繼いで扇を商ふ傍ら器用で覺えた石印の彫刻などもやつて、どうやらかうやら其の日を送つてゐた。

其の家は二條の樋口にあつた。大雅は商賣をしながら不相變畫を習つてゐた。賣り物の扇へ繪を畫いたりしはじめたが何しろ商賣が下手なので暮し向きの骨が折れることは一通りでなかつた。おまけにどういふものだから彼は借りた物はキッチン／＼と拂ふけれども、貸しを催促するといふことを知らない男だつたから、賣れた處で算盤は採れないのだつた。非常に親孝行だつたけれども、性分がそんな風なので獨りの老母をさへ養ふことができ兼ねる有様だつた。老母は大概親類へ行つてゐた。

大雅は折り／＼店を閉めた儘旅へ出た。繪をかけた扇などを持つて行商をするのだつた。併

し、一旦出たとなると何時歸るか分らなかつた。二月三月留守をするからと云つてくれ／＼も頼んで行つたかと思ふと、直ぐ翌日は舞ひ戻つて來て其の小さな店に座つてゐるやうなことがあつたり、さうかと思ふと、二三日で歸ると云つて出た儘一と月も二た月も戻つて來ないやうなこともありがちだつた。

或る年も大雅は旅に出た儘歳末になつても還つて來なかつた。そこで老母や親類の者は彼の留守宅へ行つて帳面を調べて書出しをこしらへやうと思つた。そして帳面を出して見ると漢文で書いてあつて、おまけに其の字は篆書だつた。

「何んだい、是れは」

呆れてしまつて、誰れにも讀めないのので弱つた揚句に、近所に龜屋太助といふ人で一寸物識りがあつたので其の人を頼んで讀んで貰つたが、太助先生でも漸う半分位しか解らなかつた。大雅が旅から戻つて來ると、

「商ひの帳面だけは篆書で書かれては困る、お前の留守に是れ／＼だ」と小言を云はれたので、



「さうでしたか、では是れから篆書は止めませう」と大雅は言つて謝まつた。

其の後は彼は帳面を楷書で認めた。が、文句が變つてゐて、例へば、

中等扇三柄。某先生携歸。估直既濟。或ひは未濟。

といった風に書いてあるので、老母や親類の者には矢張り讀めはしなかつた。

其の後老母も死んで大雅は今全く孤獨の境涯になつた。

## (二) お百合茶屋

或る人が大雅に勸めて言つた。

「一つ祇園の境内へ店を出して繪を賣つて見たらどうです、彼處へは京見物に來た諸國の人が參詣に行くから、土産に買ふ人もあるでせう」

大雅は、成る程それは名案だと思つたので、早速神社へ頼んで境内へ露店を出さして賣ふことになつた。格別準備も何も要らない。筵を二枚ばかり持つて行つて敷いて、前の方へ扇を十本ばかり並べた。自分は其の後ろへ座り込んで、白扇だの唐紙だのを側らへ引き寄せて、特別

の注文があれば直ぐに畫くばかりの支度をした。さて、さうして座つてゐて見たが、最初の日  
は一枚も賣れなかつた。彼は其の場で辨當をつかつて、根氣よく座り續けて、夕方になると店  
を片付けて我が家へ歸つた。

それから大雅は毎日祇園の境内へ出張つた。雨さへ降らなければ缺かさず其處へ行つて座つ  
てゐた。さうすると偶には繪が賣れた。併しそれは實に稀れだつた。彼の店の前で足を停めて  
扇面の繪を一寸見下して行くだけの人は無數にあつた、が人々は、次ぎに其處に座つてゐる若  
者で、眞つ黒く日に焼けた顔をして、頭髮を亂して、垢染みたポロ／＼の布子を着てゐる哀れ  
な畫工の姿を見ると、輕蔑したやうな眼付きをして見せるか、或ひは詰まらないと云つたやう  
な顔付きをして、さつさと立ち去つてしまふのであつた。「乞食繪師」「大道畫工」さう云つた  
やうな言葉が地べたへ吐き捨てられた。

併し當の本人は一向平氣な顔をしてぼかんとして座つてゐた。賣れても賣れなくても、何時  
でも同じ様な顔をしてゐた、頭の上に青葉が茂つて、其處では蟬が喧ましく鳴いてゐた。

祇園神社の門前で茶店を營んでゐる百合といふ寡婦があつた。百合には一人の娘があつて町

と云つた。其の茶店は町には祖母になる梶といふ女の代から引き續いてゐたのだつたが、梶も百合も、さういふ身柄には似ず風流心に富んでゐて、就中和歌をよくして、其の道では随分世間に知られてゐた。梶は「梶の葉」百合は「早百合葉」といふ歌集を出した。百合は書も巧みだつたので、彼女の店へは短冊などを持つて揮毫を乞ひに来る者も澤山あつた。さういふ風でさうやかではあるけれど氣樂に世を送つてゐた。

主婦の百合はまだ卅幾つといふぐらゐの年頃で、娘の町は漸う十二三だつた。百合も娘時代から美人として鳴らした方だつたが、町は母親に似てそれよりも美しくなりさうだつた。容貌ばかりではなく性質も祖母や母の血を享け、學問が好きで、歌や遊藝をも母親から教へられて子供とは思へない程に上達してゐた。

近頃境内へ大道店を出した大雅の姿が百合の眼に付かずにはゐなかつた。百合は親切な女だつたので、大雅の繪が一向賣れないで困つてゐる様子を見て氣の毒に感じて、或る日其處へ行つて二三枚繪を買つて遣つた。そして初めて其の畫工の作を手に取りつて見て百合は駭いた。山水でも人物でもそれは決して凡手ではなかつた。殆んど老大家の墨を摩する程の筆であつた。

「是れ程の腕を持つてゐる畫工であり乍らどうして恁んな事をしてゐなければならぬのだらうト」

併しそれは直ぐに百合には解ける疑問だつた。藝道で身を立てる者には運不運が甚だしくある。又どれ程優れた手腕を有つて居る者でも、其の人間の名前が世に識られぬ間は作品が行はれない。力量ばかりで出世が出来るものではないといふことが百合にはよく分つてゐた。それだけに彼女は此の不遇の青年畫工に對して衷心からの同情を呼び起こさせられた。

「先生のお宅はどちらでございますか」と百合は畫工に話しかけた。

「二條の樋口に住まつて居ります」

「毎日お通ひで御精が出ますこと。併し、お作は賣れますか」

「一向買ひ手がございません」

「ほゝゝゝ、では御商賣になりませんね、生意氣なやうでございますけれど、先生の繪は大道で商ふには上等過ぎるので、それで反つて賣れないんでございませうよ」

「否、拙過ぎるのです。立派な座敷へ掛けて見せる繪は、拙くても佳く見えますが、恁ういふ

場所て庭の上へ並べて見せるには、よく／＼うまい繪でないと人が見て呉れません」

「成る程」と百合は感心した。畫工は全く謙遜して言つてはゐるが、併し立派な座敷へ掛つてゐる繪と比較して、大道で賣つてる自身の繪が決してそれに劣つてゐるとは思つてゐない、其の高い氣位が百合の心を動かした。

「是れを御縁に折り／＼お話を伺ひ度うございます。わたくしは御門前に茶店を出してゐる百合と申す者でございます」

「お名前もお顔もたうから存じて居ります」

「おや左様でございましたか、それは失禮致しました、どうぞお歸りがけにでもお寄り下さ  
すね」

「有難うございます」

百合は繪を持つて行つた。

畫になつたので大雅はそろ／＼辨當を食べやうと思つてゐる處へ、十二三歳の美しい娘が盆に茶を載せてそれへ持つて來た。

「母が先き程は失禮致しましたと申しました。番茶でございますけれども何卒お上り下さいませ」

女歌人の娘はさう言つてしとやかに盆を庭の上に置いた。

「これは／＼御親切に有難うございます、遠慮なく頂戴致します」

大雅は娘に向つて丁寧な頭を下げて禮を言つた。それから辨當を食べてしまふと、又娘がやつて來て茶道具を運び歸つた。

大雅は店を仕舞つてから道具を抱えて百合の店へ禮に行つた。

「おや、先生お仕舞ひでございますか、よく入らつしやいました、さあ／＼お掛け下さいませ」

と、女主人は飛んで出て下へも置かないやうに歓迎するのであつた。

それから後百合は毎日娘に茶だの菓子だの持たせて遣つて畫工を慰めてやることにした。折り／＼は繪も畫かせて其の生活を補助してやつた。さうしてゐるうちに、

大雅の人物や畫の技倆を彼女は十分に認めさせられた。

「將來必ず名を成す人だ」と百合は思った。

或る時百合は大雅に向つて、娘の町子の聲になつて貰ひ度いと言つた。大雅は驚いた、が素より寄るべのない身の上である、百合の知遇にそむくこともならなかつた。彼は喜んで其の申し出で承諾した。併し町子はまだ子供で結婚の式を擧げるには早過ぎた。それに百合もまだ老婦といふではなかつた。大雅は結婚前の期間を善用して遊歴の旅に出たいと云つて母に願つた。百合は快くそれを許して、道中の費用を與へて心置きなく旅をさせた。

大雅は遍く六十餘州を歴遊して、七年の後に京都へ還つて來た。そして町子と結婚の式を擧げた。大雅は其の時廿七八歳になつてゐた。

(三) 柳里恭

大雅の畫風が純粹の南宗の精神を體得して來たのは、彼が柳里恭の紹介に依つて、紀州に行つて祇南海を訪問した後のことだつた。其の時大雅は三十歳だつた。彼は熊野に詣で、それから和歌山へ行つて南海に會つた。南海は大雅の才を認めて大いに其の前途に矚目した。大雅が

南海に向つて南宗畫の眞髓を問ふた時、南海はかねて秘藏してゐた處の清人蕭尺木の畫譜を取り出して大雅に與へて「足下は此の書を研究して文人學士の畫を作るがよい」と言つた。大雅は非常に喜び、日夜畫譜を手から放さず、それから彼の畫は長足の進歩を遂げたのであつた。柳里恭とは、十六歳の時初めて相まみえて以來引き續いて其の指導を受けてゐた。漢畫の設色法を大雅は里恭から學んだのであつた。

柳里恭は、郡山柳澤氏の同姓の一族で、通稱權太夫、淇園と號し、藩の老臣に列してゐた。彼は性質濶達洒落で、客を好み、訪ねて來る者があればどんな人間でも留めて養つて置いた。文武兩道に秀で、其の多藝多趣味なることに於ては古今に卓絶してゐた。彼は人の師たるに足るべき藝が十六あつたと云はれてゐる。文章に達し殊に畫をよくした。最も得意の圖は設色の密畫で好んで人物花卉を畫いた。

淇園の家には年中絶えま無しに食客がごろ／＼してゐた。其の爲めに家祿をつかひ盡して常に貧乏してゐた。食客の種類は千差萬別であつた。或る時は街道へ出張つてゐて、廻國の順禮だの道者だのを見付けて屋敷へ連れて來て逗留させたり、三味線ひきの女乞食を呼び入れて自

分で其の三味線を弾いて見たりしたが、中には、洪園が槍を立て大勢の供をつれてゐる有様を見て、是れはてつきり刀試しをされるんだらうと思つて逃げてしまふ者もあつた。博突の罪で追放に行はれる者があると、役人に賄賂をして其の者を自分の屋敷へ伴れて來て頗る鄭重に取り扱つて留めて置いた。どうするかといふと、めい／＼に金を與へて博突の技術を圖はせて、傍らでそれを見物して楽しむのだつた。

或る年のこと大雅は大和の方へ旅行をしたが、途中で旅費が盡きてしまつたので郡山へ行つて柳里恭から金を借りて京都へ歸らうと思つた。そして訪ねて行くと、洪園は大いに喜び勿論旅費は直ぐ貸して呉れたが、

「まあ／＼久しぶりだからゆつくり遊んで行つて下さい」

と言つて引き留めるので、大雅は實は一日も早く京都へ歸り度いのだが、金を借りた手前もあり振り切つても立ち去れず、「それでは一兩日御厄介になりませう」と言つて足を停どめた。洪園は終日大雅を相手にして書畫の談を聞はしてゐるのである。二三日経つて大雅が暇を告げやうとすると

「まあ／＼宜しいだらう、もう二三日お遊びなさい」

と言つてゐてもどうしても歸して呉れない、仕方が無いから又二三日逗留して、今度こそ歸る決心で暇を告げると、

「實はまだお話し申し度い事がある、折角おいで下すつたことだからもう四五日お遊び下さ

51

と主人が言ふ。無理矢理振り切つて歸らうと思つた處が、表の門をびんと閉めてしまつて出して呉れない。仕方が無いから又家の内へ戻つて云ひなりに逗留してゐた。

すると或る日のこと、用人の某といふ者が大雅の居る處へ來て、

「實は手前共の主人の事について、大雅先生に折入つてお頼み申し度い儀がございますが、御承知下さいませうか」

と改つて言ひ出した。

「どういふお話でございますか、まづそれを承はつた上で」

「實は甚だお話し申しにくい事でございますが、當家の主人と申すのがまことに婦人を寵愛

なされますので——」

「はアはア、それは結構な事で」

「否、それが程よくなされば宜ろしいのですが、主人のは何分劇しいのですが、それからそれと交る／＼毎晩婦人をお近付けになりまするが、御壯年の頃とはちがつて最早お歳がお歳でございますから、あれではお體に障らうと申して、家内一同心配致して居るのでございます」

「ちとお憤みあるやうお諫め申したら宜しうございませう」

「吾れ／＼がいかにお諫め申してもお聞き入れがありませんのでして。其處で此の頃も一同で相談致しましたが、大雅先生ならば主人とは別してお親しい間柄ではありよくお話しも合ふことでございますから一つ先生から折を見て主人に御異見下さるやうにお願い申したいのでございますが——」

と三太夫は額から汗を流して言つた。

「それは、ちと、どうも、迷惑なお頼みで——」

「御尤もで。併し、先生より他には此の事を頼む人は無いのでございますから、其處を是非共御承引に預り度いので」

用人が頻りに懇願するので、大雅も厭だとは云へなくなつてしまつた。

「それでは一つお話しして見ませう」

と大雅は引き受けてしまつた。用人は大變喜んで退つて行つた。後で大雅はいろ／＼諫めの言葉を考へて見たが、東西古今の學を究め、其の上世態人情の百般に通じてゐる此の家の主人に向つて言ふとしては、適當の言葉が思ひ付かなかつた。が、一旦引き受けたことだから其の儘には済まされない。で、淇園に向つて其の事を話すと、淇園は「あは／＼」と笑つてゐて何んとも答へなかつた。

「此の後お憤み下さるでせうか、いかゞでせう」

と、大雅は問ひ詰めた。

「折角の御親切だが、そればかりは、承知致したと云ひ兼ねる」  
と淇園は笑つて答へた。

「それではわたくしの立場がございません、わたくしは只今お暇を頂くことに致しませう」  
 「否、まだ今日はお歸し申すことはならん」

「ではわたくしの御異見をお聞き入れ下さいまし、お聞き入れが出来なければ歸らせて頂きませう。さあ、どちらかにお決めを願ひ度うございます」

「女も近付けぬとは申されんが、お身もお歸し申すことは相成らん」

大雅は呆れ返つて匙を投げてしまつた。是れでは到底歸しては貰へないと思つたので、彼は夜陰に乗じて裏の塀を乗り越えて逃げ出した。

町子は、洪園の別號玉桂の一字をもらつて玉瀾と號した。彼女は夫に學んで畫は頗る上達した。

大雅は禪を好んで常に其の修養を怠らなかつた。寶曆元年たま／＼白隱禪師が備中に赴いて其の歸途京都に駐錫した。大雅は其の時二十九歳であつたが直ちに往つて座下に參禪し、左の一偈を白隱に呈した。

耳豈得聞隻手響

耳能沒了尙存心

心能沒了尙難得

却識師恩不識深。

大雅の畫は禪の影響を受けて更に幽遠の氣を帯びて來た。

其の頃から、世人の嗜好が漢畫に移つて、畫壇の流行は茲に一變して來た。大雅堂の名聲は俄かに擧つた。

(四) 玉

瀾

大雅は洛東眞葛ヶ原に草堂を結んで、妻の玉瀾と共に住まつてゐた。玉瀾の母は、娘が結婚してから三年程経つてみまかつた。大雅は其の形見の茶店を残して置いて、夫婦で交る／＼出張して參詣の人に茶をすゝめてゐた。

畫名は擧つたけれども、大雅は性得金錢の慾の無い男だつたから、大家になつたからと云つても貧乏は依然たるものだつた。

客が畫料を持つて來ると、家の入口に置いてある水甕を指差して、「どうかそれへお入れ下さい」と言つた。

それから薪屋だの米屋だのが勘定を取りに来ると、

「其の水甕の中に錢があるから出して持つて下さい」と言つた、

錢をつかふことも嫌ひだつたから、どうかするとそれでも小錢が溜まることがあつた。或る年祇園の社の修繕を行ふことになつて門前の者にはそれ〴〵寄附を割り當てたが、大雅が貧乏なことは世話人も知つてゐるので、彼の處へは僅か三百文しか割り當てゝ來なかつた。處が、大雅はかね〴〵茶店の上り錢や畫料の金のうち不用の分だけを押入れへ藏つて置いてあるのを思ひ出して、妻に向つて、

「不用の錢をあゝして藏つて置くのも無益だから、此の際全部お社へ上げてしまはふではな  
るか」と言ふと、

「それはよい處へお氣が付かれました、それが宜ろしうございます」

と玉瀾も賛成したので、二人で押入れから出して勘定して見ると錢が三貫文餘りあつた。夫婦は喜んで、それを二人で分けて脊負つて、神社へ納めに行つた。

其の家はごく狭くて、八疊ばかりの座敷に一寸した取次ぎの間が附いてゐるだけだつた。其

處に紙だの絹だの書物だのが一面に充滿してゐて客があるとそれを押し分けて座らなければならなかつた。

或る人が大雅を訪問して、雑談に時を移し、夜が更けたので一泊することになつたが、玉瀾がのべて呉れた夜具蒲團を見ると相應な郡内綿で、其の襟に少し垢が附いて汚れてゐた。

「はゝあ、此の家でも時々泊り客があると見える」

其の人はさう思つて寢てしまつた。が、夜半に眼を醒まして、廁へ行き度くなつたが勝手が知れないので、大雅に案内を頼まうと思つて、

「御主人、御主人」と呼ぶと、

「はい、只今」

と言ふ聲がして、取次ぎの間の毛氈の下からコロコロと轉がり出た物があるから、見るとそれが大雅だつた。客は喫驚して「御内室は」と尋ねると、

今度は、諸方から頼まれて溜まつてゐる紙や絹を積み上げた中から、玉瀾がムク〴〵と起きて來た。



曾我蕭白と大雅とは非常に仲善しだつた。絶えず往來を續けてゐた。蕭白は伊勢の人だが、畫を以て京畿の間に放浪してゐた。はじめ畫を高田敬輔について學んだが、後に曾我蛇足を慕ひ、みづから蛇足十世と稱し、また蛇足軒と號して、其の遺鉢を傳へてゐた。彼は性甚だ剛直で狷介、やゝともすれば人に忤つた。で、世間では狂人扱ひにしてゐた。併し、蕭白の意志は狩野雲谷末派の衰頽墮落を憤つて、其の本に返つて、東山時代の骨髓を發揮しやうとするのにあつた。けれどもそれらの畫風は其の本末を問はずでに世人から飽かれてゐて、當時の畫壇に何か別に清新な物を要求する氣運が鬱勃としてゐた時代であるから、蕭白の復古的な畫風は更に人々からよろこばれなかつた。そこで彼の多血多根の性質は益々屈して、世を憤り、人を罵り、其の畫は殊更に怪醜を極めて、一見悽愴の氣が迫らずにはゐないやうになつて來た。蕭白が人物を畫くと容貌は怪物のやうで、手足は岩石みたいだつた。山水草木を畫いても同じやうで、何處ともなく一道の鬼氣が立ち昇つてゐるかのやうに感じられた。或る夏、納涼の遊をした時、勝山琢舟が舟橋を畫いて欄干を附けたのを見て、蕭白は大いに罵つて、「京都の繪師の名折れだからすぐ畫き直せ」と言つた。處が琢舟は「是れは探幽の圖に倣つたのだ」と言つて

負けてゐなかつた、勝山琢舟は山崎如流の門人で夙く一家を成し、法橋となつて、後に畫風を變じて土佐を學び、春日給所となつて一方に重きをなした畫家であつた。兩人は互ひに争つて言ひ募つた揚句、蕭白は脇差を抜いて琢舟に切りかけた。が、傍らの人々が支えたので漸う無事に納まつた。

また或る時、本願寺の法主が使者を蕭白の許へ遣はしたことがあつた。其の時使者は傲然として戸を叩いて、

「蕭白は在宅であるか」と言つた。

すると蕭白は家の内から、

「たゞ蕭白といふ蕭白は居らぬ」と答へた。

さういつた傲岸不屈な男だが、不思議に大雅とだけは親善だつた。或る時も大雅は人から蕎麥粉を貰つたが、かねて蕭白が蕎麥が好物であることを知つてゐるので、「到來の蕎麥を馳走するから來て貰ひ度い」と言つて遣つた。蕭白は喜んでやつて來たが、來ると例に依つて談論盡くる處を知らないで、何時の間にか主客とも蕎麥のことは忘れてしまひ、そのうちに日が暮

れた。

「大分腹がへつて来た。これ〱町や、何もあるまいから茶粥でも拵へたらよからう」と主が言つた。

それから主客は玉瀾が拵へた茶粥をすゝつて、また再び話し出した。蕭白が暇を告げて起つた時分は夜半近かつた。表の戸を明けて見ると、星一つ見えない眞の闇夜だつた。

「これは暗い、どうか提灯を拜借したい」と蕭白が言つた。

大雅の家には提灯が無かつた。以前あつたこともあるが、誰れか〱持つて行つたきり返してくれないので其の後は無かつた。

「あいにく提灯は無いが——」

大雅は灯のはいつた行燈を提げて来て、

「是れではどうでせう」

「いや結構々々、では借用して參らう」

蕭白は行燈を提げながら歸つて行つた。

玉瀾は、誰れよりもよく自分の夫を理解してゐた。彼女は大雅の妻として最も適はしい女であつた。それは彼女の親ゆすりの性格でもあつたが、また同時に夫の人格に同化されて一層似合はしくもなつたのだつた。彼女は常によき妻であると共に、一番よい友達でもあつた、夫婦の間に子がなかつた。彼らはいくつになつてもいつも新婚の夫婦のやうに睦まじかつた、大雅は三味線が好きだつたので、三味線をひいて寂びた聲で唄をうたふと、妻は箏を弾じてそれに合せて楽しんだりした。身なりなどは少しも構はなかつた。彼女は夫と共に、冷泉爲村の館へ招かれて歌を學んだが、最初に參つた時、冷泉家の女房達は、玉瀾の名前が高いのでどんな婦人が来るだらうと思つて、今か〱と待つてゐる處へ、これはまた思ひ切つて糊のこわい木綿の着物で、土産の魚籠を提げてやつて来た其の様子は、何んのことはない草鞋をはいてゐない大原女のやうだつたので、みんな驚いてしまった。歌を學びに来たのも、大雅が高名の畫師なので冷泉家のはふから招いて呼んだのだつた。そのうへ貧乏な畫師のことだから、ほんの禮儀だけのことをしたらそれでも構はないのだが、季節々々の御禮物は世間の人よりもすつと立派にと〱のへて持つて来た。或る時爲村が戯れに玉瀾に紅の前垂れを賜はると、玉瀾は喜んで春に

なるとそれを掛けて母の形見の茶店へ出たりした。

或る時大雅は大阪へ行くことになつて我家を出たが、家を出る時筆を携へることを忘れて行つた。後から玉瀾が見付けて筆を持つて走つて行くと、建仁寺の前で漸う追ひ付いた。

「もしもし、あなた、筆をお忘れでござります」

大雅は驚いたやうに振り返つて、

「これは、どちらのお方が存じませんが、よう拾つて下さいました」

と言つて、筆を受け取ると押し戴いて、さつさと歩き出した。玉瀾も黙つて歸つて來た。

性來寡慾恬淡の大雅は、理想の妻を得て、其の上子孫を慮る必要の無い境涯だったので、全く利慾の觀念から超脱してしまつた。彼は奇行百出を以て世を驚かした。しかし、彼自身では些かも人を驚かせるつもりで奇行を演じるわけではなく、それは悉く彼の正直な感情の發露で、所謂天真爛漫であつた。彼の行ひは、外見は疎放であつたが、内は頗る修實で、殊に禮儀を失はなかつた。嘗て或る富豪が揮毫を依頼したが、頼んで間もなく繪を取りに寄越した。「まだ出來ません」と言つて使の者を歸したが、幾日も経たぬうちに又遣つて催促をした。今度も同じ

様に言つて歸すと、それから蒼蠅く使を寄越して催促をした。餘り蒼蠅いので打つちやらかして置くと、或日も其の使がやつて來て「繪が出來ましたか」と言ふ。例に依つて「まだ出來て居りません」と答へると、使の者はふくれ面をして澁々と歸りかけたが、門口を出てから聲と聞えよがしに、

「チエツ、へぼ繪かきめが、人に幾度足を運ばせる積りなんだ。全體已惚れてるのか、懶け者なのか知らないけれど、餘り人を馬鹿にしてゐやあがる」とつぶやいた。

大雅は「はッ」と思つた。彼は決して自惚れたり人を侮つたりしてゐるつもりではなかつた。たゞ、富豪の權柄づくが氣に入らなかつたから繪を畫かなかつたのだ。併し、自分が繪を畫いて遣らないばかりに、此の無關係の使の者は、たとひ彼の足がすり切れてしまふ迄も此處へ使に寄越されなければならぬのだといふことには思ひ至らなかつた。

「もし、お使の方、一寸お待ち下さい」

大雅は使の者を呼び返した。

「お前さんが今言ひなすつたことは道理です、わたしが悪るかつたから勘辨して下さい。さ

あ、直ぐに繪を畫いて上げませう」

大雅は其の場で筆をとつて畫き上げて持たせて遣つた。

冷泉爲村が病に罹つた時、大雅は毎日其の門前まで行つて病狀を伺つて歸つた。彼は人情に厚く、思ひ遣りもあつた。或る書林の手代が放蕩をして主人の金を費ひ込んだ廉で放逐されて他國へ行くといふ際に、大雅の許へ暇乞ひに來た。で、懇々と話して見ると本人は非常に後悔してゐることが分つた。大雅は氣の毒に思つて救つて遣らうと考へたが、可成りの金額だつたので、自身の愛藏してゐた書畫や調度を賣り拂つて其の金を辨償して、主人に詫びを入れて歸參を叶つて遣つた。

清廉潔白な人間ほど不正を憎む念も強いものである。大雅がさうで、破廉恥の行爲をする者に對しては寸毫も假借しなかつた。彼の門人の一人が師匠の贋畫を作つて賣つたのが知れたことがあつた。大雅は非常に怒つて直ぐ様破門してしまつた。其の門生ももと／＼貧困から犯した罪だつた。で門生の爲めに代つて詫びる者もあつたが、大雅は斷じて許さなかつた。「實は天命である、恥を知らぬ者は人間でない」と言つて彼は罵つた。

### (五) 原宿の屏風

大雅は日本の文人畫を創成して、一代の師宗と仰がれた。眞葛ヶ原の草堂には畫の依頼者が門前に市をなした。大雅堂の名は遠近に轟いて其の畫風は一世を風靡した。

大雅が最も得意とするのは山水の圖であつた。人物も畫いたが、其の形狀が甚だ奇古であつた。山水でも人物でもすべて飄逸怪奇の筆であつた、變幻出没捕捉すべからざるものがあつた。一見極めて醜陋の畫のやうで、よくよく見ると、其の筆意の妙と氣品の高さが人の心を撲つのであつた。殊に晩年に至つては、筆を走らせ、墨を飛ばして、奔放縱横の畫を好んで作つた。併し其の畫は、一氣に塗抹したやうに見えるけれど、其の實は一筆を下すことに慘澹たる苦心が籠つてゐた。彼は好んで旅行をして、山川の狀態雲烟の變化をつぶさに研究し、その骨髓を抜いて筆で現はしたのだつた。

大雅はかやうに有名になつたけれども、相變らず清貧に晏如として暮してゐた。金に依つて畫を作るといふことはなかつた。また權門に威壓されるといふこともなかつた。心が向けば誰

にでも直ぐに盡いて遣つた。平常澤山墨を摺つて置いて「さあ」と云へば何時でも盡けるやうにしてあつた。あきうどの掛行燈のやうな物でも頼みになれば快く盡いてやつた。其の頃の洛中に大雅堂の掛行燈が澤山出來た。或る男が

「風藥を賣らうと思ふのですが、何かうまい看板を畫いて戴き度い」

と言つて來た。大雅は一寸首をひねつて考へてゐたが、筆を取つて、

「風藥のみて直らぬ風の藥」

と書いた。どういふ譯かと尋ねると、

「いろ／＼の風藥を用ゐても直らぬのを治す風の藥、といふことです」と大雅が答へた。

其の男は喜んで是れを掛けたところが、看板が奇抜なのを見て買ふ人が多くて僅かの間に大變儲けた。

春のことだつた。大雅はブラツと市中へ出ると、人から嵐山の櫻が昨今花盛りだといふはなしを聞かされたので、急に行つて見たくなつて出掛けた。終日花を見て歸路についたが何分腹がへつてゐた。何か買つて食ひ度いと思つても錢を持つてゐなかつた。仕方がないので空き腹

を抱えてやつて來ると路傍に飴屋が店を出してゐた。大雅は飴屋の店へ立ち寄つて、「私はかういふ者ですが」と名乗つて、

「あいにく錢を持つてゐないけれど、何分空腹でならないから飴を少々食べさせて貰ひ度いものです」と言つた。

「さうですか、さういふわけならお上んなさい」

と言つて飴屋は快く飴を食はせてくれた。大雅は矢立を抜いて半紙に風景の畫を畫いて、

「お蔭で助かりました、お禮に此の繪を上げませう」

と言つて置いて立ち去つた。飴屋は家に歸つて或る人に其の話しをすると「其の繪師の名前は何んといふ人だつた」と訊かれたので「確か大雅堂とか云ひましたよ」と答へると「大雅堂なら大した物だ、なか／＼手に入る物ぢやないから安く放してはいけないよ」と教へられた。翌日になると飴屋の處へいろんな人がやつて來て其の繪を賣れと言つた。飴屋は其の中で一番値よく買ふ人に賣つて思はぬ金を儲けた。飴屋は考へた。

「恁んなうまい事はない、飴を賣りに出るより餘つほど割りがいい、今日は一つこちらから

行つて書いて貰はふ」

飴屋は早速大雅堂へ出掛けて行つて「もう一つ繪を畫いておくんなさい」と言つた。大雅も是れには弱つた。

「飴屋さん、飴は毎日しやぶれなす」

或る年、高野山の清淨心院が火災で焼けて、其の後堂宇の新築が悉く落成した。すると或る日のこと一人の男が女關へ來て、

「わたくしは京都の畫工池野秋平と申す者ですが、此の度御普請について、お座敷向きやお廊下の繪を畫いて奉納致さうと思つて參りました」と述べた。

取次ぎの者が此の事を院主に傳へると、院主はもとより畫工を渴望してゐた處だつたから、早速呼び入れ對面して、畫の次第を悉く頼んだ。畫工も大いに喜び「然らば明日より取り掛りませう」と言つて、さて翌日になると唐かみの繪から始めたが、人物畫はいゝが、其の人物の恰好が首ばかり大きく、足がばかに細くて、不恰好なこと此の上もない。院主は大いに案外で「これは飛んでもないへボ繪かきを頼んでしまつた」と後悔してゐた、すると今度は、一枚に、

松樹一株に茅屋を寫し、其の屋の窓の中に人物があつて、山水に對する圖を作つたが、是れもまた人物の首が窓一杯に見えたので、院主はます／＼呆れてしまつて斷りを言はふと思つてゐる處へ、知り合ひの上方の人が來合はせて其のはなしを聞いてこつそり覗いて見ると、まぎれもない大雅堂だつた。院主は

「どうですあきれたもんでせう」

「どうして、どうして、あの人は有名な大雅堂です、私は一二度會つてゐるから間違ひはありません。當節大雅堂の繪と云つては金を何程出しても容易に得難い物です、大した物です」と其の人が言つたので、院主も半信半疑ながらやうやく得心して最後まで畫かせた。其の畫は後世に残つて高野山の一大奇觀となつた。

それと似たやうな出來事があつた。

或る年のこと、大雅は江戸迄行く用事があつて東海道を下つた。駿河國を通つて終日富士の絶景を賞して、日が暮れて原宿の旅籠屋へ泊つた。が、晝間見た富士の姿が心の中を往來して眠ることが出來なかつた。彼は畫き度くて畫き度くて溜まらなかつた。と見ると、枕許に白張

りの二枚屏風を立てゝある、田舎の經師屋の仕立てた物で野暮な拵へだが、まだ出来てきたばかりと見えて素新らしかつた。

「是れはいゝ物がある」

と大雅は思つた。主人に頼んで畫かせて貰はふか、どうしやうと考へたが、頼んでも承知して呉れるやうなことはない。

「構はない、畫いて仕舞へ」

大雅は、家人が寢靜まるのを待つて、墨を搦つて、屏風一面に富士山を描いた。それは我れ乍ら美事を富士だと思はれた。

「あゝいゝ氣持だ、是れで胸がせいゝした」

大雅は筆を投じて床に這入つたが、無斷で屏風をよごしたことを家の者に發見されては事面倒と思つたので、翌朝未明に起きて朝飯も食はずに發つてしまつた。

「旦那様大變です、三番へ泊つたお客様が屏風へ墨を塗つて行きました」

朝、部屋の掃除に行つた下婢が慌てゝ二階から降りて來て、帳場に居た主人に向つてかう言

つた。

「何！ 屏風へ墨を塗つた」

主人も喫驚して直ぐに三番の部屋へ行つて見ると、成る程下婢が言つた通り、大事の屏風へベタ／＼に墨が塗つてある、がよく／＼見るとそれはたゞ墨を塗つたわけではなく、富士山の繪が畫いてあるのだが、山の頂上を無闇に大きく畫いてしまつて、それへ雲だか何んだかベタ／＼墨が塗り付けてあるばかりで、繪にも何んにもなつてゐない――。

主人は怒つたのなんのつて、

「畜生、飛んでもない悪戯をしやがつて、道理である老爺今朝莫迦に早く發つと思つた。今から後を追つ掛けて取つ捕まへて遣らうか」

「でも、もう箱根へ掛つた時分ですから追ひ付けますまい。それに捕まへたところで乞食みたいな老爺でしたから、お金なんぞ持つてやしませんよ」と、内儀さんも其處へ來て言つた。

「それもさうだな、ほんとに忌々しい奴だ。折角誰れかいゝ畫工に畫いて貰はふと思つて拵らへて置いた屏風を代無しにしてしまつた。これといふのも手前達がぼんやりしてゐるから、恚

んな悪戯をされるんだ、以來是れに懲りて客に氣を付けるがい」

大雅は、或る大名から依頼されてゐる畫を揮毫する爲めに江戸へ出て來たのだつた。そこで江戸へ着いて其の大名に會つた時、座興に此の話をした。

「それは必ず傑作であらう、予も是非見度いものである」

と大名は言つたが、間もなく參覲交代の期になつて歸國する際に原宿で休憩して、本陣の主を召し「なにがしといふ旅籠屋に斯く／＼の屏風がある筈だから携へて參るやう」と言ひ付けた、本陣の主から彼の旅籠屋の亭主に其の趣を言つて尋ねて見ると正しくあつた。見つともなくて立てられないと云つて行燈部屋に投り込んであつた。大名は取り寄せて見ると、實によく大雅の本領を發揮した稀代の名作だつたので、早速それを買ひ求め度いと言つた。

旅籠屋の亭主は驚いた。が、さうなると急に有難くなつて賣れなくなつた。大名が價を厭はず懇望したにも係はらず旅籠屋は手放すことを肯じなかつた。其の富士の圖も、原宿の名物の一つとなつて後世に残つた。

(六) 馬上の旅

大雅は非常なる旅行好きだつた。壯年時代も、老後に及んでも變りが無かつた。彼は閑さへあれば一介の笠、一本の杖に身を饗して、名山大澤を漫遊した。六十餘州に彼の足跡を印せざる土地は無かつた。殊に彼は山登りが好きだつた。富士山の如きは數回登攀して、其の都度道を變へて登つた。或る年大雅は、高芙蓉、韓大年と三人で、富士、白山、立山の三岳に登つた。そこで三人とも三岳道者の號があつた。韓大年は名は天壽字は大年、醉晉齋と號し、伊勢の人で、書畫と篆刻をよくした。高芙蓉は通稱大島逸記と云つて甲斐の人で、畫をよくし、また鐵筆を巧みにした。我が國の篆刻の術は此の人によつて一變したと云はれてゐる。

此の時の道中、韓大年が腰に付けてゐた小使帳が或る人の手に傳はつて、其の一節がある書に載つてゐる、古への旅の趣きも知れるが、三老遊覽の有様を想像することが出來て面白いから其の儘轉載することにした。

七月二日



- 一 二百文 六日市藤左衛門頼泊、尤辨當持此方より禮を遣
- 一 百廿六文 内の男長左衛門三人荷物案内牛首迄頼二匁五分の所白衣道者故如此よし
- 同 三日
- 一 百文 牛首七郎左衛門中食
- 一 一匁 世話料
- 一 三十八文 米一升二合代
- 一 百文 韓わづらひかこ代
- 一 廿四文 池おどり見物入用
- 一 十二文 高あめ代

大雅が老年になつてから或る人に慙う言つて話した。

「私は若い時分に馬術を習つた。處が其の師匠が云ふことには、貴君は武士でもないのに騎馬の術を學んでも無益である、併し乍ら、旅をすれば足が疲れた時からしり馬に乗ることもあ

るだらう、そんな時、落ちる術を知らないと怪我をするだらうと。私は至極道理だと思つたので落馬の術を學んだ。所謂からしり乗りかけ二寶荒神三寶荒神などといふ、悉く其の落ち方を習つて置いた。そのお蔭で危難を免かれたことが度びくあつた」

大雅が奥州へ旅行した時、路で馬をとつて乗つたが、居酒屋の前を通ると、馬子が

「お客様、濟まねえが、わしい一杯やつて来るだから、一寸爰に待つて、お呉んなせい」と言つた。

「あゝいゝとも、緩りやつて来るがいゝ」

と大雅は馬の上から答へた。

馬子は喜んで手綱を客に預けて、居酒屋へ這入つて二三杯飲んで、やがて表へ出て見ればこはそもいかに、客も馬も何處かへ行つてしまつて見えなかつた。

「さあ大變だ」

馬子は周章て、驅け出したが、何處にも居ない。尋ねあぐんだ末に仕方がないので我家へ歸つて來ると、既に馬の嘶く聲が聞えた。

「はてな」

厩へ行つて見ると、馬はチャンと歸つて来て厩の中へ這入つてゐる。おまけに馬の上には、先刻のお客が安閑とした顔をして跨がつてゐる。

「アレ、お客様、どうしてお前様は恁んな處へ御坐らつしやつた」

「どうしてと云つたつて、馬がひとりて歩くから、馬に委せてゐたら此處へ伴れて来て呉れたのだよ。此處は馬子さんの家かね」

「ハイさうですが、だがお客様、お前様はよつほど呑氣なお方でやすのう、ヤイ畜生、こつちへ出ろ」

馬子は馬の口を取つて引き出して客を卸した。がもう日が暮れてゐるので何處へも行くことは出来ない。

「恁んな汚ない家ですが、今夜一と晩わしの家へお泊んなさい」と馬子は言つた。

「それでは御厄介になりませう」

大雅はその晩馬子の家へ泊めて貰つた。馬子の女房なども野良から歸つて来て親切にいたは

つて呉れた。大雅は喜んで、

「大變お世話になつて忝けない、何かお禮したいが何も差し上げる物が無い。わたしは繪師だから繪を一枚畫いて上げませう」

と云つたが馬方の家のことで紙は無い。すると、張り替へたばかりの障子があつたので、それへ山水の圖を畫いた。馬子は別に有難くも思はなかつたが、其の後で村の名主が来てそれを見て、大雅の畫であると云つて教へたので、紙をはなして子孫の代まで傳へた。

馬に乗つたゝめに、ゑらいめに會つたこともあつた。玉瀾と二人で天の橋立を見物して、若狭國へ向ふ時、路で馬方が頻りに馬をすゝめた。そこで夫婦相乗りで舞鶴港迄行つて、馬を下りて賃錢を拂はふとしたところが、一文も錢が無かつた。馬方は非常に腹を立て、どうしても許さない。夫婦ふたりが往來で罵倒されて殆んど當惑してゐると、丁度其の前が壺屋某といふ豪家で、其の家の主人が是れを見て氣の毒に思つて、賃錢を拂つて救つてやつたが、話しをして見ると大雅堂であることが分つたので、早速自分の家に案内して、款待を盡して逗留させた。

一とせ大雅が江戸から奥州に遊んだ歸るさ、何處かの禪寺へ立ち寄つて午飯を乞ふところろが、丁度其の時は住僧が他行して不在だつたにもかゝはらず、留守の者が快くもてなして一飯を饗應して呉れた。大雅は喜んで其の場に一偈を書き遺して去つた、すると後へ歸つて來た住僧が其の偈を見て激賞して其の和を作つて、大雅の跡を追つて京都の方へ向つたが、道中でもつひにそれらしい人に逢はず到頭京都迄來てしまつた。京都へ來て探したけれども分らなかつた。その偈には池無名と認めてあつたが、誰れに尋ねても其の名を知つてゐる人は無かつた、かの僧は尋ねあぐんで空しく歸國しやうと思つたが、「折角來たことだからせめて東山の神社佛閣だけでも參拜して歸つたらいいでせう」と人から云はれたので、最初に祇園の社に詣でたところが、繪馬殿に掲げてある蘭亭圖に池無名と記してあるのを發見して、やがて坊へ行つて尋ねて初めて、其の人の所が分つた、僧は直ぐ様大雅を訪問して、對面した。

「もはや本意をとげました上は、京都に用はありません」

と僧は言つて、其の日のうちに奥州をさして旅立つた。奥州の地名も僧の名前も分つてゐな

50

(七) 稻荷の幟

或る日大雅は三條通を歩いてゐた。知り合ひの骨董屋の前を通り掛ると、其の店に素晴らしい茶釜が置いてあつた。値段をきくと百兩だと言つた。大雅は其の茶釜を欲しくて溜まらなかつたけれども、百兩ときいては手が出ない、百兩はおろかなこと、丁度其の時は明日の米代にさへ差し支えてゐた。どうにも仕様はないので其の儘家へ歸つたが、茶釜の事が何處までも忘れられない。

それから幾日か経つてからのことだつた。東山に稻荷大明神を祭る社があつたが、靈驗があらたかで、信仰する者が多く、非常に繁昌してゐた。其の稻荷大明神に、此の度び正一位の宣下があつて、大祭を行ふことになつた。そこで講中の者が相談して、大幟を調達して社前へ建てることになつたが、其の字を當時書道に於ても並ぶ者なき大雅堂に揮毫して貰はふといふことになつた、世話人が大雅の處へ依頼に來た大雅は承諾して、明神の社内へ行つた。

幟は、幅五反で長さ數丈の大幟であつた。大雅は幟に對して默然として首を低れて、しばらく

くの間考へてゐたが、やがて筆に墨を染めて、まづ最初の一字を書き了つた。講中の人々は片唾を呑んで、第二番目にはどんな字を書くことであらうかと待ち構へてゐると、其の時大雅は突然筆を下に擱いて、

「染筆料は如何程頂戴が出来ませうか」と、一同に向つて言つた。

一同は駭いたが、既に一字書いて白幟をよこしてしまつた上は、先方の要求通り染筆料を與へるよりほか仕方がないので、

「いか程でも、染筆料はお望み通り差し上げませう」

と答へた。

「では、百兩申し受け度い、それでなければ揮毫はお断り申す」

一同はますます駭いたが、今更仕方がない。百兩の染筆料を出さうと言つた。大雅は非常に喜んで、直ぐ様筆を下して、一對の幟の字を書き了つた。書き了るが否や、筆墨を束ねて持つたまゝ何處かへ行つてしまつた。

後で一同は大いに憤慨した。大雅堂といふ人は寡慾恬淡の人物だと聞いてゐたが、噂と實際

とは雲泥の相違である、あんな卑陋な人物の書いた幟を建てるのは神前を穢す恐れがあるから、此の幟は引き裂き捨て、しまふがよいと言ふ人さへあつた。

大雅は稻荷の社から大急ぎで三條の骨董屋をさして行つた。そして「先月見た茶釜を賣つて貰ひ度い」と言ふと、骨董屋の主は、

「それは惜しいことを致しました、あの茶釜はたつた今、先生と一足違ひで、他のお客様が來て買つて行つて行きました」と言つた。

大雅はがっかりしてしまつた。彼は悄然として稻荷の社へ戻つて來た。そして人々に向つて言つた。

「實は、わたしは先き頃三條の骨董屋で古い茶釜を見て欲しいと思つたが、百兩だと云ふので買ふことが出来なかつた。併し、どうかして百兩を調達して、其の茶釜を手に入れたいものと日夜考へてゐる處へ、今日あなた方から幟の揮毫を頼まれたので、其の染筆料をもつて釜を買はふと思つて、百兩の金を所望致しました。處が今骨董屋へ行つて見ると、一と足違ひで他の客に買はれてしまつた後でした。よく／＼わたしに縁が無かつたのでせう。併し、茶釜を人

に買はれてしまつては、もうわたしに百兩の金は要りません、先刻は卑陋をも顧みず御無心を申したが、左様なわけですからお断りに参りました」

一同は重ね／＼意外に感じ、先きに大雅を罵つた人々は殊に恥ぢ入つてしまつた。併し、一旦約束した染筆料を、たとひ先方が不用になつたと言ふにもせよ、取り消すといふのは、世間へ聞こえても講中として恥かしいはなしだから、是非共納めて戴き度いと言つて、百兩の禮金を無理矢理大雅に納めさせた。

幟を建てると、此の話が早くも世間の評判となつて、祭り前から幟を見やうとして來る者が遠近から集まつた。

大雅は、田舎者のやうな姿をして、其の見物人の中に交つて、私かに人々の批評を聞いてゐた。すると、何の字は少し大き過ぎるとか、何の字は曲つてゐる、何の字は筆勢が鈍いなどと、種々の批評があつた。其の中には當つてゐる批評もあつた。大雅は直ぐ様同じ大いさの幟を調製して、それへ書き直し、前日の幟は引き裂いて捨て、翌日は其の新らしい幟を建てた、處がまだ多少の非難があつた。そこで又もや新しい幟を製へて書き直した。都合五度びまでさう

して幟を新調しては書き改めた。最後には見物の一人残らず感嘆して一字も非難を加へる者は無かつた。此の幾度びもの幟の作り替へのために、百兩の金は一文も残らずつかつてしまつた。

大雅は、幼時書を學んで三度まで師匠を替へたほどだが、其の頃の書はいづれも寺井養拙の流を汲んだものだつた。後に支那の古法を究め、晩年の書は其のと同じ畫く規矩の外に超脱して、一見頗る稚拙、しかもよく／＼見ると、運筆無礙、飄逸のうちにも格法現れ、おのづから技神に入つてゐた。此の外にも彼は詩文をよくした。廣く和漢の書を読み、殊に畫論に通じ、文章を巧みに作つた。

大雅は我が國南宗獨歩の畫聖であつた。  
知命の歳の元旦に彼は

「いくつじやと問はれて片手あけの春」  
と言つた。

其の年門生が彼の壽宴を祇園町の相馬屋で開いた。當代の名士は皆競つて其の席に列した。

玉瀾も其の時は夫に従つて宴席に列した。

安永四年の春から大雅は病を得た。其の病氣にかゝつた始めから彼は藥を飲まなかつた。彼は死をさとつてゐる。

其の年の四月十三日に、眞葛原の草堂でみまかつた。歳五十四であつた。

大雅其の没後、玉瀾が獨り棲んで其の家を守つてゐた。其の後數年にして、玉瀾も歿した。玉瀾の後には門人僧月峯が其の跡を繼ぎ、月峯は同じく清亮に譲つた。さうして眞葛原の草堂は洛東の名所の一つとなつて後世迄保存された。現在も尙、大雅堂は舊の地を其の儘に残つてゐるが、建物は昔の物ではない。

大雅が没した時、門人が集まつて師匠の手廻りの箱などを調べると澤山の遺墨が出て來た。するとそれを聞いて、其の遺墨を譲り受け度いと云つて來る者が、京大阪をはじめとして、遠國からも集まつて來た。全部賣却すると七百兩の金が出来た。

そこで門人達は相談して、

「此の金を以て恩師を不朽に傳へる方法を講じやう」

といふはなしになつて、柴野栗山の處へ碑文を頼みに來た。すると栗山が、

「それは至極手易い事です、併し、大雅堂を一大不朽にする考ならば私に別に一策がある、何んと私の意見に従つてはどうですか」と言つた。

「それではどういふ御工夫ですか」と門人達は尋ねた。

「傳記を書いて碑に載せるといふことは、私としては誠に名譽でむしろ望ましいことだが、併し、そんな事では面白くない、生前大雅先生の行狀にも適はしくないので、そこで私の考へといふのは、其の七百兩の金で、非常に大きな一座の石を求めて、佛像でもない人の様なものを拵らへ、其の胸の邊へたいがごとくと假名で深く彫り込んで、此の外には、行狀も生れた年も、死んだ年も何も記さず、そして是れをば、大津粟田邊の往來から望む山の中に安置するのです。さうしたならば、道中の旅人が其處へ來ると、最早大雅堂佛まで來たなぞと云ふやうになつて、大雅堂の名前は末代迄不朽に傳はるであらう。是れならば老先生も冥土で呵々大笑して、面白いと云はれるだらうと思ふ、諸君いかゞです」

と栗山は言つた。併し門人達は、栗山の此の非凡の企てを解することが出来なかつた。で、

是非共碑文を書いて貰ひ度いと言つた。

「では、碑文も書かないことはないが、有りふれた碑を建てる位のことならば僅かの金で足りるでせう。さらば其の殘金を、京都中の貧民に分けて遣ふことはどうです。これまた老師の意にもかなひ其の事を碑文に載せたならば一層立派にもなります」

と栗山は重ねて提案した。が、門人達は此の意見にも應じやうとしなかつた。そこで栗山はつひに腹を立て、碑文を書くことを斷つてしまつた。門人等は別に燕中禪師に乞ふて、墓誌を得て、舟岡の南淨光寺に墓を建てた。

大雁堂佛は建たなかつたけれど、大雁は矢張り不朽であつた。今後もなほ、彼の名前と功績とは、日本の繪畫が存在するかぎり不朽に傳はるであらう。碩學栗山先生の不凡の企ても、畢竟無用に屬してゐたといふことが、さらに彼の偉大を證明するものとして、傳記の作者は、此の餘事を書き添へた次第である。

葛 飾 北 齋

## (一) 春章 門 下

北齋は、其の頃はまだ勝川春章の門人で、勝川春朗と名乗つてゐた。彼が春章の門人になつたのは安永六年十九歳の時だつた。其の前は彼は彫刻を習つて洒落本の挿繪の板下などを彫つてゐた。が、考へて見ると、板下彫りぐらゐ世の中に莫迦氣な職業は無い、他人の描いた圖を其のまんま板に寫すばかりで、少しも己れの意匠を加へることは許されない。それで上手に彫り上げて見ても、賞められるのは畫工ばかりだ。拙く彫つた時にだけ、彫師が下手だと云はれる、恚んな割りの合はない仕事は無い。どの道苦勞するなら、繪を習つて畫工になるに限る——と彼は考へたので、手蔓を求めて春章の門に入つて、畫で身を立てる決心をしたのだつた。それから數年彼は一意専心畫の修業に没頭して來た。熱心と云へば彼ほど熱心な男も稀れだつた。酒も飲まず煙草も吸はず、若い身空だが女を買ひに行くではなし、只明けても暮れても繪筆を握つてゐた。だから技倆はメキ／＼上達した。師匠の仕事を手傳はされても何時も賞められた。其の時分彼は内弟子として師匠の家に住み込んでゐた。



師匠の勝川春章は、浮世繪では當時並ぶ者の無い大家だつた。春章の賣り出しは、明和五年五月の中村座の當り狂言「操歌舞伎扇」の浪花五人男の似顔繪を描いた時からだつた。其の頃迄彼の繪は一向世間から認められなかつたので、衣食にも窮する處から、人形町の林屋といふ書肆に居候をしてゐたのだつた。彼は印すらも持つてゐなかつた。で、五人男の錦繪に林屋の仕切判の壺形に林といふ字の彫つてある印を捺して遺つた。するとそれが大いに賣れて、一時に春章の名前が擧つたが、壺形の印が評判で世間では彼に壺屋といふ異名を與へてしまつた。春章はさういふ人で、腕もあつたが、他人に對する思ひ遣りも深くて、非常な好人物だつた。弟子に向つて小言を云ふやうなことも殆んど無かつた。處が、彼の妻は其の反對に非常な喧まし屋だつた。一家の事は何も彼も女房が取り仕切つてやつてゐた。彼女の權力は夫よりも遙かに強かつた。好人物の春章は女房の云ふがまゝになつてゐた。だから門人達は、師匠のめがねにかなふよりも、先づ其の細君に氣に入られなければいけなかつた。然るに春朗は、全く其の點に於て落第だつた。師匠の細君は甚だしく春朗を嫌つてゐた。嫌はれる理由は幾つもあつたが、第一無愛相で、強情でつむじ曲りで、それから恐ろしい無精者であることだ、どの點から

云つても女に好かれる性ではなかつた。就中彼の無精さ加減に至つては、師匠の細君のみならず誰れにしても聳盛しないでは居られなかつた。春朗は湯に這入ることが嫌ひだつた。湯錢を貰つて出て行つたかと思ふと、其の錢で蕎麥を食つて來て、體には依然として垢を溜めてゐた。着物は汚れても破れても、繕つたり洗濯をしたりといふことはなく、一枚の着物を汚れて擦り切れてしまふまでは着通すのが常だつた。だから折り／＼其の體から虱が落ちて來た。そんな男でも、せめてまめ／＼しく働きでもすればまだしもだが、用事を云ひ付けたら何一つ埒が明いたことはない、人が呼んでも氣が向かないと返事もしない。それで時々、思ひの外の、骨を刺すやうな憎まれ口を叩くのである。

「あんな憎らしい男はない」師匠の妻はよくさう言ひ／＼した。

春章は、澤山の門人を持つてゐた。内弟子も常に五六人位は居た。門下から出て既に名を成してゐる者もあつた。其の中でも一番有名なのは勝川春英だつた。是れは既に獨立して立派に一家を成してゐた。濃艶な美人を描いて歌麿春章をも凌ぐと云はれる程だつた。春英は畫も上手だが氣風の面白い人だつた。彼は淨瑠璃が好きで其の藝は堂に入つてゐた。三味線もよく彈い

た。そんな風だから兎角身が持てなかつた。放蕩をしてゐて家へ歸らないやうなことが屢々あつた。或る時も久しく家をあけて戻つて來なかつた。家では女房が、借金取りの言ひ譯をしなから淋しく暮らしてゐた。すると或る日のこと表で、

「勝川春英の家は此處ですか」

と言ふ者があるので女房が急いで出て行つて見ると、何んの事だ、それは自分の夫だつた。

「何んですねえ、自分の家を尋ねる人もないものだ」と女房が言ふと、

「何さ、餘り永くあけたから、留守の間にお前が家も何も賣つてしまつたかもしれないと思つてな、浮つかり人様の家へ飛びこもうものなら失禮だからなあ」

と春英は答へた。女房は、つい可笑しくなつて笑ひ出してしまつた。夫が歸つて來たら、あも云つて遣らうかうも云つて遣らうと考へ溜めて置いた事もみんな忘れてしまつた。

春英はさういふ淡泊な人だつたから、若い者に對しても極く親切だつた。春朗などもよく目を掛けて引き立て、貰つた。

「師匠の家に大勢若い者も居るが、後來畏るべき奴は春朗一人だ」と春英はよく人に向つて

言つた。

春英に續く高弟は勝川春好だつた。春好も漸く其の頃一家を成し掛けてゐた。彼は師匠の眞似をして壺形の印を用ゐてゐたので、小壺といふ異名を取つた。春好も腕は達者だつた。併し、春好は、春英と違つて非常に神経質の人間だつた。相手に依つて憎愛の差別が激しかつた。が、不思議と師匠の細君とは仲が善かつた。師匠からも信用されてゐて、門人の稽古などは大概師匠の代理をして春好が取り仕切つて世話をしてゐた。春好も矢張り春朗が大嫌ひだつた。其の點に於て彼は全く師匠の細君と一致してゐた。それは主として春朗が強情で、兄弟子である春好を重んじないことに原因してゐた。仕事の上でも春好が「それは斯う／＼すればいゝ」と言つて世話を焼くと、春朗は其の場だけ黙つて聞いてゐて、後で殊更に反對のやり方をするといつた風だつた。だから春好は春朗を眼の敵にして、弟分で頭が上らないのを幸にして、事につけては意地悪くいぢめるのだつた。それにも拘はらず春朗の技倆がすん／＼上達して行くので、春好は益々癢に障つて堪まらなかつた。恚んな風だから、春朗の境涯は餘り愉快なものではなかつた。

或る時春朗は人形町の菱川といふ繪双紙屋から招牌の繪の揮毫を依頼された。招牌だらうが何んだらうが、人から依頼されて描くといふ事は滅多にないので、春朗は大喜びで注文通りの武者繪の招牌を描いて持つて行つた。菱川の主人は其の繪を見て「大層よく出来た」と言つて賞めてくれた。そしてまさに其の招牌を掲げやうとしてゐる處へ、偶然兄弟子の春好が其處へ來合はせてしまつた。春好はそれを見ると、

「是れは誰れが描いたんです」と言つた。

「春朗さんが描いたのです、どうです、よく出来てるでせう」と主人は答へた。

すると春好は苦々しい表情をして、傍に立つてゐた春朗の顔を睨め乍ら、

「春朗、お前は誰に相談して此の繪を描いたんだ」

「……………」

「たとひ招牌だらうが何んだらうが、世間へ出す物を、師匠にも誰れにも相談なしに描くといふことは穩當であるまい、お前はまだ年期の明けない體ぢやあないか。——それに此の繪は何んだ、甲冑などは出鱈目だ、恁んな繪を描いて招牌に掲げられちやあ勝川一派の恥曝しだ。」

己れの眼に留つたからにやあ掲げさせるわけに行かぬえから、恁して遣る、云ひ分があるなら云つて見ろ」

春好はさう言ふが否やスタ／＼に繪を破つてしまつた。

菱川の主人は感情を害した。

「春好さん、ひどい事をするぢやありませんか、成る程貴下の眼から見たら拙いもんでせうが、是れでも春朗さんとしちやあ一生懸命描いたものです。高が招牌のことだから、私は何も名のある先生に頼まなくてもと思つて、春朗さんに描いて貰つたのです、それがお氣に入らないにした處で、何も破つて捨てなくもいゝでせう」

「御主人、私のした事が氣に障つたら勘辨してお呉んなさい。だが、勝川には勝川だけの家法があります、此の男の事は、師匠に代つて私が自由にするんだから、破つて捨てやうと何うしやうと私の勝手です、どうか打つちやつといて戴き度いのです」

かう言はれると菱川も争ふことが出来なかつた。それに稼業が繪草紙屋だ。流行つ兒の畫工に遇つちや頭が上らない。勝川一門で幅を利かせてゐる春好と、恁んな事から喧嘩をして後日

の商賣に障りがあつちや詰まらないと思ふので、春朗には氣の毒だつたが黙つてしまつた。春朗は到頭一言も物を言はなかつた。彼は蒼ざめた顔をして菱川の店を出た。彼は恚んな口惜しい事はなかつた。繪を破られた時には一時に頭へ血が上つた。「兄弟子も糞もあるものか」といふ氣になつた。が、考へて見ると、彼は自身の畫に對して全く自信がなかつた。春好の罵倒に對して反抗する勇氣が失せてしまつた。畫以外の争ひでは匹夫野人の喧嘩になる、それでは彼は潔くなかつた。結局彼は沈黙して居るよりほかはなかつたのである。

「畜生、いまに見ろ、己が日本一の繪かきになつて、あいつの面を見返して遣るから」  
相手が居ないので彼は空に向つてさう言つた。

## (二) 破門。唐からし賣り

彼は、其の頃の浮世繪畫家の大部分が、他派の畫を研究しやうとはしないで、只々濃艶華麗を旨として俗眼を喜ばせることにのみ汲々として、畫法筆力の如きは大して問題にしてゐないのを常に不満に感じてゐた。浮世繪師と雖も、人物ばかりでなく花鳥山水をも研究して十分筆

力を養はなければ駄目だと感じた。で彼は、英一蝶の草畫を手本にして研究して見たりしてゐたが、それだけでは満足出来なくなつて來た。彼は狩野派を學んで見度く思つた。すると或る處で狩野某といふ可成り有名な畫家と近付きになつたので、其の時、

「私は勝川春章の門人で浮世繪を學んで居る者ですが、狩野派の畫を些かでも學び度いと存じます、御教授を受け度い望みで御座いますがお許し下さいませうか」と頼んで見た。すると其の人は、

「他人の門人に教授をするといふわけにも參らんが、併し畫を學ぶ者は一派に留どまつて居ては上達しない、だからお望みとあれば折り／＼私の處へ遊びにおいでなされ、お話しだけは致さう」

と言つて呉れたので、春朗は大いに喜んで、折り／＼其の人を訪ねて、畫を見て貰つたり、狩野派の畫法を尋ねたりしてゐた。すると其の事が誰れから知れたのか勝川一門の耳に這入つてしまつた。早速それを問題にして騒ぎ立てたのが仲惡るの春好だつた。師匠の妻も其の事を知ると烈火の如く怒つた。

「勝川の門人で師匠の家の飯を食つて居乍ら、狩野派の畫家の門を潜るとは怪しからん男だ、勝川の名折れだ。」

と言つて春朗は嚴しく攻撃された。けれども春朗は、自身の行爲がそれ程悪い事だとは思へなかつた。師匠の用事の間を缺いて他流の稽古に行つたわけではなし、ましてや狩野へ弟子入りしたといふのではない。たゞ人の遊ぶ時間を利用して狩野派を研究して見やうと思つたまでのことだ。さうした事が師の名を辱しめることだとも思はれなかつた。だから彼は謝罪らなかつた。それで猶更物議をかもした。

「春朗のやうな忘恩の徒は速かに破門するのが至當である」彼を攻撃する人々はさう言つて師匠に迫つた。

春章は温厚な人だけに他から動かされることも多かつた。彼は春朗の熱心と畫才を認めてゐたので惜しくは思つたけれども、彼一人の爲めに一門の不和を引き起してもならないと考へたので、到頭春朗を破門してしまつた。

春朗は着のみ着の儘で師匠の家を追ひ出された。すると彼はもう行く處がなかつた。彼の生

れた處は本所割下水だつた。父は中島伊勢と云つて、徳川家用達の鏡師だつた。母は、吉良上野介義央の家臣小林平八郎の孫だつた。元祿十五年、赤穂の義士が復讐の夜、平八郎は防戦して斃れた。其の時平八郎には八歳になる女の兒があつた。吉良家が滅亡の後其の兒は親戚へ引き取られて成長して、他家へ嫁して一女を生んだ。それが中島伊勢の妻で、北齋の母であつた。さういふ家柄で、彼の生家は江戸でも人に知られた町人だつた。彼は其の家の二男に生れたのだつた。が彼が幼少の時分から家道は衰退して兩親共に早く没し、長男が其の家を相續したが不幸續きでさしもの大家も没落して家藏も人手に渡る始末となつた。それは彼が十一二歳の頃だつた。彼は貸本屋の丁稚になつた。二三年の間貸本を脊負つてあちこち廻つて歩いた。さうしてゐる間に稗史や草双紙の類を読み覺えたり、挿繪を手本にして繪を描くことを覺えたりした。が何時迄もそんなことをしてゐても詰まらないので、多少繪心があるといふ處から、或人の世話で版木彫りの彫刻家の弟子になつたのだつた。其の彫刻といふ職業も詰まらなくなつて畫工を志してから最早六七年になる。そしてどうにかかうにか道があきかけたと思へば又今度の仕宜である。彼は自身の不運を嘆息せずには居られなかつた。

差し當りの問題は、どうして生活するかといふことである。と云つて見た處で繪を描くより外に何も知らないのである。賣れても賣れなくても。繪を描いてゐるよりほかに仕方はない。親戚はあるけれども、彼の性格として人に頭を下げて庇護を仰ぎに行くなどといふことは絶対にできなかった。

「餓え死にするまでも繪筆は捨てずにやつて見よう」

と彼は決心した。それでもどうやら九尺二間の裏店を借りて住まつた。併し、春章から破門されて見れば、勝川を名乗るわけにはいかなかった。で、叢春朗と號した。が、繪は一向賣れなかつた。彼の畫才を認めて呉れる版元があつたにしても、勝川を憚つて畫かせては呉れなかつた。無名の彼に對して肉筆の畫を依頼して來る者は無かつた。そこで春朗はいろいろ考へた結果、自作自畫の戯作を書いて見た。そして自分の名も、是和齋、魚佛などといふ變名を用ゐた。其の草稿を持つて或る書肆へ行つて相談して見ると、「是れは面白い」と言つて書肆で引き受けて呉れた。「有難通一字」「鎌倉通臣傳」の二冊がそれであつた。しかし其の戯作も賣れはしなかつた。春朗は愈々生活に窮して來た。

天明五年春、春朗は名を改めて群馬亭と稱した。彼は二十七歳だつた。彼は折り折り戯作の挿繪を畫いたり、初午燈籠や團扇の繪を描いたりして辛うじて生きてゐた。其の頃彼は俵屋宗理の畫風に私淑してゐた。宗理は俵屋宗達の流をくむ者で、明和安永頃の人、後に光琳風の畫を描いた。光琳の畫風を會得して、百琳とも號したが、世間では往々光琳と間違へたくらゐだつた。彼は宗理を慕ふの餘り、其の遺跡を繼承して二世菱川宗理と稱へた。

其の頃彼は小傳馬町に住んでゐて、専ら狂歌の摺物を描いてゐた。摺物の畫は、錦繪と異つて別に畫法があつた。大體風趣の賤しからざることが重んじられた。宗理の描く摺物は意匠が清新であると云はれて、諸方から依頼があつた。とは云つても、畫料が安いので、其れを專業にして生活することは覺束なかつた。それに、其の時分彼は妻を持つたのだつた。そして長女が生れた。獨り暮しの時はどんなに窮迫してもどうか切り抜けて來た。愈々最後となれば居候といふ便法もある。が、女房子持ちになつてからはそう手輕には行かない。妻子に飢しい思ひをさせるのは不愜である。収入は以前より多少殖えた理屈であるが、貧乏の程度に至つては些かも變りはなかつた。摺物の注文が少し杜絶えると忽ち米が買へなくなつた。到底繪筆だけ

では生活が出来ないから何か内職をしたいと彼は考へてゐた。で、元手入らずの商賣と考へた結果七色唐からしを賣りに出て見ることにした。で材料を買つて来て自分で調合して、市中へ賣りに出た。土用の盛りだつた。焼けつくやうな日中を「七色唐からし」と呼んで歩くのだが、素人の悲しさに聲が出なかつた。二日續けて賣りに出たが一袋も賣れなくて、お負けに暑氣中りで霍亂を起して止めてしまつた。其の年の暮れになると一層困つて來た。すると或る人が云ふのに、

「それでは柱曆でも賣つて見たらどうです、あれなれば一軒々々寄つて歩くので、呼び聲は要らないから。曆の方は私が心配して上げやうから」

と言つて呉れたので、早速其の事に頼んでやつた。師走の街を彼は哀れた風體をして曆を賣つて歩いた。此の方は少しは賣れた。同じ乞食じみた商賣なら、幾らかでも錢になるだけ七色唐からしよりは増しだつた。彼は吹きさらしの街を毎日さうして賣つて歩いた。或る日のこと、淺草の藏前通りを例の風體で曆を賣つて歩いてゐると、往來でバツタリと勝川春章夫婦に出會つてしまつた。

「春朗ちあねえか、久しく會はなかつたが、どうしたんだ」

と元の師匠は言つた。

「師匠で御座いますか、御不沙汰を致しました、お變りなくてお目出度う存じます」

「お前は繪を廢めてしまつたのか」

「否え、左うでは御座いません」

「何んだそれは」

宗理は赤面した。

「お恥かしい次第ですが、相變らず貧乏で困りますので、内職に柱曆を賣つてゐる始末で御座います」

「春朗さん、お前さんは勝川を見限つて、狩野派とやらを習ひに行つたそうだが、それでも矢つ張り繪でお飯は戴けないのかねえ、だがお前さんは、繪かきになるよりは曆を賣つて歩く方がどうやらお似ひだよ、ほゝゝゝゝ、丁度家でも曆が要るから、馴染甲斐に一冊頂いて置かうかねえ」師匠の妻はいまだに宗理を憎んでゐた。

「師匠、では又お目に掛ります」

宗理はさう言ひ捨て、春章が何か言ひ掛けたのを耳にも入れずサツサと立ち去つてしまつた。

「一言詫びをすればいゝのに、相變らず強情な男だ」と春章は其の後姿を見送つてつぶやいた。

年は明けたけれども、宗理は依然として貧窮から脱することが出来なかつた。畫はさつぱり賣れなかつた。粥もすゝれないことが屢々だつた。

「己れももう三十を越してゐるのだ」

と考へると彼は心細かつた。三十を越して一人前であるべき身が、妻子も養へないとは餘りに腑甲斐ないわけだ、自分の畫名が上らないといふのも畢竟するに自分に畫才が乏しいからだ、畫才の無い者が何時迄も繪に嚙り付いてゐるよりは、いつそ今のうちに轉業してしまつた方がいゝかも知れない——とまで考へて彼は悲觀してしまつた。或る日も筆を投じて思案に暮れてゐると、

「宗理先生のお宅はこちらですか」と尋ねて來た客があつた。

「菱川宗理は手前で御座いますが、して貴下様は」

「私は大傳馬町の相模屋藤兵衛と申す者ですが、當年は私の初めての男の子の初の節句になるのです。で一つ先生に五月幟の繪を描いて戴き度いと思つて参りましたのですが、御承知下さるでせうか」

と客は言つた。相模屋藤兵衛と云へば有名な金物問屋だつた。

「委細承知致しました」と宗理は喜んで答へた。

相模屋は小僧に脊負はせて來た白絹の大幟を家の中へ持ち込んだ。宗理は直ぐ様墨を摺り朱を溶いて、其の幟へ鐘馗の圖を描いた。實に見事な筆力だつた。相模屋は大喜びで、其の場で小判二枚を奉書に包み、水引を掛けて、畫料として宗理に贈つた。

宗理は生れて初めて恁んな莫大な畫料を貰つたのだつた。彼は全く嬉しかつた。是れこそ彼に取つては天の助けだつた。彼は繪を廢さうなど考へた先刻迄の自身の心持を耻ぢた。

「賣れないのは繪が拙いからだ。修業が足りないからだ。どんな畫才の乏しい者だつて、身



命を投げ出して修業をしたならば立派な繪かきになれる道理はない——」  
 彼は生涯畫工で終らうと決心した。彼は平常妙見を信仰してゐたので、其の日は直ぐ様柳島の妙見に詣で、自分の志の變らないことを誓つた。其の後彼は朝は暗いうちから起き、夜更けて人が寢靜まる頃迄畫筆を握り續けた。其の後で讀書をした。腕はしびれ、眼が疲れてしまつてから漸う止めた。夜更けて空腹になつてゐるので、蕎麥を二椀宛食つて床へ這入つた。それを一日も怠らなかつた。其の頃から、寢に就く前に必らず蕎麥を食ふのが習慣になつてしまつた。

(三) 出世

宗理の畫は追ひ／＼世間から認められて來た。彼は其の頃、通笑、京傳、馬琴等の戲作の挿繪を描いて評判を取つた。其の關係から別して馬琴とは懇意になつた。馬琴は宗理より八つ年下だつた。

寛政五年の事だつた。日光神廟の再修について、狩野融川が畫の御用を仰せつかつた。そこ

で融川は門人の外に町繪師數名を随へて日光へ出張した。選拔された町繪師の中に宗理も加はつてゐた。融川は名は寛信、常信の後裔で、其の前年宗家を繼いだばかりだつた。彼はまだ齡は若かつたが狩野家屈指の名手だつた。  
 一行は宇都宮へ着いた。すると旅館の主人が融川に揮毫を依頼した。融川は承諾して、一人の童子が竹竿を持つて柿を落さうとしてゐる處の圖を描いた。宗理は側で見てゐたが、別室へ退いてから他の者に向つて恚う言つて融川の畫を批評した。

「融川先生は畫は上手だが、理に疎いやうだ。何故かと云へば、あの繪を見るのに、竿の端が既に柿の所を過ぎてゐる、然るに童子はまだ足をつまだてゝゐる、どういふ意味だか私には分らない」

するとそれを融川に告げた者があつた。融川は非常に怒つた。

「それしきの理が分らぬ融川ではない。が、此の圖は、元來童子の無邪氣なあどけない所を現はす爲めに描いたものだ、だから態とあゝ描いたのだ。それも分らずに、みだりに他人の畫を誹るとは怪しからん奴だ」

さう言つて融川は腹を立つて、其の場から宗理に暇を出してしまつた。宗理は平氣な顔をして獨り江戸へ還つて來た。

宗理はあらゆる畫を研究した。堤等琳の畫風を學んだり、又住吉内記廣行に就て土佐風を學んだりした。或る時は司馬江漢に就いて西洋畫を學んだ。或ひは又明人の畫法を研究した。それは西洋畫の影響を受けたのであつたが、人物を描くには人體の骨格を知らなければならぬと云つて、彼は千住の接骨家名倉彌次兵衛の門に入つて接骨の術を學び、筋骨の究理に通じるやうになつた。其の頃になると門人も附いて來た。

寛政十一年、宗理は其の名を門人宗二に譲つて、己れは北齋辰政と號した。それは妙見を信仰するところから付けた名だつた。妙見は北斗星、即ち北辰星の象徴である。彼の妙見信仰は甚だ厚かつた。

或る夏のこと、北齋は例に依つて柳島の妙見へ參詣した。田圃道を戻つて來ると、俄かに雷が起つた。彼は急いでやつて來た。と俄然電光一闪、すさまじい音響と共に落雷した。北齋は、堤の上から田圃の中へ轉がり落ちてしまつた。が、身に恙はなかつた。彼は泥まみれの姿で這

ひ上つて來た。雷は鎮まつて空は晴れてゐた。彼は家へ歸つて來ると其の話をして、

「是れも妙見様の御利益で己れの雷名があがるといふ前兆だらう」

と言つて喜んで、雷斗といふ名を自ら付けた。

果して其の頃から北齋の名聲が擧がつて來た。其の頃から彼は錦繪は畫かなくなつた。主に狂歌の摺物を描き、又時々自作自畫の戯作を發表した。就中有名なのは、寛政十二年萬屋重三郎版元で刊行した「籠將軍勘略の巻」であつた。此の書は大いに賣れた。

或る年北齋は、江戸へ來た和蘭陀の加比丹から、我が國の人の一生涯を、出産から始めて年成長の體、筆算學問の稽古、或ひは年たけて遊里へ通ふ有様、又は年老ひて死去し、葬禮を行ふ體といふ風に、風俗畫として、男子女子一卷づゝ二巻に畫くことを依頼された。北齋は承諾して、畫料は百五十金といふことで約定した。すると加比丹に隨行して來た醫師の某も同じ物を依頼した。北齋は永い時日を費して其の畫を描き上げて旅館へ持つて行つた。すると加比丹は約束通り百五十金を出して二巻を受取つた。そこで今度は醫師の所へ行くと、醫師が云ふのには「自分は加比丹と違つて薄給の身であるから同等の謝禮をすることは困難であるから、

半額即ち七十五金に負けて貰ひ度い」と言ふのだつた。北齋は少し立腹して、

「それならば何故最初に其の事を明かして下さらないのですか、畫は同じでも彩色其の他を略したなら七十五金でも描かないことはなかつたのでした。もう描いてしまつた上はどうすることも出来ません。又是れを七十五金で差上げる時は、加比丹に對して餘り高價に食つたやうになつて心苦しい次第です」と言つた。

すると醫師は、

「それでは二巻の中男子の圖一卷を七十五金で分けて戴き度い」と言ふのだつた。

それでも北齋は承諾しなかつた。「約束が違ふ」と言つて北齋は二巻の圖を持つて歸つてしまつた。家に歸ると、彼の妻は其の事を聞いて、

「それは半値でも賣つてしまふ方がいゝでせう。貴郎としては永い間苦勞して畫いた繪ですから残念でせうが、此の繪は今和蘭陀の醫師に賣らなかつたら、いつになつても賣れる時はありませんでせう」と言つた。

「それは已れも知らんではない、が、外國人が約束に背いたのを其の儘にして置くと、自分の

損はのがれるにしても、日本の人は相手に依つて掛値を云ふと言はれるに違ひない、それでは自分一人の事から日本の恥になると思つたので、己れは持つて歸つたのだ」

と言つて北齋は斷じて承かなかつた。後に其の事が加比丹の耳にはいつた。加比丹は感心して、更に百五十金を出して其の二巻をも引き取つて本國へ持ち歸つた。

北齋の畫は外國人の間で有名になつた。其の後年々北齋は外國からの注文を受けた。彼は日本の風俗畫を描いては長崎へ送つてゐた。が、後に英米の異國船が渡來するやうになつて、幕府の對外政策が厳しくなつたため、風俗畫の輸出が國內の秘事を漏す畏れがあるといふので禁止されてしまつた。

文化六年、江戸音羽の護國寺に於て、觀世音の開帳があつた。四月十三日のことだつた。北齋は護國寺で大畫の大達摩を畫いた。其の日はそれが評判で見物人が雲のやうに集まつた。先づ庭前一面に粗殻を敷き、疊數百二十疊敷きの大厚紙を其の上に展げた。墨汁は四斗樽に入れて傍らに置いた。北齋は、藁箒を筆にして、丁度木の葉を掃くやうに紙の上を驅け廻つた。異形の山水のやうな物が出来上つた。暫らくの間に出てしまつたが、周圍の見物人には何を描

いたのかさつぱり分らなかつた。が、さて本堂の上に登つて見ると、それは半身の大達摩だつた。其の達摩の大きさは、口を馬が通ることが出来て、眼玉の上に人が座つてもまだ餘分があつた。

其の後北齋は本所合羽干場で同じ大いさの紙に馬を畫いた。又兩國回向院でも布袋の大畫を描いた。文化十四年には、尾州名古屋西掛所境内で、矢張り百二十疊敷きの紙に達摩の大畫を描いた。此の達摩には彩色を施した。

昔京都淨福寺の僧に古潤といふ者があつて大畫を作るに妙を得てゐた。併し其の古潤と雖も北齋程の大畫は描かなかつた。さうかと思ふと彼は極く小さな繪を描くことにも妙を得てゐた。回向院で布袋の大畫を描いた時、直ぐ其のあとで米一粒へ雀二羽を描いて人々を駭かせた。其の頃歟形蕙齋といふ畫家があつた。蕙齋は細圖が得意だつたので、江戸一覽圖といふ物を刊行して、世人を駭かせた。それは江戸八百八町を一紙の中に纏めたものだつた。それが大評判になつたので、北齋は竊かに可笑しく思つて、自分は、武藏、相模、伊豆、安房、上總、下總を一紙に縮圖して房總一覽圖と名付けて刊行した。其の精密巧妙なること遙かに蕙齋の上に出

てゐた。

北齋は、畫道の上ならば何んな藝でも出来ない事はなかつた。切組燈籠の繪のやうな物でも、鳥羽繪のやうな物でも皆非凡だつた。或ひは逆様に描いたり、横に描いたり、或ひは指先きで描き、或ひは鶏卵、升、徳利のやうなものを筆に代へて縦横自在に描いた。

切組燈籠のやうな物は、所謂割物といふ畫で、幾何の術を知らなくては描けない物だ。が北齋は此の割り出しに長じてゐた。或人が一世豊國の處へ行つて、絹地へ切組燈籠を畫いて貰ひ度いと言つて頼むと、豊國は承諾して、直ぐに畫き始めたが、暫らく經つて筆を投げて、「是れは易さうに見えるが、なか／＼さうでない、到底急の間には合はない」と言つて斷つてしまつた。

其處で止むを得ず今度は北齋の處へ行つて頼むと、北齋は

「是れは割物だから即席には畫けないから、明日來て貰ひ度い」と言つた。

明日行くと約束通り畫けてゐた。後で豊國は其の話を聞いて「北齋にはとても敵はない」と言つて嘆息した。

(四) 曲亭馬琴と北齋

一とせ將軍家齋が放鷹の途次、寫山樓文晁及び葛飾北齋を召して、席上畫を台覽あるべき旨前以て内命が下つた。北齋は當日文晁と共に淺草傳法院へ伺候した。先づ文晁が描いた。其のあとで北齋が出て、初めは花鳥山水を描いた。其の健筆に感じない者はなかつた。すると今度は、長く繼いだ唐紙を横に置いて、刷毛で長く藍を引いた。それから携へて來た鶏を籠の中から取り出して、其の趾にたつぶり朱肉をつけて紙の上に放つた。鶏は走つた。藍の上に朱い趾痕が點々としるされた。

「是れは立田川の風景で御座りまする」

かう言つて北齋は拜をして退いた。人々は其の奇巧に駭かされた。

席上畫台覽の内命が下つた時、家主は七八日も前から北齋の體を預かつて濫りに外出することも許さなかつた。それは北齋といふ男は非常に放縱な人間だから浮つかり外出させると何處へ行つてしまふか分らない、萬一の事があると家主が御咎めを受けるといふので嚴重に監督し

てゐるのだつた。後で北齋は、

「御前揮毫もいゝが、どうも家主が嚴ましくて窮屈で弱つた」と人に話した。

北齋の畫名は四方に噪がしくなつた。揮毫を依頼して來る者や、笈を負ふて畫を學び度いと云つて來るものが日増しに多くなつた。

其の頃になつても北齋の貧乏は依然として舊の儘だつた。當時、通常畫工の畫料は、繪本類一丁金二朱以上には出なかつたが、版元でも特に北齋にだけは一丁金一分を拂つてゐた。だから彼の収入は他の畫工に比べると餘程多いわけだつた。其の上彼は酒を飲まず、煙草も吸はず、美食もしない、只好きなのは菓子だが、是も大福餅位を喜んで食つてゐたから、生活費といふものは殆んど掛らない。普通なら金が残るべき處だが、それ處か彼は年中貧乏して、食ふ物さへ無いことがあつた。寒中でも薄着で慄へてゐたりした。彼は全然金錢を貯へるといふことを知らない人間だつた。締りがなくて、有ればあるだけの物を出してしまふので、幾らはいつて來ても結局同じことだつた。畫料を受取ると中味を改めても見ずに机の邊りに投げ出して置いた。そして弟子の中で貧しい者が來ると包みの儘遣つてしまつた。米屋や薪屋が勘定を取りに

來ても矢張りさうだつた。丁度畫料の貰つたのがあると其の儘投げ出して、「是れを持つてつて下さい」と言つた。

商人は、時に法外な金が包みの中から出ることがあるので、内々北齋を上顧客にしてゐた。北齋は幽霊の繪を畫くことに妙を得てゐた。すると其の頃、尾上梅幸（三世菊五郎）の技藝が世に名高かつたが、殊に幽霊に扮することが上手だつた。そこで梅幸は、北齋に幽霊を畫かせて見て、其の圖が果して眞に逼つてゐたならば、それにならつて扮装をして舞臺へ出やうと思つて、或る時北齋を自分の宅へ招いたが、北齋はやつて來なかつた。仕方がないので梅幸は自分の方から駕籠へ乗つて北齋の家を訪ねて行つた。併し行つて見て梅幸は驚いた。其の家には何一つ道具と云つてはなく、室内は荒れ果て、一度も掃除をしたことがないと思つて塵埃が堆くつもつてゐて、其の不潔なことは譬へやうがなかつた。潔癖な梅幸は到底上へあがれなかつた。彼はもう一度外へ出て駕籠屋を呼んで、駕籠の中の毛氈を持つて來させて室内へ敷かせ、さて室内へ通つて、一禮を述べやうとした。

併し、北齋は梅幸の無禮な態度を憤つてゐたので、机に凭り掛つた儘見向きもしなかつた。

梅幸も憤然として、到頭一語も交へずに歸つてしまつた。

處が、其の後或る機會で梅幸は北齋に會つたので、嘗ての自身の不敏の罪を詫びた。北齋はもとより淡泊な人だつた。それ以來親しく交際した。或る年梅幸は一世一代の狂言東海道五十三次を上演した。其の時梅幸は是非北齋に看に來て貰ひ度いと言つて度び／＼使を遣つた。併し北齋は相變らずの貧乏で錢が一文も無かつた。芝居は只で看せて貰ふにしても場所柄だけに一錢も持たずには行かれない。けれども梅幸の好意に背くのも悪いと思つたので、丁度夏のこととて蚊帳を質に入れると二朱の金が出来た。それを袂へ入れて芝居見物に出掛けた。梅幸は喜んで上等の棧敷へ案内させて芝居を見せた。北齋は見物した後で、例の二朱を紙に包んで祝儀に出して、本所石原の我家へ歸つて來た。が、其の晩から蚊に攻められて弱つた。本所は名代の蚊の多い土地である、北齋は蚊帳がないので夜になつても寝ることが出来なかつた、さうかと云つて蚊いぶしの煙は、是れがまた大嫌ひだつた。仕方がないので晝間寝て、夜は夜徹し蚊に食はれ乍ら繪を描いてゐた。餘程経つてから或る人が蚊帳を買つて贈つたので助かつた。

文化四年、麴町の書肆角丸屋甚助版元で「繪本新編水滸傳」を刊行した。馬琴の編譯で、北

齋の挿繪であつた。處が端なくも此の挿繪の事から、馬琴と北齋との間に論争が生じてしまつた。それは北齋の繪が餘り日本化してゐるといふ馬琴の小言が出たからだつた。處が北齋は「未だ嘗て見た事もないものが書けるものか、なまじ淺墓に支那の故實に抱泥した物を書くよりも、其の場の筋を通す事に重きを置いて書く方が、讀む人が日本人だから解りがいい」と言つて馬琴の主張を容れなかつた。馬琴は非常に不服で、北齋が挿繪を書くならば自分は後篇の翻譯はしないと言ひ出した。すると北齋も、馬琴の翻譯ならば自分は挿繪を書かないと言ひ出した。間へ狭まつて版元は大いに弱つた。いろ／＼手を盡して和解させやうとしたけれども、強情な兩人は互ひに一步も退かなかつた。そこで書肆としては、馬琴か北齋かどちらかを立てなければならぬ場合になつたが、兩方とも同じやうな大家のことであるから、何れに従つて何れを捨てるといふことも出来ない。兎に角此の問題は出版業者の間に一箇の新例を作る重大な事柄だからといふので、同業者の意見を徵することになつた。其處で江戸中の書肆が會合して評議をした、が其の結果、當時馬琴の作と北齋の畫は並び行はれて、何れも優劣はない、が、此の書物が既に繪本といふ題號がある以上は、畫工の意見に従ふのが至當であらうと

いふことに一決した。其處で馬琴は手を引いて、第二編からは高井蘭山が代つて翻譯することになつて、編を追つて出版した。

併し、蘭山の翻譯は馬琴に比べると格段に劣つてゐた。後篇を閱讀しながら北齋は

「矢つ張り馬琴は傑いなあ」と言つて嘆息した。

當時馬琴は四十歳を越したばかりで、京傳と競争して頗る多作をした。名聲既に京傳を凌ぐうとしてゐる時だつた。北齋と馬琴とは、仕事の上では論争をしたけれども、私交上では更に變りなく親密に交際つてゐた。彼等兩人の交りは随分古かつた。

餘程前の事だが、北齋が例に依つてどうにも首が廻らなくなつて一時馬琴の家に居候をしてゐたことがあつた。其の時の事、北齋の母の年廻があつたので、馬琴は香奩若干金を紙に包んで北齋に與へた。其の晩北齋は歸つて來て馬琴と談笑しながら、袂から紙を出して、鼻をかんでボンと投げ出した。馬琴がそれを見ると香奩の包み紙だつた。

「貴公は怪しからん男だ、是れは今朝貴公に遣つた香奩の包み紙ぢやないか、中の金も佛事に使はないで、他の事に費消つたのだらう、實に許し難い不孝な男だ」と馬琴は大層腹を立て

て罵つた。

北齋はにこ／＼笑つて、

「しかも仰つしやる通り、頂戴した金は全部私の腹中へ入れてしまつた。併し、精進物を佛前に供へたり、坊主を伴れて来て經を讀ませたりする事は、俗人の虚禮である。そんな詰まらない事に金を費消ふよりも、美味しい物を食つて、父母の遺體である此の一身を養つて百歳の壽を保つ事が、何よりも父母に對する孝行だと私は思ふが、如何です」

馬琴は沈黙してしまつた。二人の交情はさういふ具合だつた。

處が、翌年又もや二人は衝突してしまつた。それは、須原屋市兵衛版元「三七全傳南柯夢」の挿繪の事からだつた。是れは三勝半七の心中物で、七冊續きだつたが、最後の段の、三勝半七が情死に赴く所で、北齋の挿繪を見ると、野狐が食を漁る體を畫いて、寒夜の景物としてあつた。馬琴は其の板下を見ると、

「何んだ此の狐は、恁んな蛇足を添へてある爲めに、まるで情死の男女は狐に誑惑かされてでも居るやうだ、早速此の狐だけ削つて貰ひ度い」と言つて板下を返して寄越した。

北齋は憤つた。此の狐を添へた事は、彼としては非常な趣向のつもりだつた。戀愛の爲めに命を捨てる人間もあれば、そんな事には無關心で餌を漁つてゐる狐もあるといふ處に、彼の寓意が存してゐるのだつた。大體情死といふ事が、男女の痴狂から起る事で、深く考へると丁度狐に誑惑かされるやうなものだ。さういふ意味からでも、其の場面に野狐を添へる事は、大いに見る人をして感じさせるに違ひない、と北齋は考へたのだつた。

「馬琴が分りもしないくせに生意氣な事を言ふ。彼の著作の意の足らない處を、己れの挿繪で補つて遣つてゐるのぢやあないか」

と北齋は言つて、斷然馬琴の申し出を拒絶した。そして、飽く迄も馬琴が野狐を削れと言ふならば、前回から畫いた挿繪を全部返還して貰ひ度い、其の上今後馬琴の著作には挿繪を畫かないと言ひ出した。版元は大いに困つて、百方奔走した結果、挿繪は其の儘といふことで、どうにかかうにか兩人を和解させることが出來たのだつた。

かうして二人は折り／＼衝突したが、文化八年に至つて、又々喧嘩をしてしまつた。それは、南柯夢が大いに賣れた處から、書肆木蘭堂が版元で「南柯後記」を出版することになつたが、



其の挿繪の事から馬琴北齋の間に議論が生じたのだつた。今度は喧嘩が大きくなり過ぎて、兩人は到頭絶交してしまつた。

(五) 引越し病・おじぎ無用

北齋は若い時から妙な病があつた。それは引つ越しをすることだつた。彼は少しも一つの家にとどまつてゐられなかつた。引つ越しをしたかと思ふと、直ぐに次ぎに引つ越して行く家を探しに出るのだつた。

「是れは有難い、實にいゝ家だ」

さう言つて喜んでゐるかと思ふと、もう三日も経つと其の家に飽きてしまつて、

「何處かにいゝ家は無いだらうか」などと云つてゐた。

彼は江戸中を轉々として引つ越して歩いた。引つ越しをすると云つても、家財が無いので樂だつた。机、蒲團、鍋釜位の物だつた。其の机や鍋釜すら無いことがあつた。机の代りに何かの空箱を据え、鍋釜が無ければ近所から何か取つて食べた。

本所石原片町に住んでゐた時は、隣家が煮賣りの居酒屋だつた。北齋は三度々々の膳を其の酒屋から運ばせてゐた。彼の家には食器といふ物は一つも無く、只土瓶と茶碗が二三箇あるばかりだつた。それで客が來ると、隣家の小奴を呼んで、土瓶を出し、

「お茶を頼むよ」

と言つて、茶を入れさせて客にすゝめた。

彼は、一日に三回引つ越しをしたことがあつた。

或る人が北齋に向つて、

「昔から引つ越し三百といふ諺があつて、どんな貧乏人でも三百位の錢は消えるといふことです。先生のやうに轉居をなさつては、たとひどんな金持でも終ひには其の費用に追はれて貧乏にならずには居りません。少し轉居をお止めになつたら如何です」と言つた。

すると北齋は微笑しながら、

「私は引つ越しをするのが道樂だから仕方が無いよ。幕府の表坊主に、寺町百庵と云ふ人があるが、此の人は生涯に百回轉居をすると云つて、百庵と號してゐるのだが、もう既に九十何

回越したさうだ。私も百庵にならつて百回轉居をして、死所を卜する積りだ」と言つた。しかし、もう一つの原因は、彼が懶惰だからだつた。彼は決して居室を掃除しなかつた。何時でも垢だらけの着物を着て、あたりには竹の皮だの、炭俵だのが散らばつてゐて、塵埃は堆く積り、丁度物置きと掃き溜めとを一緒にしたやうな有様だつた。さうしていよいよ汚なくて堪へられなくなると、引つ越しをするのだつた。

幕府の用達鶴屋某が、一日藥種商の千葉某と共に北齋の家を訪ねて、畫帖の揮毫を依頼した。すると其の時北齋は、南向きの縁側に座つて、しきりに虱をつぶしてゐたが、二人の者の依頼の言葉を聞くと、

「合憎、私は今差し掛つた急用があつて、お需めに應じ難い、どうもお氣の毒様」と言つて、

着物の縫ひ目を返しては、虱の母や子を拾つて潰してゐる。二人は大に撃登したけれども、折角来たことだから頻りに懇望した。そこで北齋も漸う々々虱を捕るのを中止して、畫帖へ揮毫をした。何しろ不潔で堪まらないので、二人は繪の出來上るのを待つてそこそこに暇を告げて其の家を出ると、

「モシ、御兩人」と北齋は表へ出た二人を呼び留めて、「一人が若し私の住居の事を探ねたら、大層きれいで立派な家だと云つて下さいよ」

北齋は、禮儀だの禮讓だのといふ事が大嫌ひだつた。何でも無造作だつた。人に會つても頭を下げるといふことはなく、ただ「今日は」とか「イヤ」とか云ふだけで、勿論時候の挨拶だの、體の安否だのを述べるといふことはなかつた。餘所から食べ物を買つて來たり、或ひは人から貰つたりした時でも、それを他の器へ移すといふことはしなかつた。竹の皮でも、重箱でも、自分の前へ置いて、箸を使はずに、手づかみで、ムシヤ〜と食つた。食つてしまへば、重箱も竹の皮も其の儘にして置いた。

北齋の家を尋ねる人は、先づ門口で、「百姓八右衛門」と書いてある名札が目につくのだつた。それから主人の居室へ這入ると、

「おじぎ無用」「みやげ無用」

と書いた紙が壁に貼つてあるのを見るのだつた。

彼は、九月下旬から四月上旬迄は炬燵へ這入り切りだつた。どんな人に面會する時でも炬燵

を離れるといふことはなかつた。繪を描くのにも其の中で描いた。飽くと、傍の枕を取つて睡つた。睡りから醒めると、又筆を執つて描いた。「夜着の袖といふ物は無駄な物だ」と言つて、附けなかつた。夜る晝さうして炬燵を離れないから、炭火では逆上せると言つていつでも炭圍を使つてゐた。かういふ風だつたから、虱のわくことは夥しかつた。

外出する時の北齋の風體は餘程變つてゐた。手織の紺縞などの木綿の着物の上に、柿色の袖なし裈を着て、六尺有餘の天秤棒を杖の代りに持つて、草鞋か又は麻裏草履をはいて歩いた。宛然たる百姓だつた。彼が葛飾を名乗るのは、本所で生れたからだつた。

さうして、彼は法華信者で、何時でも法華經普賢品の呪文阿檀地アダンヂを唱へてゐたが、途を歩く時でもやめなかつた。

「此の呪文を唱へて歩いてゐると、途で知つた人に遇つても眼に這入らないから不思議だ、どうも奇妙なものだ」

と彼は獨りで感心してゐた。しかしそれは、彼が呪文の方にはかり氣を奪られてゐるので、

人が來ても眼に這入らないのだつた。

### (六) 家 庭

北齋の妻に關する事はよく知られてゐないのであつた。が、とにかく彼は二人の妻を持つた。そして、最初の女は一男二女を生んだ。二度目の妻も一男一女を生んだ。そして彼は五十歳前後の頃からは全く獨身で暮したのだつた。

長男は富之助と云つたが、放蕩無頼の人間になつて、家には居らなかつた。次男は多吉郎と云つたが、御家人加瀬某の養子となつて、御小人目付から、御小人頭に轉じ、進んで御天守番にまで出世した。多吉郎は俳諧を好んで、椿岳庵木峨と號し、本郷丸山鎭坂に住んでゐた。長女は門人柳川重信に嫁したが、仲が睦ましくなくつて家に歸つて間もなく死んだ。次女は夭死した。三女はお榮と云つた。お榮は、堤等琳の門人南澤等明に嫁したのだつたが、これも夫婦仲が悪くて離縁になつて家へ歸つて來た。彼女は父に學んで頗る善く晝を描いた。等明の妻になつたけれど、等明よりも遙かに上手だつた。そして性質も父にそっくりだつた。夫が晝を

描いてゐるのを見て、

「なんです、其の繪は」と言つて笑ふのだつた。そんな事から自然夫婦仲が圓滑にいかなかつた。

お榮は家に歸つて、其の後は獨身で暮らして、畫作をしながら父の世話をしてゐた。彼女は應爲と號した。應爲といふ名は、父が彼女を呼ぶ時名前を云はずに、「オーイ」といふので附けた名だつた。

お榮は、就中美人畫に長じてゐた。それでは父よりも筆意が勝つてゐる處があつた。高井蘭山作の「女重寶記」の畫の如きは彼女の傑作の一つであつた。北齋自身も或時人に向つて、

「美人畫では己れはお榮に敵はない、あいつのは、妙な描き方をするが、それで不思議に畫法に適つてゐる」と言つて讃めた。

彼女は父の性質を受けついで、物事に一向頓着しない女だつた。むしろ男のやうだつた。彼女は頗る任侠の風があつて、困窮してゐる者があると救つて遣つて喜んでゐた。貧乏を少しも氣にしないで、悪衣惡食も平氣だつた。併し、父ほど懶惰ではなかつたけれども、父が室内の

掃除をきらふので、父の意に従つて決して掃除などはしなかつた。或る人が北齋を訪ねた時北齋は机に凭つて筆でもつて、室の一隅を指しながら、

「お榮や、昨日の夕方まで、此處に蜘蛛の網がかゝつてゐたが、どうして失くなつたのだから、お前は知らないか」と心配さうに言つた。

お榮は首を傾げて、すかして見ながら、

「妾は一向拂つたおぼえはありませんが、不思議な事ですね」と大切な物でも失くなつたやうな顔をして言つてゐた。

彼女の父と異なる處は、少し酒を飲む事と、煙草を吸ふ事だつた。或る時お榮は、父が描いた絹本の畫の上に煙草の吸殻を落して焼穴を明けてしまった。それでひどく後悔して、

「もう決して煙管は手に持たない」と

と言つけれども、二三日経つと忘れたやうに平氣な顔をしてスバ／＼と煙草を吸つてゐた。

彼女は容貌は頗る醜くかつた。額が出つばつてゐて、一見妙な相だつた。北齋は娘に向つて「アゴ、アゴ」と呼んでゐた。とにかく、彼女は非常に親孝行の女だつた。

文化十四年、北齋は尾州名古屋へ行つて、門人牧墨僊の家に足をとどめた。そして、十月五日に、同所の西掛所境内で半身達摩の大畫を描いた。彼は墨僊の家に居る間に、「北齋漫畫」の初編を描いたのだつた。北齋漫畫は、名古屋の書肆永樂屋東四郎が版元で、文化十五年頃から編を追つて發行した。北齋は名古屋に半歳滞在した。

それから彼は伊勢、紀州に赴き、大阪、京都を歴遊して、江戸へ歸つた。

天保二三年の頃、北齋は信州に遊んで、門人なる高井郡小布施村の高井三九郎(鴻山)の家に寓して、一年間留どまつてゐた。彼は其處でも澤山繪を畫いた。三九郎は、鴻山と號して、畫をよくした。土地の富豪で酒造家であつたが、畫が好きだつたので、嘗て京都に遊んで岸駒に就いて學んだ。或る日岸駒は門人を集めて「當時京阪に畫工多しと雖も我が右に出る物はない、只恐るべきは江戸の葛飾北齋である」と言つた。三九郎はそれを聞いて岸駒の門を去つて江戸へ來て、改めて北齋に就いて畫法を學んだのだつた。

北齋は、其處を發足する時、門出に、

「八の字のふんばり強し夏の富士」

と、一句を口ずさむだ。

天保五年六月に、「富嶽百景」を著した。是れは三冊物で、馬喰町西村與八の出版だつた。天保七年には「和漢繪本魁」「繪本武藏鎧」「葛飾新雛形」等を續々出版して、老來益旺んの意氣を示した。彼は七十七歳だつた。葛飾新雛形は所謂割物の圖様で、其の精密さに至つては看る人として驚嘆しない者はなかつた。

彼は、百歳迄は生きなければならぬと言つてゐた。

「私は、六歳の時から物の形狀を寫す癖があつて、其の後久しい間繪筆は持つて居るが、七十年來畫いたところの物には、全く取るに足る物はない。七十三歳の時、私は稍、禽獸蟲魚の骨格、或ひは草木の出産を悟ることが出來た。だから八十になればますます進み、九十にして奥意を究め、百歳で神に入るだらうと思つてゐる、若し百十歳まで生きることができたならば、一點一格生きるが如くなるに違ひないと思つてゐる」

と、彼は其の頃人に向つて言つた。

露木孔彰は其の頃至つて若年で、北齋の門に入つて畫を學んでゐた。彼は或る日お榮に向つ

て、嘆息して、

「私はどう描いて見ても、筆が思ふやうに運べない、私は繪かきになり度いと思つても、生れつき不器用で駄目なんでせうか」と言つた。  
するとお榮は笑つて、

「妾の父は幼年から始めて八十歳の今日まで、たゞの一日も筆を採らない日はありません。處が、先達ての事でした、筆を抛り出して腕を拱んで（己れは本當に猫一匹描くことが出来ない）と云つて涙を流して嘆いて居りました。すべて繪ばかりではありません、何事でも、自分の力が及ばないと思つて棄てやうと思ふ時が、其の道の上達する時です」と言つて諭した。

北齋は、富嶽百景の初編を書いた時から、**卍**と改名した。其の後は落款にはかならず、畫狂老人**卍**、或ひは前北齋**卍**と書いた。

當時北齋と云へば、女子供と雖も其の名を知らない者はなかつたが、**卍**といふ名では通りが悪かつた。で、恁んな話しがあつた。北齋は前々から川柳が好きで、名を百姓と云つて、葛飾連の棟梁だつた。或る時中橋の小川といふ茶店で川柳點の開卷があつて、北齋も出掛けて行つ

たが、其の歸りがけのこと、人々と一緒に遣つてくると日が暮れたので、日本橋の雨店で小田原提灯を買はふとすると合憎無かつた。只、油も引かない白提灯があるだけだつた。でそれを一つ買ったが、まさか白張りの儘では持つて歩けないので、何か印しを書いたらよからうといふので、其の時連中の一人の夢助といふ男が、北齋に向つて、

「**卍**さん、一寸何か書いて下さいな」と言つた。

「よし、よし」

北齋は提灯を店の者に持たせ、左の手で一寸底の方を持ち乍ら、漆筆に、のしを三つ並べて畫いた。すると側で見てゐた夢助が、

「お前さんはなか／＼繪心がありますね」

と言つたので、みんなどツと笑ひ出してしまつた。

其の年の冬、北齋は或る事情の爲めに江戸に居られなくなつて、相州浦賀に遁げて行つて暫らく潜れてゐた。其の事情といふのは、北齋には一人のやくざ者の孫があつた。それは彼の長女が柳川重信に嫁して生んだ子だつた。其の孫は成長すると放蕩無頼の若者になつて、度び度

び祖父の北齋を苦しめてゐた。が、今度も其の放埒な孫の事から、北齋までが掛り合ひになつて罪を着るかも知れないやうな羽目になつたので、彼は其の難を遁れる爲めに、縁者をたよつて浦賀へ行つて身を潜してゐたのだつた。

北齋が、此の孫を恐れることは非常だつた。本所の鎧馬場に住んでゐた頃の事だつた。彼は毎朝、小さな紙に獅子を描いて、まるめて家の外に捨てるのだつた。或る人が偶然それを拾つて披いて見ると、獅子の繪で、運筆輕快で何んとも云ひ難い面白味がある、そこで北齋に贊をして貰ひ度いと云ふと、北齋は即座に筆を採つて、

「年の暮さてもいそかしさはかし」

と書いて渡した。其の人は更に北齋に向つて、

「どういふわけで毎朝獅子を畫いてお捨てになるのですか」と尋ねて見た。すると北齋は憂鬱な表情をして、

「是れは、私の孫といふ悪魔を拂ふ禁呪です」と言つた。

後には其の事が評判になつて、人々は毎朝北齋の家の前へ行つて、争つて其の繪を拾つた。

(七) 終

焉

天保十年は、北齋は八十一歳だつた。其の年の冬、彼は本所石原片町から、つい近くの達摩横丁に轉居した。すると或晩近所から出火があつた。北齋はまだ起きてゐて繪を描いてゐたが、火事だと聞くが否や駭いて、筆を持つた儘表へ飛び出して跡をも見ずにすん／＼遠くの方へ遁げてしまつた、お榮も續いて飛び出して、父の跡を追つて遁げて行つた。風が強かつたので、北齋の家も類焼してしまつた。

荷物を出せば出す暇は十分あつたのだが、焦んな風で何一つ持ち出さなかつたので、父子の者は全くの丸裸で乞食同前になつてしまつた。北齋は、他に惜しい物は無かつたけれど、若くて畫道に志した頃から始めて今日に至る迄、和漢古今を論ぜず、西洋の繪畫に至るまで、苟くも見るに足りる物があれば必ず縮寫して藏つて置いた。それが今では一車位あつたのを、火事の爲めに焼いてしまつた。北齋はがっかりしてしまつた。彼は、自分の苦しんで歩いて來た一生涯の足跡を拭き消されてしまつたかのやうな氣持がして、寂しかつた。

其の前に、彼が七十五歳の時、それまでに轉居した數が凡そ五十六回になるけれども、未だ嘗て火災に罹つたことがないといふので、自慢して、他人の鎮火の守札を書いて遣つたりしたことがあつた。其の彼の自信も今度は裏切られてしまつた。

焼け出された北齋親子の有様は實に慘めだつた。或る人から畫の依頼を受けた處が、筆だけはあるが、硯も何も無かつた。そこで彼は有り合せた徳利を碎いて、底の方を筆洗にし、碎片を繪の具皿にして、畫いて與へた。

併し、貧乏に慣れてゐる北齋父子は、そんな中でも平氣で暮らしてゐた。

弘化年間の事だつた。三世豊國が兩國の萬八で書畫會を開いた。すると、とうど其の日は大雨になつた。出席を約してあつた人達も、其の雨の爲めに見合せてしまふやうな有様で、思ひの外淋しかつた。處が會が始まると間もない頃、北齋が簑笠わらじで遣つて來て、

「葛飾の百姓が参りました」

と言つてはいつて來て、終日筆を揮つて、數十枚を畫いた。

嘉永元年、北齋は本所から淺草聖天町へ轉居した。其の年彼は八十九歳で、九十三回目の轉

居だつた。其の家は遍照院といふ寺の境内にある狭い長屋だつた。北齋は豫て、生涯葛飾の里に住んで死ぬ積りだと云つてゐたが、どうかした氣紛れで淺草へ引つ越して來たのだつた。其の時或る人が次ぎのやうな狂歌をよんで北齋に贈つた。

「百越すもおろか千里の馬道へまんねんちかくきたの翁は」

きたの翁は北齋に通はせたので、まんねんちかくとは、其の頃馬道に萬年屋といふ菓子屋があつて大層流行つた、下戸の北齋に取つては萬年屋も近くて結構であるといふ意味を通はせたのだつた。

翌二年の春北齋は病に罹つた。醫藥のきゝめが更に見えなかつた。或る日醫者はお榮に向つて、老病であるから到底恢復はしないと云つた。門人や舊友などが集まつて來て日々看病してゐた。が、病は重るばかりだつた。

臨終の少し前に、北齋はバツチリ眼を開いて、かすかに溜息をついた。

「天が若し己れに、十年の壽命を呉れるなら……」それから稍暫らくして、「天が若し己れに五年長生きさせて呉れるなら、本統の繪かきになるのだが……」



終ひの方は言葉が吃つてよく聞き取れなかつた。さう言つて彼は永久に眼を瞑つてしまつた。それは嘉永二年四月十八日の事だつた。

遺骸は淺草の誓教寺に葬られた。葬禮は門人や舊友が各々贖金して執り行つた。見送りの中には、槍挾箱などを持たせた武士なども數名交つてゐた。古來裏店から槍や挾箱を持つて見送られた葬式は例しがないと言つて、其の頃専ら話の種に上つた。

田能村竹田

(一) 鞆津の邂逅

竹田は、文化十一年の夏、大阪へ行つた。大阪では、生玉の持明院に寄寓して、數箇月を送つた。持明院に宿るのは是れで二度目だつた。此の前來たのは文化四年だつたから、彼が三十一歳の年だつた。其の年の春彼は結婚して、結婚後の幾月かを郷里の家で暮したあとで、大阪へ漫遊したのでつた。

京攝の間には、彼の知己は少くなかつた。京都には、莫逆の友小石元瑞も居れば、三十歳の時入門して詩學の師と仰いだ村瀬栲亭もまだ存命してゐた。大阪には、岡田米山人が居た。矢張り其の頃から、彼は米山人の知遇を得て、屢々窓下に侍して指教を受けた。米山人は竹田の畫を見るといつでも欣然として、

「私の衣鉢を後來傳へる者は足下ばかりだ」と言ひ／＼した。

竹田は、それらの文人墨客と交際して悠々として日を暮らしたのでつた。

いつの間にか秋になつて、朝夕は衣を拂ふ風が膚に浸みるやうになつた。其の頃になると、竹田は、寂しい旅の寢醒めの床に、故郷を思ふのであつた。浮か／＼と暮らしてしまふ都門の生活を辭して、あの草深い豊後の片田舎の村莊に歸臥して、靜かに詩想を練り度いやうな氣持になつた。都に住む人の眼には、見るもいふせき草の庵だけれども、彼に取つては其處が唯一の安息所だつた。

村家點々たる中に、竹林の蔭、細流に臨んでゐる我家で、妻が野菜を洗つてゐる姿が見えたり、其の傍らで嬉々として遊び戯れてゐる愛兒太一の面影が眼に映つたりした。

九月の初めに、竹田は大阪を發つて、便船に乗じて歸省の途に就いた。が、途中、備後の鞆津で下船して、三島怡齋を訪ねて見ようと思ひ立つた。怡齋は鞆津の富豪で、詩文墨竹の心得があり、竹田は大阪で數回交際した仲だつた。傍ら、いつも船で素通りして海上からばかり望んでゐた鞆津の風光を、親しく觀賞してみたい氣持もあつた。

竹田が怡齋の家を訪ねると、怡齋は非常に喜んで迎へた。そして一別以來の挨拶が済むと直ぐに怡齋は言つた。

「大變好い折においで下すつた、實は、兩三日前から山陽が宅へ來て居るのです、先生は確か、まだ山陽とはお近付きでなかつたやうに聞きましたが」

「掛け違つてつい面會致しません」

「それでは早速御紹介致しませう、先づ其の積りで、今回は御緩りと御逗留を願ひ度いものです」

それから直ぐに山陽と竹田は、主の紹介で顔を合せたのだつた。が、此の兩者は、顔を合せたのは今が初めてだが、お互に名前は前から知り合つてゐた。それは、竹田の親友であるところの小石元瑞は、山陽に取つても亦無二の知己で、且一面恩人とも言ふべき人だつたので、二人は元瑞を通して間接に相互の人と爲りを知つてゐたのだつた。

小石元瑞は、京都の人だが、江戸へ出て大槻玄澤に學び、京都へ還つて蘭醫を開業して大いに行はれてゐた。彼は専門の蘭學以外に、漢學にも造詣が深く、詩文を善くし書に巧みであつた。大體風流文雅を好んで、交遊が頗る博かつた。山陽が、文化八年の冬初めて京都へ出て來た時、篠崎小竹の紹介を以て、一番最初に訪問したのが小石元瑞であつた。元瑞は暫く山陽を

自分の家に留めて置いて、餘暇には山陽を伴れて嵐山や南禪寺などへ遊びに出掛け、それから逢ふ人毎に山陽を紹介した。さうして山陽の知人が一人二人と増して行つた頃を見計らつて、新町に借家をして山陽を其處へ移らせて、儒學教授の看板を掛けさせた。それが山陽の今日を成す第一歩だつた。

爾來僅か四年、三十五歳の今日迄に、山陽の努力は非常なものだつた。其の頃京都には、儒學を以て門戸を張る鏘々たる大家が十指に餘る程あつた。其中へ、突然田舎から飛び出して來た山陽が肆を開いて、競争しようといふのは、寧ろ大膽に近い行爲だつた。が、彼は飽く迄も降らず、一隅に旗幟を立て、それらの大家と覇權を争つた。其の努力は酬われ、僅かの間に名聲隆々として昇つた。彼の塾は一日増しに賑やかになつて來て、門前には書を索める者が踵をついで到るやうになつた。さうして志の一端を得た山陽は、今年の八月上旬京都をたつて、五年振りで故郷廣島に歸山したのだつた。彼は久方振りで兩親の傍に侍して愉しい日を暮らした。山陽の歸省を聞いて集まつて來る親戚門人知友の人々が門前に市をなした。彼は其の應接に追がない程だつた。さうして青年時代の種々の屈辱や不名譽を一朝にして雪ぎ去つて、

今や得意の絶頂に達してゐた。廣島に二週間餘り滞在して山陽は歸東の途に就いた。途中各所で歓迎を受け、九月の中旬頃鞆津へ來たのだつた。

山陽も、鞆津の地を踏むのは今度が初めてだつた。が、彼は久しい前から此の地に懐れてゐた。それは山陽が九歳の時だつた。彼は母に伴られて大阪へ行つたことがあつたが、其の時船が或る港へ一泊した。海上から眺めると、屋根が鱗のやうに重なつて、海邊近い處には數層の高樓が參差として立つてゐた。そして邊りを海霧が、包んだり現はしたりしてゐた。「何といふ港だらう」と思つて舟人に訊ねて見ると、

「此處が鞆津だ」と舟人は答へた。

其の、九歳の時の思ひ出が、山陽の心からは何時になつても消えなかつた。遙か後になつてから、人から保命酒を贈られたことがあつた。そして、其の酒が鞆津の名産であることを教へられた。黄色く濁つてゐる其の酒を飲むと、山陽は九歳の時の思ひ出を色濃く眼前に髣髴させた。其の後は、保命酒を口につける毎に、鞆津を思ひ、なつかしく感じるのだつた。

山陽は今積年の其の望みを果して愉快に堪へられなかつた。怡齋の別莊は對潮樓と稱し山海

の觀望を恣にすることが出來た。昨夜は舟遊觀月の宴を催した。月の光を盃に受け乍ら、黄色くて甘い保命酒を飲む心持は得も云はれなかつた。

山陽は、小石元瑞から屢々竹田の噂を聞かされてゐた。小石は非常に竹田に傾倒してゐて、其の詩畫を稱するのみならず、竹田の人と爲りを稱揚して「人格第一等」だと云つて口を極めて褒めるのだつた。併し山陽はまだ竹田の詩畫すらも見たことがなかつた。だから彼は幾ら小石が竹田を賞讃しても、彼自身は只黙つて聽いてゐるばかりで、竹田といふ田舎畫師に就いてさう強く興味を惹かれはしなかつた。彼は非常に自信力の強い男だつた。自分自らの信じた物に對つては常に最大級の賞讃を辭せない代りに、自分の知らない物に就いては、他人がどれ程聲を大きくして稱揚して聞かせたところで、素直にそれを受け入れるといふことはなかつた。さういふ風だから、山陽は今竹田に逢つても、一箇の畫工として以上に餘り重く見てはゐなかつた。

其の夜、怡齋の宅で小集が催された。山陽、竹田、それに菅茶山の弟の菅徵卿、其の他土地の文人數輩が參集した。さうして置酒高興、宴酣にして、各々畫を作り詩を題することになつ

た。

山陽は、保命酒に酔つて、顔を眞紅にして、肘を枕としてゴロリ横になつてゐた。後年彼は九州旅行中に酒癖をおぼえて遂に大酒家となつたけれども、此の時分までは寧ろ下戸に近かつた。まるで飲まないわけではないが、多くは保命酒のやうな甘い酒を飲んで喜んでゐた。其の大好きな保命酒の瓶が彼の前にだけ置かれてあつた。

山陽は、さうして肘枕で寝轉んだ儘、人々の揮毫する處を眺めてゐた。眺めてゐると云ふよりも寧ろ、態と見ない振りをしてゐると云ふ方が中つてゐるやうな態度だつた。さうした彼の態度は折々人に反感を起させるのだつた。「山陽は傲慢不遜の男だ」と方々で云はれてゐた。けれども山陽に云はせると、拙劣な繪だの詩だのぬたくつてゐる處を、一と晩中神妙に畏まつて拜見してゐなければならんと云ふならば、それは恰も地獄の責苦に等しいものである、況んやそれに對つて一々諛辭を呈するに於ておやである。だから彼は大概御免を蒙つて寝轉んでしまふのである。

いろんな人が揮毫した後で、竹田が筆を執る番になつた。其の時になつても山陽は同じやう

に寝轉んでゐた。竹田は紙を展べて山水を畫き出した。

山陽は、寝轉んだ儘、じつとそちらを見遣つてゐた。竹田の描く畫の形が成るに従つて、山陽の眼光が次第に光を増して來た。

山陽は突然がばと飛び起きた。そして

「唐人、唐人、眞個に唐人だ！」と叫んだ。

一座の人々は眼をそばだて、山陽と竹田と二人を眺めた。竹田は平然たる態度で筆を動かしてゐた。山陽は沈黙して、襟を正うして、竹田の揮毫する處を眺めてゐた。

竹田は、人々から索められると、幾枚も畫いた。

感激性の強い山陽は、其の後で竹田の手を執つて「今迄貴下に逢はなかつたことは、私に取つて損失だつた」と言つて今日の邂逅を喜んだ。彼は立どころに一詩を賦して、筆を馳せさせた。

我曾在京君在攝。葦參不相接。豈圖萍水會天涯。執燭連床酒瀾頰。

其の翌日、二人は再會を契つて、東西に別れたのであつた。

## (二) 遊 學

田能村家の遠祖、田能村吉左衛門と云ふ人は、備前池田侯に仕へて祿千石を食む士だつた。其の一子休庵と云ふ者が醫者になつて、豊後岡藩の侍醫となつた。休庵から四世の孫を碩庵と云つた。それ迄代々醫を以て仕へて來たのだつた。碩庵に二男あり、長を周助名は君明と云ふ、學を好み、藩の司業と爲つたけれども、早く歿した。次男が竹田であつた。竹田は名は孝憲、字は君舜、幼名を磯吉と云ひ、長じて行藏と改稱した。彼は醫者の子だけれども、醫を好まなかつた。幼い時から非常に讀書が好きだつた。そして、天稟の詩才を有つてゐた。で、彼は中途で醫を捨て、専ら儒學に志した。經學の師は、同藩の儒者唐橋君山であつた。二十歳の年には熊本に遊んで、李紫溟に就いて學んだ。それと同時に、彼は、非常に繪が好きで、此の方にも天分が認められる處から、彼の親は、同藩の畫師淵野眞齋、渡邊蓬島の二人に就かせて繪畫を學ばせた。

二十三歳の時、行藏は藩の儒員となつた。そして、師唐橋君山、伊藤文藏等と共に豊後風土

記を編纂することを藩から命ぜられた。享和元年二十五歳の時、君命に依つて君山と共に江戸へ出た。江戸では古屋昔陽に従つて、經史の學を専攻した。

其の頃江戸では、谷文晁が漸く全盛期に入り掛けてゐた。彼の名聲は隆々として江戸の畫壇を風靡して、其の勢力旭日昇天の概があつた。文晁門下にあらすんば畫師にあらざるの趣を呈してゐた。そこで、田舎出の書生であるところの竹田も、大勢に押されて、文晁に師事しようと思ひ立つた。彼は紹介を以て、束修を入れて文晁の門人になつた。さうして、稽古日に其の家に出掛けた。すると、さしもの廣い家も門人で一杯になる程だつた。文晁は、所謂寫山樓なる畫室で、數多の門人環視の中にあつて、豪健無類の筆を揮つて見せてゐた。其の有様を見ると誰れでも、畫師も是れ程になれば——と思はずにはゐられないのだつた。

けれども竹田は、文晁の畫風がどうも心に染まぬやうに感じられた。文晁の手腕は確かに一代に冠たるものがあつて、さうして其の地位は、男子の事業としては壯快を極めてゐるが、併し眞の畫といふものが、あゝした華やかな生活の中から生れて來るものだらうか、どうだらう？とも考へさせられた。彼自身の心持で云ふと、そも／＼畫師などといふものは、もつと寂

しい、孤獨の生活の中に浸つて、そして自然や人間を靜かに觀照すべきものであるやうに考へられた。あれだけの筆力と、あれだけの素養を有し乍ら、文晁の畫の何處かに一點匠氣の消えずに残つてゐるのが眼に付くのは、彼の性格に由來することだらうか？それともあの生活が彼を毒してゐるのだらうか……と竹田は考へて見た。

そんな風だから、彼は餘り文晁の家に通はなかつた。従つて文晁のはふでも、其の一門人に對して特別の注意を拂つて見ることはなかつた。

其の年の十一月恩師唐澤君山が病死した。竹田は、翌享和二年の四月歸國した。其の後は専ら國誌編纂の事業に没頭して、國內の諸藩に亘つて旅行して調査を進めた。彼は獨力を以て先師の遺業を完成せしめやうといふ決心をしたのだつた。

其の仕事は翌享和三年に至つて完成した。竹田はそれを唐澤君山の名を以て刊行することにした。併し、由來困難なる出版事業は、一貧生に過ぎない竹田をして、千辛萬苦の勞を嘗めさせた。さうして文化元年に至つて、漸く其の著述を世に出すことが出來たのだつた。

彼の家は、元來非常に貧乏だつた。藩から受ける俸米といふのも僅かなものだつた。加ふる

に藩其のものも甚だしく疲弊してゐた。豊後一國は小藩が割據して、各藩とも財政困難だったが、わけても岡藩は、近年政道が弛緩し、上下奢侈文弱に流れ、年々租税を増徴して漸く彌縫してゐる有様だつた。で、小祿の者では生活を維持することさへも困難だつた。

其の頃、彼の家庭に一つの悲劇が行はれた。それは彼の妻の離別問題だつた。其の妻は、菱屋某といふ町人の娘だが、非常な美人だつた。最初のうちは夫婦仲も睦じく、家庭も平和だつたが、それが永くは續かなかつた。其のわけは、彼女は比較的富裕な町家に育つて來たために贅澤の習慣が付いてゐて、今俄かに貧乏な武士の家に嫁して來たからと云つても、どうしても其の習慣はぬけなかつた。そして彼女自身としても、町人の娘から武家に縁付くといふ欣びや誇りが、貧乏な生活の爲めにぶちこわされてしまつて、現在の境遇に對して不満であつた。それが極端に舅姑の感情を損ねるのだつた。竹田も、妻に對する愛情は有つてゐても、其の無理解に對して憤るやうな場合も屢々あつた。併し、妻に其の理解を持つてと云つても、それは無理であるかも知れないとも考へた。

そんな風で、家庭に風波が立ちかけて來た。そこで彼は妻を離別する決心をした。どれほど

可愛い女房でも、生みの親には替へられぬと彼は言つた。かうして自分一人が無情な人間になつてしまふ方が、結局彼女の爲めにも幸福であらう……と彼は考へたのだつた。

妻の問題の外に、彼にはもう一つ苦痛があつた。それは永年の眼疾だつた。彼は此の眼疾を癒さうとして有らゆる療養の手を盡した。が、一向驗目が見えなかつた。讀書や著述に没頭するので、眼は益々悪くなるばかりだつた。

妻を離別した當座は、突然襲ひ來る淋しさに身の置き所も無いやうに感じることもあつたが、同時に自由な、煩ひの無い獨身生活の有難さを沁々と考へるやうなこともあつた。とにかく彼は勉強がよく出來た。

文化二年、竹田は京都へ遊學した。併し、學費が乏しいので非常に苦しかつた。其の學資は月に米一俵だつた。米一俵では暮しやうがなかつた。最初は市中に汚ない間借りをして始めたが、間もなく財布の底を叩いてしまつた。そんな風だから、立派な師匠に就いたり、文人墨客を訪問したりといふことも出來なかつた。國を出る時紹介狀を貰つてある處などへも顔を出さなかつた。顔を出し度いにも、手土産を買ふ金が無いからだつた。そのうちに或人の紹介で洛



北の阿彌陀寺へ寄寓させて貰ふことになつた。此の寺は近世の慈雲律師の開いた所だが、當住の和尚も學問好きで、書物などは庫に一杯仕舞つてあるので、竹田は自由に其の書物を讀まして貰ふことが出来た。そこで彼は節約のために一日の食事を二度に減じて、漸く露命をつなぎ乍ら苦學を続けることが出来た。其の傍ら、方々の寺を廻つて古書畫を見せて貰ひ、それを縮寫したりして、畫の研究もした。其の時分、郷里の或る人へ遣つた手紙に、まだ京都へ來て誰の處へも入門しないと云つて其の後で、

「當時の先生に一拜一起仕候て機嫌取り申候よりは、有り合ひの書物にて、寂寞たる佛閣に高臥して、古人と尙友仕候方、宜敷と極め申候」

など、書いて送つたりしたこともあつた。併し、それは彼の負け惜みに過ぎなかつた。矢張り師がなくては本統の學問は出来なかつた。當時、京都の學者の中で、彼が心から推服することの出来るのは村瀬栲亭一人だつた。そこで竹田は漸う金一分の束修金を算段して栲亭の門に入つた。

村瀬栲亭は京都の人で、秋田藩の儒臣となつた。彼は、博學洽文、詩文を以て一世に重んじ

られ、又書畫を善くした。讀書の暇には必ず古法帖を臨撫して、砑々として倦まなかつた。就中東坡の書を崇尚してゐた。彼が書を作る場合には餘程特色があつた。先づ其の前日から一切家事を顧みないで、起居を慎み、飲食を節し、室内を整頓し、筆硯を料理し、若い女子に墨を磨らせるのだつた。彼は常に人に語つて、墨を磨るには織い女子でなければ不可ないと言つてゐた。さうして置いて、翌日は早く起きて、早朝から書き始めて、終日手を休めずに書き續けて、晩方になつてまた興が醒めなければ、最後に蘭竹などを畫いて、漸く筆を收めるといふ風だつた。

栲亭は直ぐ様竹田の非凡の才を認めて、大に優遇して呉れた。竹田は一年餘り栲亭に従學した後、郷里へ歸ることになつた。其の時栲亭は大煩ひをしたばかりで、まだ床も離れずにあつた。同じやうに、竹田も其の頃非常に健康を害してゐた。餘りの苦學で體を痛めたのだつた。栲亭は心から竹田と別れることを惜んで、次ぎの詩を作つて饒けした。

今春病將死。 入夏稍得醫。 子亦繼伏枕。 奄奄及貼危。  
頃來雖頗間。 瘦骨未生肌。 峭如一雙鶴。 相對同嗟咨。

吾老髦將及。	齋志恐無期。	尙子健六翮。	高舉翔雲邊。
只恰在羈旅。	晨夕乏扶持。	弊衣無人補。	宿飯纔療飢。
不如歸鄉里。	保護得其宜。	山水皆舊識。	相邀足伸眉。
優遊拋世故。	可以養肺脾。	風騷縱可喜。	努力休苦思。
霜威日應劇。	調攝須隨時。	草木向榮日。	藥喜必可知。
再會定不遠。	臨別心自悲。	力疾題數字。	意多奈筆疲。

(三) 竹田莊の珍客

其の翌年、竹田は、白杵藩の安東氏の女を娶つた。此の二度目の妻は温良貞淑の婦人だったので、竹田は以前のやうに家庭の紛紜に煩はされることはなくなつた。妻は間もなく懐妊して、次ぎの年男子を生んだ。其の子は太一と名付けられた。

文化八年の二月から竹田は又々京都へ上つた。彼は先づ村瀬栲亭を訪ねて久瀾を叙し、或ひは皆川淇園を訪問して畫談を聽いたりした。小石元瑞と相識になつたのも此の頃の事だつた。

それから彼は更に紀州に遊んで、和歌山に野呂介石を訪問した。

其の旅から竹田が故郷へ歸ると間もなく、藩内に一大騒動が持ち上つた。それは、此の年の冬、領内の百姓が一揆を起して一時に蜂起したのだつた。其の頃岡藩の士風は悉く廢頽して、武藝學問に志す者は殆んど無く、奢侈淫佚の風が全藩に漲つてゐた。藩の財政が困難になるに従つて、新法に次ぐに新法を以てして、只々聚斂誅求を事として一時を糊塗してゐた。だから農民の疲弊は極度に達して、怨嗟の聲が道路に滿ちてゐた。其の積年の禍根が遂に爆發するに至つたのだつた。

百姓一揆は一時辛くも鎮壓することが出来た。が、藩の有司は少しも弊政を改革しやうとはしなかつた。それを見て竹田は深憂措くこと能はなかつた。彼は遂に意を決して、長文の建白書を起草して藩主に上つたのだつた。藩主中川侯は、竹田の誠忠と才學とは十分に認めてゐたけれども、政治向の事に就いては、局外の彼の建言を直ちに採用することは出来ない事情もあつた。で、荏苒日を送つてゐるうち、翌文化九年の二月に至ると又もや一揆が蜂起した。茲に於て竹田は再度の建白書を上つた。其の建白書に於て、彼は藩政の禍根を露骨に指摘し、病弊

を除き勤儉力行を勧め、學問の獎勵が急務である所以を力説したのでつた。

竹田の直諫は、當路の人々の肺腑を刺す底のものがあつた爲めに、彼は反つて藩の老臣達から甚だしく睨まれた。折角の其の熱誠も、分外の差出口であると云はれて、却つて物議の種となつた。竹田の師友であるところの伊藤文藏は、壯年血氣の竹田が、直情徑行を以て國事に奔走するのを見て、彼の身に禍の降り来るべきことを畏れ、大いに其の非を咎めて深く訓戒するところがあつた。竹田も漸く悟つて、以後決して政治に容喙しないことを伊藤に誓つた。

文化十年三月、竹田は病の故を以て、馬廻役兼由學館頭取の勤務を辭任した。彼は今後の生涯を詩畫三昧の境に送るべき決心をしたのだつた。併し藩主は竹田の忠節を知つてゐたので、致仕の後も由學館詩文總裁といふ役を與へて彼を優遇することを忘れなかつた。

頼山陽と軻津で邂逅したのは、其の翌年のことだつた。

竹田が、二度目に山陽と逢つたのは、山陽が九州旅行の途次、豊後の竹田町に来て竹田莊を訪問した時だつた。それは文政元年十月末の事だつた。

山陽は、其の年の二月京都を發つて、中國を経て下の關から九州に渡つた。豊前に入り、博

多に是を停むること約一月、それから佐賀を通つて、長崎に着いたのは五月の末だつた。由來長崎は、文人墨客の淵藪とされてゐる土地だつた。彼は此處で多くの人と交り、或ひは蘭船を見物し、或ひは支那人と交遊して、大に見聞を廣めた。其の土地の特殊の人情風俗は、數多くの詩篇となつて後世に残された。長崎にあること約三ヶ月、肥後に向ひ、「泊三天草洋」の詩を得て、熊本に入り、鹿兒島に赴き、再び肥後に戻つて、東肥街道を経て豊後に入つた。二重嶺を越え、阿蘇山の煙を望んでは復一詩を得、進んで九重嶺を越えて、十月二十三日の夕刻に岡城下に到着したのでつた。

山陽の來遊は前以て報ぜられてゐたので、其の日竹田は、十一歳の俸太一に人を附けて途中迄出迎をさせた。山陽は、長途の旅行で日焼けこそしてゐたが、少しも憔悴の色はなく、例に依つて長刀を横たへ、腰に酒を盛つた竹筒を提げて、颯爽として遣つて來た。

竹田莊では、主の竹田を初め藩内の二三の文人墨客の徒が、首を長くして待つてゐた。其處へ山陽は遣つて來ると直ぐ、竹田の顔を見て莞爾と笑つて、それから太一の方を顧て、頭を撫で遣り乍ら、

「なか／＼寧馨兒ぢや、腫が清らかに澄んでゐる、必ず才があるでせう。……だが、人間は寧ろ愚痴に限るな、愚なれば則ち貴く、痴なれば則ち富むからな、はッはッはッ」

太一は、竹田に取つては、天にも地にもたつた一人の子だつた。彼が太一を愛することは一通りでなかつた。何處へ行くにも其の子を伴れて歩いた。其の命にも替へがたく思ふ太一を山陽が褒めて呉れたのだから、竹田は嬉しかつた。其の晩の宴には、山陽、竹田のほかに、岡仲達、角田九華等が加はつた。山陽は盛んに飲み且つ談じた。九州の山川風物の話、文人墨客の品評、それから旅行談に花が咲いて、山陽は長崎で馴染んだ袖笑といふ妓の事をのろけ混りに話したりした。

竹田は、山陽の酒量が上がつてゐるのに一驚を喫した。先年輦津で逢つた時、山陽は普通の酒は口に付けず、甘い保命酒をチビリチビリ飲んで、それでも酔つて眞紅になつてゐた、其の事を思ひ出して竹田は不思議に感じた。

「貴下は何時の間に、そんなに酒量をお上げなすつたのです、此の前お目に掛つた時は餘り召し上らぬやうだつたが」と言ふと、

「今度の旅行中に覺えたのです、最初下の關に逗留してゐた時、其の家の主が酒徒で、灘の『鶴』といふ酒が取つてあつて、それを飲ませられたが、勁い酒で臍まで通るやうな心地が致した。それから味を覺えて、九州一圓飲んで廻つたので、今では片時も酒が無うては寂しうて暮されんやうになりました。京に歸つたら定めておか／＼に叱られることであらうて、ははははは」

「九州では何處の景色が一番先生のお氣に入りましたか」と角田九華が尋ねると、

「九州では、櫻島の勝絶が冠たるものですな」

と言つて山陽は、櫻島の風景の談から、鹿兒島滞在中の出來事などを話した。

山陽は七日間竹田莊に奄留した。其の間一日として詩酒の遊びをしない日はなかつた。

竹田は、何かな珍味を調理して山陽を饗應したいと思つても、山中のことで鶏黍のほかに何物も無かつた。で止むを得ず自家の園圃に栽培したところの蔬菜を取つては客膳に供することが多かつた。山陽は詩を賦して曰く、

岡城訪田能村君葬余選迓君葬於輦津已五年矣。

芒鞋半破鬢飄蕭。

迂路尋君不厭遙。

海港方船成昨夢。

林窓剪燭又今宵。

園多閑地無租圃。

屋倚荒山有綠樵。

霜菓雨蔬留吾醉。

行藏總付濁醪澆。

山陽は非常な節儉家で、殊に物を粗末にすることを甚だしく嫌ふ人だったので、其の習ひが酒の上にも現はれて、一滴の酒と雖もこぼすことを嫌つた。それを見て岡仲達は「山陽愛酒如妻惜酒如金」と言つたくらゐだつた。山陽が腰に附けて來た竹筒は可成り古い物で、飴色に透けていゝ艶が出てゐた。

「大變いゝ竹筒だが、何處で手に入れられたのです」と竹田が訊ねると、

「長崎の骨董屋で求めた」と山陽は答へた。

竹田は其の竹筒が欲しくなつた。

「どうです、此の竹筒を私に呉れませんか」

「いや、それは困る、此の竹筒は私の唯一の伴侶だから、是れに別れると大きに不自由をしなければならん」

竹田は一個の瓢を其處へ持つて來た。

「では、代りにこの瓢を差し上げるから、是非竹筒は私に下さい」

と言つた。其の瓢は竹田が多年秘藏してゐる物だつた。山陽は大變其の瓢が氣に入つて、

「いや是れと交換なら結構、では、竹へ一寸一筆書いて見ませうか」

さう言つて山陽は其の竹筒へ「曾貯環津月。又籠霧島雲。虛山能許我」と、自分で刀を執つて彫り付けた。

竹田の家の前を細い溪流が通つてゐた。其の溪流の傍らに大きな銀杏の樹があつた。夕陽が斜めに照すと、銀杏の葉が黄金のやうに彩られた。山陽はそれを見て、懐古的な眼付きをして、

「銀杏は美しいなあ、——茶山先生の家にも銀杏があつた。門を出ると直ぐ眼に付く處に此の樹があつて、枝が大層繁つてゐた、毎年秋の霜に逢ふと葉の色が急に美しくなつた。で、茶山先生の家を、黄葉夕陽村舎と云ふのですよ」と言つた。

山陽は十月二十九日の朝、日田郡へ向つて出發した。

## (四) 無名の畫工

文政二年の秋、竹田は藩侯の駕に従つて江戸へ行つた。江戸へ到着してからは、文晁を初め舊識の人々を訪問したり、宿に籠つてゐる間は著述に従事したりした。其の頃彼は「瓶花論」といふ物を書いてゐた。

文晁は、些かも元氣衰退の色はなく、依然として江戸畫壇の中心になつてゐた。竹田が寫山樓を訪問すると、文晁は喜んで賓客の禮を以て竹田をもてなした。そして、秘藏の金泥を割いて竹田に贈つた。貧乏な竹田は、未だ嘗て金泥を使つて繪を描いたことはないので、大變喜んで貰つて歸つた。

其の頃のことだつた。或る日のこと竹田は淺草邊の裏町を歩いてゐた。其の時、みすばらしい裏長屋の前を通り掛ると、一軒の家の内から何やら歎歎くやうな聲と、男女の言ひ争ふやうな聲が漏れて来て彼の耳に這入つた。併し、單にそれだけのことだつたら竹田は素通りをしまふところだつたが、何氣なく聞いた其の話し聲の中に「大羅堂々々々」と繰り返して言つ

てゐる言葉が聞えたので、

「はてな——」と思つて竹田は足を停めた。

そして、窓の側へ歩み寄つて聞くとともに内に話しを立ち聞きした。

「全くお前の言ふ通り、わしは此の大雅堂の幅を手離すことは、自分の身を切り取られるよりも辛い気がする、が、今はさう言つてゐる場合ではない、かうしてゐれば俺達は遠からず餓ゑ死にでもしなければならぬのだ、どんな名畫でも命には替へられないから、俺は手離す決心をしたのだ」

と男の聲で言つた。すると女の聲で、

「だから、それ程大切な寶を賣り拂ふのはお止し遊ばせと妾が申すので御座います、さういふ物は、一度手離したら、二度と戻つてはまゐりません。併し、全く此の儘で居ては、貴郎が仰しやる通りわたし達は餓ゑ死にするよりほかはありません。ですから今も申したやうに、妾をどんな勤め奉公にでも出して下さいまし、さうして幾許かお金が出来たら、貴郎も思ふ様に繪の修業をなさることが出来ませう、二人で餓ゑ死にするのを待つてゐるよりは、其の方が

賢い仕方では御座いせんか」

「お前の親切は有難く思ふが、そんな莫迦な事は出来ない、何處の國に自分の女房を賣つて繪の稽古をする奴があるものか、まあ／＼後は何んとかなる、一時此の山水を賣り拂つて酒屋や何かの借金拂ひをすることにしよう、心配しないで、それをこちらへ寄越すがいい」

「否え、いけません、是れを賣つてしまつたら、貴郎は屹度後悔なさる時がまゐります」

「だが、それも仕方がないではないか、大雅堂の幅を賣る代りにお前の體を賣つてしまつたら、俺は猶更後悔しなければならぬのだ」

「貴郎はお氣が弱過ぎます、立派な畫工になる爲めには、女の一人や二人位どうなつたとて構はぬといふ、強い心をお持ちなされませ」

「それは無理だ、成る程俺に取つては、自分の命の次ぎに大切な物は繪だ。しかし、其の俺に取つては大切な繪だけでも、それが誰れにも同じやうに大切な物だとは云へない、自分一人の慾望の爲めに、罪も無いお前の身を犠牲にすることは俺には出来ないことだ」

「では、どうあつても此の山水をお賣りになるんですか」

「うん、差し當つて他に分別も工夫も付かぬから、惜しいけれども手離すよりほかに道はな

51

「まあ——何といふ情無いことでございますう……」

さう言つて女は又もやさめ／＼と泣くのだった。

竹田は、思はず引き入れられて聞いてゐた。彼は、直ぐ様自身の苦學した時の辛苦を思ひ返した。彼は、繪畫といふ物も、畢竟するに人間の生活の中の一つの遊技であると思つてゐる、其の遊技が世の中へ現はれて来る爲めに、一面にはかうした悲劇が行はれてゐるのだと思ふと、不思議なやうな氣もすれば、また悲壯な氣持もするのだつた。

彼はふと氣が付いて、向うの角の酒屋へ行つて、一升徳利へ酒を一杯買つて、自分でそれを提げて戻つて來た。

「御免下さい、お頼み申す」と、竹田は其の家の格子戸を明けて言つた。

女房は慌てゝ涙を拭いて顔を出した。

「入らつしやいませ、どなた様でございますか？」

「いや、手前は通り掛りの者ですが、折入つて御主人にお目に掛りたくて上りましたのです」  
 「左様でございますか、では、穢くるしいところでございますが、何卒お通り下さいませ」  
 上へ通つて見ると、それは六疊ばかりの間で、壁は剝げ、疊は破れて、見る影もない住居である。主といふのはまだ二十五六位の若い男である。何様ひどい貧乏暮しだが、そこらに繪筆だの繪の具皿だのが散らばつてゐるので、一見畫工であることは分る。

「是れは初めて御意を得ます、手前事は、只今御内儀迄申し入れた通り、通り掛りの者でゐる。姓名も名乗らずぶしつけの推參、失禮の段は幾重にも御用捨を願ひます」

「これは、御念の入つた御挨拶で痛み入ります、して、御用向きは」

「惜、ほかでもありません、只今表で聞くともなしに御夫婦の内所咄しを立ち聞き致しました、實は手前は遠國の者なれど、矢張り御主人と同癖の者で、吾身に引き比べて思はず貰ひ泣きを致しました。併し、よく人間は七轉び八起きと申すが、殊に足下などはお若い體、望みは是れからでゐる、只今の艱難辛苦もやがて笑ひ話になる時節もありません、決して物事を苦勞になされず、撓まず屈せずお遣りなされ。それから酒債などにお苦しみの様子、甚だ失禮だが、

茲に手前持ち合せの金子が少々有りますから、是れで當座の凌ぎをお付けなさるが宜しい、又折よく持ち合せた酒もあります、これで憂を晴さうではありませんか、御内儀、無様ながら燭の儀をお頼み申す」

と言つて竹田は金の包みと、一升徳利とを差し出した。

「何れのお方は存じませんが、お恥かしい處をお耳に入れて面目次第もございません、御芳志は忝う存じますが、併し申さば内輪の内所事、見ず知らずのお方に御迷惑を掛けては相済みませぬ、何卒此の儘お聞き流しに預り度う存じます」

「はてお堅い事を仰せられる、見ず知らずと申しても、足下と手前とは同じ道に遊ぶ者、相見互ひではありませんか、花の下に酌む盃は、通り掛りの者に獻しても厭とは申さぬもの、何の御斟酌が要り申さう、一獻やりながら御高説をも拜聽致し度い、さあ、御内儀燭をお願ひ申す」

竹田の磊落な態度に引き込まれて、夫婦の者も其の上辭することが出来なくなつた。女房は酒の燭をして持ち出した。主人はなか／＼飲める口だつた。酒が廻つて來ると、今までの濕つ



ぼい囁は忘れてしまつて、主客は旺んに畫論を交換した。其の談話に依つて竹田は主の畫工が大雅堂に傾倒してゐて、既に相應の力量を貯へてゐるらしいことを、想像することが出来た。

「時に御主人、手前は先刻も申す通り遠國の者ですが、斯の通に志して間も無い頃、江戸へ参つて、一度は文晁の門に入りました、が、どういふものか私には文晁の畫風が心に染まなかつたので、餘り繁々も参らず、間も無く歸國してしまひました。併し、各人の好みは別として、とにかく文晁は一代の巨匠であるには相違ない、世間では探幽以來の名手だと申すさうだが、規模の大なる點より申さば、それもあながち過賞ではござるまい、足下も一應文晁の門に遊ばれては如何ですか、殊に江戸で畫名を成さうとする者に取つては、何彼と便宜な點もあらうといふもの、是れは私の老婆心からお勧め申すのだが」

「お心添へ有難う存じます、私はまだ田舎から出て間がなく、江戸の模様もよく存じませぬので、文晁先生の雷名はたうから承知して居り乍ら、未だに門を叩かずに居りましたのです、御教示に依つて漸く針路を見出したやうに存じます、早速文晁先生をお訪ねして見ることに致しませう」

「それがようござる、——倍、突然参つてゐらう長居を致した、手前はこれでお暇申す、御内儀御厄介を掛けました」

「あゝいや、一寸お待ち下され、貴所様は、遠國のお方と仰せられたが、何處の何と仰せられる御仁か、何卒お名前をお明し下さい、吾々夫婦の爲めには再生の恩人、此の儘お別れ申しては心残りで御座います」

「ははははは、是れしきの事に左様に仰しやられては痛み入ります、手前生國は九州の方ですが、名前を名乗る程の者ではござらん、御縁もあらば又何處かで、お目に掛る時節もありません。くれぐれも御夫婦睦じく、やがて御高名の現はれる日を、よそながらお待ち申す」

さう言つて竹田は振り切つて出てしまつた。

(五) 清 貧

其の、無名の畫工は、高久齋崖だつた。

齋崖は下野國奈須郡杉戸村の人だつた。幼少の時から鹿沼で育つて、讀書を鈴木雲橋に受

け、又書を雪耕山人に就いて學んだ、雪耕山人は鹿沼の今宮神社の神官で、特に鮎を描くことの名人だつた。山人が歿した後霧崖は、大雅堂に私淑して、専心其の畫風を研究した。が、田舎に居ては畫名を揚げる見込みがないので、夫婦つれ立つて江戸へ出て來たのだつた。

それから間もなく霧崖は、傳手を求めて文晁に入門した。文晁は直ぐ様霧崖の非凡の畫才に着眼して、平の門人扱ひにはせず、客分として優遇して呉れた。其の頃文晁は人に逢ふとよく、「私は近頃掘り出し物をした」と言ひくした。

何を掘り出したのかと思つて尋ねて見ると、それは霧崖の事なのであつた。それ位文晁は霧崖を重んじてゐた。併し霧崖は、根本の畫風に於ては文晁と相容れなかつた。文晁が北宗に近い畫を描くのに対して、霧崖は何處迄も南方純正の文人畫の態度を執つて動かなかつた。文晁は包容力の偉大な畫家であつたから、自身の門人と雖も各々其の好む處に向はせ、決して自家の風を強ひるが如きことはしなかつた。

霧崖は一家を成して、盛名噴々として遠近に聞えるやうになつた。彼は文晁門下の第一人者として推された。其の頃になつても、彼はその以前淺草の裏店に住まつて窮迫のどん底に沈ん

でゐた時、名前も名乗らずに這入つて來て自分の窮境を救つて呉れた見ず知らずの人の事をば一日も忘れるといふことはなかつた。何時か一度は其の人に廻り逢つて、あの時の禮を述べ度いものだと、常々夫婦で話し合つてゐた。

それから十五年の月日が経過した。霧崖はある年京都へ遊んだ。丁度其の時竹田も京都へ來てゐた。霧崖は或る人の紹介で竹田に逢つて見ようと思つて、其の假寓を訪問した。竹田は霧崖の顔を見るが否や、

「やあ高久氏、矢つ張り足下であつたな」と言つた。

「おゝ、貴下は——」

「やれ〜御無事でお目出度い、あの節は失禮致した。其の後、高久霧崖といふ南宗畫家が、文晁門から出て賣り出したといふはなしを聞いて、多分足下だらうとは思つてゐた、が、縁があれば又かうして逢へるものでゐるな」

霧崖は萬感交々至つて急には口が利けなかつた。

竹田と靄崖は、互ひに滞在中親しく相往來してゐた。靄崖は、畫を依頼する者があつても、容易に畫かなかつた。そして専ら古寺舊刹を廻つて、其の儲藏の古畫を借覽して臨模するのを毎日の仕事にしてゐた。折柄備後の某富豪が靄崖の名を聞いて、多額の揮毫料を條件にして畫を依頼して來たが、彼は矢つ張り畫かなかつた。處が、其の富豪の家に、明人郭完の双幅があるといふはなしを聞くと、靄崖は其の借覽を許して貰へるなら、揮毫してそれを畫料の代りにしようと申し出た。其の人は喜んで幅を送つて來た。靄崖は直ちにそれを臨模して、約束通り數幅の自畫を作つて其の人に酬ゐた。

さういふ風だから、京都に滞在中も靄崖は非常に貧乏してゐた。交際する人とても竹田のほかに餘り無かつた。京都の畫家達は、靄崖を畏れて、大概の者が敬遠主義を取つてゐた。

或る時竹田が靄崖の假寓を訪れると、靄崖は喜んで迎へて、それから二人は夢中になつて畫談を闘はせてゐるうち、時刻がたつてお互ひに空腹を感じて來た。

「竹田先生は蕎麥は好きですか」靄崖は聞いた。

「蕎麥は大好物です」

「では私が蕎麥を注文して參りますから、少々お待ち下さい」

と言つて靄崖は出て行つたが、暫らくして戻つて來て、

「實は先生、誠にお恥かしい次第ですが、只今蕎麥を注文しに參りました處が、前の借りが拂つてないので、持つて來て呉れると言ひません、さういふわけで、折角蕎麥を御馳走申さうと存じたが差し上げることが叶ひません、併し、蕎麥屋が申すには、蕎麥湯なれば只で呉れると云ひましたので、何も無いよりはと思つて蕎麥湯を貰つて參りました、せめて是れなと召し上つて一時を凌いでいたゞき度う存じます」

と靄崖は氣の毒さうに言つて、蕎麥湯を容れた器を客の前に進めるのだつた。

「いや結構です、早速頂戴致さう」

二人は蕎麥湯を啜つて、又話し續けるのであつた。

靄崖は江戸へ歸ると、藥研堀に居を構へ、其の家を晚成山房と號して、大いに南宗を唱道した。彼は常に語つて、

「大雅が南宗を草創し、雲泉が是れを討論した、更に是れを潤色するに至つては、吾輩不似

と雖も敢て是れを他人に譲るものではない」

と言つた。彼の畫は、氣韻風格の蒼古たる點に於て古名匠に愧ぢなかつた。

併し、不幸にして、天は彼に長い命を籍さなかつた。天保十四年、靄崖は齡四十八で病を得て死んだ。其の頃でも靄崖は赤貧洗ふが如きものだったので、彼の妻は、其の葬式すらも出すことが出来なかつた。それは、靄崖の莫逆の友で且つ第一の知己であつたところの大橋淡雅が、一人で引き受けて、立派に葬儀を營んだ。

竹田の清貧も靄崖に似寄つたものだつた。靄崖が陋巷に埋もれたる逸士であれば、竹田は園に隠れたる幽士であつた。金錢に淡泊で貧苦の中に晏如たるものに至つては、全く同じ性格であつた。

竹田の畫名は、京攝の間では識者に推重されてゐたけれども、彼の故郷の地方では、極く少數の人のほかに彼が其の様に偉大な畫家であることを認めてゐる者はなかつた。

竹田は、文晁から贈られた金泥を使用して一度金碧山水を畫き度いと思つてゐるが、絹本を手に入れるすべがないので、久しく其の望みを果さずゐた。すると、其の頃土地に或る富豪

があつて、竹田は屢々其の家に出入してゐた際だつたので、彼は自身の希望を話して「是非絹本を一つ畫かせて貰ひ度い」と言つて頼み込んだ。處が富豪のはふでは、竹田を大した繪かきとは思つてゐないので、絹本などは勿體ないと言つて、てんで耳を借して呉れない始末だつた。處が其の後のこと、或る日竹田は其の家に行つてゐて、午睡をした時、寢言にまで同じ事を言つたので、富豪も遂に心を動かして、彼の希望を容れて遣ることになつた。竹田は勇み立つて、金泥を用ひて四季山水圖を製作した。

また恁んな事もあつた。

其の頃別府に煙草屋といふ富裕な商家があつた。竹田は其の家の主人と懇意で、度び／＼行つて泊つたりしたこともあつた。主人は荒金吳石と云つて、俳諧が好きで、田舎では宗匠株だつた。或る時も竹田が其の家へ行くと、主人の吳石が、

「竹田さん、私は先達て長崎から極く上等の畫箋紙を取り寄せましたが、お目に掛けませうか」と言つた。

「是非拜見」

と竹田が答へると、主は秘藏の畫箋紙を持つて来て見せた。それは幅一間長さ二間の、舶來の頗る上質の大畫箋紙だつた。竹田はそれを見ると、其の上等の紙へ畫いて見度くなつた。

「成る程是れは珍しい紙だ——時に、吳石さん、私に一つ此の紙へ畫かして呉れませんか」とすると吳石は驚いたやうな顔をして、

「それあ困りますよ。私も漸う手に入れた紙ですからね。實は、此の紙を用意して置いて、誰れか名高い先生が漫遊して來られた時畫いて貰はふと思つてるんです」

「誰かに畫かせるくらゐなら、私に畫かせて呉れたつて同じことせう」

「は、ん、さうはいきませんや、貴下にお頼みする位なら、正直なはなしが、秋阜にでも畫かされたはふが増しだからね」

と、主人は冗談半分だけれどもさう言つてゐて、どうしても竹田に畫かせやうとは言はなかつた。其の頃別府に津田秋阜といふ畫家があつた。

で、竹田は、其の事は斷念して別府を發つたが、どうもあの大畫箋紙の事を思ひ出す度び毎に堪まらなかつた。あの一間に二間の大紙へ一杯の山水を畫いたらどんなに好い氣持だらうと

考へた。彼は畫き度くて畫き度くて堪まらなかつた。で、馬關に滞在中のこと、吳石に手紙を出して、例の大畫箋紙のことを言つて遣つた。すると吳石も竹田の熱心に感じたと思えて、

「御申越しの畫箋紙の事は正に承諾した、此の次ぎ來府せられたならば揮毫を依頼致さう」

と云つて返事を寄越した。竹田は大喜びで、それから常に其の大紙へ揮毫すべき山水の構圖を考へてゐた。日を経て彼は別府へ再遊した。處が、煙草屋の主は、竹田に畫かせることを承諾はしたもので、一度に全紙を使はせてしまふのが惜しくなつて、それを幾つかに截つて、其の一枚に畫かせることにした。竹田は折角練りに練つた構圖を畫くことが出来なくなつたので大いに失望したが、改めてそれへ梅溪山水の圖を畫いた。描き了つて彼は筆を投じて、

「全紙ならば奇抜な構圖があつたが、一尺内外の小幅では、どうしても平凡になつてしまふ」と言つて嘆息した。

竹田の貧窮は常に甚だしかつた。或る時彼は急に大阪へ行かうと思つたが、旅費が無かつた。そこで彼は府内（大分町）へ出掛けて行つて、其の土地で八人衆と呼ばれてゐた某といふ豪家へ驅け込んで、事情を話し、山水花鳥を一枚二分づゝで買つて貰つて漸う旅費をこしらへ

た。其の後も竹田は急に金の要る事が出来ると、府内へ飛んで行つては一枚二分宛で買つて貰つた。

其の時々描いた畫は、後世になると、二分竹田、又は駆け込み竹田と稱へて、數千金の價を生じた。

### (六) 山紫水明處の交遊

文政三年卯月二十一日、竹田は藩侯の駕に扈從して江戸表を發して歸國の途についた。そして翌月二十二日に岡城に歸着した。竹田は、其の途中の見聞を誌して「陪駕日誌」を書いた。

同四年の秋には、悴の太一を伴れて犬飼に遊び、更に翌年は杵築に遊んだ。其の時竹田は杵築の客舎から、海物を寫生し、詩を題して遙かに京都の頼山陽に寄せた。山陽は直ちに和韻して贈り返した。竹田は「黄築紀行」を書いた。其の年高橋草坪が來て入門した。

文政六年の春には、太一を伴れて京都へ上る目的で、先づ尾の道へ行き、それから大阪へ行つた。すると偶然にも大阪で山陽に出逢つた。山陽は伊丹に遊んで歸る處だつた。兩者は互ひ

に久澗を叙して喜び合つた。山陽は詩を賦して曰つた。

浪華泛遊遡返田君聲

一岸重楊繫小船。相逢道舊咲輒然。

岡城分手如前日。倒指匆匆已六年。

竹田は數日大阪に滞在した後入浴した。

入浴した當座は小石元瑞の家に泊つてゐたが、間も無く愛宕山の雙林寺に寄寓することになつた。雙林寺の住職月峯和尚は、風流の人で、詩畫を善くし、文人墨客と交遊して、竹田とも豫てから相識の間だつたので欣んで自分の寺に迎へたのであつた。すると間も無く國元から門人の草坪と豐水の二人が後を慕つて上京して來た。竹田は、平常から太一を盲目的に愛してゐて、片時も傍らを離すといふことはなく、旅行に出る時も大概一緒に伴れ歩くといふ有様だつたが、今度京都へ太一を伴れて來たについては、別に目的があるのだつた。それは太一に小石元瑞の薰陶を受けさせ度いと思つたからだつた。太一はもう十六歳になつてゐた。

竹田が、一番信頼してゐるのは小石元瑞だつた。元瑞の方でも竹田には心服してゐた。二人

は眞の知己だつた。そこで二人は相談の上、所謂子を換へて教へるといふので、太一を元瑞に教育させ、元瑞の子の中道といふ者に竹田が學問を仕込むで遣ることになつた。中道をば竹田が手許に預かり、太一は毎日雙林寺から堀川の小石の家へ通學させることになつた。

竹田は、折り／＼山陽をも訪問して、時には其の家に泊り込むこともあつた。山陽は其の前年三本木に新居を構へて、名づけて水西莊と稱してゐた。其處は、叡山を仰ぎ、鴨川に臨み、嵐光水色檻外に浮動して、心ゆくばかり閑雅な住居だつた。庭中に一小草堂を建て、是れを「山紫水明處」と稱へて、山陽は其の内で悠々として著述に従事してゐた。九州旅行前後までの山陽の名前はまだ／＼小さかつたけれども、此の頃から彼の名は俄然として天下に震ふやうになつてゐた。

山陽は竹田が行くと非常に喜んで、他の客を謝絶して、二人きりで對座して、雑談をしたり、詩作をし合つたりして樂んだ。夜になると、祇園邊りの妓を二三人位よんで酒の興を助けさせたりした。

或る時、竹田は幾日も續けて水西莊に泊つて日を暮らしたことがあつた。すると一と朝のこ

と、山陽は早起きをして、書齋を掃除し、花を挿し、香を焚き、床に吳春坡の山水の幅を掛け、自分で鴨川の水を汲んで来てそれを古い甕に貯へ、それから硯を洗ひ、墨を磨り、紙筆を陳べ、其の他一切の道具を整頓した。彼はそれだけの事を全部自分でして、女子供などには手も付けさせなかつた。さうして、すつかり整つた處で、竹田を其の室へ招いて、

「御覽下さい、今朝は此の通り用意が出来たから、そこで一つ私の爲めに畫いて頂き度いものです」と山陽は言つた。

「承知しました、畫きませう」

竹田は即座に筆を執つて、白描の蘭竹、没骨の牡丹、それから草筆の水仙梅花、と三幀の畫を作つた。

竹田は近頃體の具合が悪くて小石元瑞の診察を受けてゐた。が、愛宕山から堀川迄は随分遠方だつた。彼ばかりではなく、太一も、日々其の道を往復するので可成り疲れてしまつて、歸つて來ても讀書どころではなかつた。「是れではいけない」と竹田は考へたが、小石の方でも其の事を心配して、近くへ越して來てはどうかと言つた。竹田は、愛宕山の風景が氣に入つてゐ

たので、其處を捨て、去るのは惜しかつたけれども、已むを得ないので轉居することにした。すると、堀川の東の端れで小川の夷川下るといふ處に、恰好の家が見付かつたので、倅と門人を伴れてそちらへ引き移つた。其の家は伊藤東涯の舊宅の直ぐ側だつた。そして、北隣りが物集長兵衛と云つて、京都では名高い舊家で、且つ有力な人だつた。其の人が一切世話をして呉れた。長兵衛といふ人は古墨を愛して、方干魯だとか程君房だとか云ふやうな名墨を澤山蒐めて有つてゐた。其の家には書籍も澤山あつた。極く好人物で、小石とは素々親しい仲だつた。竹田は大變便宜を得た。

七夕祭りの夜だつた。竹田が獨りで三條の橋の邊りを歩いてゐると、向ふから山陽がやつて來て、橋の上ではつたり逢つた。

「どちらへ？」

「いや、ぶら／＼歩いてゐるのです。貴下はどちらのお歸りで？」

「今晚は木米老人を訪問して、今迄話し込んで來たのです、どうもあの老人は何時逢つても談話が豊富で面白い」と山陽は言つた。

陶工木米は名は八十八、木屋といふ號だつた。因つて木米と稱したのであつた。鴨川の東、大和橋の北に住まつてゐた。彼は非常に多藝で、畫も善くすれば、茶道にも長けてゐた。専門の製陶の技に至つては古今無類の精妙だつた。就中古代の物を摸することに妙を得て、宋明の諸窯を摸倣した物などに至つては眞物との間に少しも相違が無かつた。日本の青磁は、彼が初めて其の法を開いたのだつた。

竹田も木米とは頗る親交があつた。竹田が初めて木米の家を訪ねたのは文化の頃だつた。其の家は非常に狭くて、鴨川の上に突き出して建て、あつた。流水が潺湲として家の下に響いてゐた。其の時木米は自分で川の水を汲んで、茶をいれてくれた。其の時竹田が一絶を作つて主に示すと、木米は其の詩を見て「此の詩は尋常兒の能く作る處でない」と言つて大いに竹田の詩才を賞して、それから親しく交るやうになつた。

山陽も頗る木米には傾倒してゐた。彼はかう言つた

「我天下の書讀まざるなく、天下の事記せざるなし、而して翁よく吾が未讀の書を読み、又吾が未記の事を記す」



竹田は、自分の畫中の知己と稱する者が天下に二人ある、即ち木米と山陽とが是れであるといつた。

山陽は、竹田の顔を見たので、此の儘別れるのも曲がな。

「牽牛織女光猶閑、同踞胡床此夜情」と言つて、河原の涼み臺に上つて夜が更ける迄語り合つた。

(七) 風 流

仲秋十六夜の晩だつた。其の時も竹田はたつた一人で鴨川べりを歩いてゐた。すると、或る族亭の二階から、

「竹田はん、竹田はん」

と呼ぶ者があるので、見上げると、藝妓や仲居などが、欄干に凭れて小手招きをしてゐる。併し、知つた顔ではないので、自分と呼ぶのではなからうと思つて、さつさと歩き出すと、後から袂をからけて庭下駄の儘、藝妓の一人が追ひ掛けて来て、

「竹田はん、あんなに皆が呼んでゐますがな」と言ふ。

「わしは竹田ぢやが、こんな處に知り合ひはない、人違ひだらう」

「いえく、人違ひやおへん。さあく、お待ちやよつて、早うおいでやす」

「これく、何をすする」

と言つても構はず、藝妓は竹田の手首を執つて引つ張り込んでしまつた。仕方がないから隨いて行くと、川に臨んだ眺めの好い座敷で、はや杯盤狼籍とした中に、數多の藝子舞子が忽ちぐるりと彼を取り巻いた、下へも置かず欺待する。而も一座は女ばかりで、一人の客の姿も見えない。竹田は狐につまゝれたやうな顔をして、

「一體是れはどうしたといふのだ、誰れが俺を呼んだのぢや」

「そないな事どうでも宜しいやおへんか、さあ一つおあがりやす」

「いや宜しくない、一面識も無い座敷で酒の馳走になる所由はない、それとも誰れか知つてゐる人でも來てゐるのか」

「ほほほほ、野暮な事お言ひやすな、わて達みんなよう知つてまんが」

「いや知らぬ、逢つたこともない者が知つてゐる道理はな」とすると、老妓の一人が、聲を張り上げて、

「天下誰人不識君——」と、朗々と吟じ出した。

「何と——」竹田は呆氣に取られてしまった。

「天下誰人不識君——」

次ぎの間から大勢で聲を揃へて吟じ出した。そして襖を明けて出て來たのが、山陽、春琴、月峯の三名だつた。一同大笑ひして、それから再び飲み初めた。

「どうぢや、今夜は一つ芝居をやらうではないか」と山陽が云ひ出した。

「面白い、やらう」と春琴が直ぐに賛成した。

月峯と竹田も仕方ないので役者になることになつた。藝妓共が連中見物といふことになつて、本式の衣裳小道具を借りて來て、まさに幕を明けようとした處へ、折あしく市中監察の役人がやつて來て、掟に背くとあつて差し止められた上、大いに小言を頂戴した。一同は興が醒めて、其の藝妓達を連れて三本木の清輝樓へ行つて、飲み直すことになつた。今度は藝妓に三

味線も弾かせず風流な遊びをした。

其の時藝妓達が、繪を描いて呉れと言つて、扇面などを差し出した。竹田は先刻山陽が畫を付けて顔を拵らへた態が、狸のやうで可笑しかつたのを思ひ出して、一人の藝妓の扇面へ狸を描いた。すると、山陽は自分の事とは氣が付かず「此の狸は上出來だ」と云つて、それへ贊を書いた。一同は後ろを向いてクス／＼と笑つた。

山陽と竹田との交遊は益々濃密になつて行つた。山陽が竹田の詩畫と人格とに傾倒したやうに、竹田もまた山陽の博學と識見の卓拔なるに推服して、彼を以て無二の知己としてゐた。曾て竹田は自畫に題する語の中に「天下除頼子成之外不容他人著一語也」と云ひ、又、

「予資性迂濶、僻愛繪事、苦辛從事殆五十歲、這裡所得之消息、知者唯山陽一人、故平生稱爲畫中知己第一」

と云つたのも、決して一時の諛辭ではなかつた。竹田は決して山陽に屈しはしなかつた。

竹田は、或る時松本醉古に依囑されて、畫帖に揮毫して「亦復一樂帖」とそれに題した。そして醉古に渡さうと思つてゐる時に山陽が來たので、出して見せると、山陽は一見して、

「それは傑作だ、是れは僕が貰ふ」と言つた。

「それは困る、醉古に頼まれて描いたのだから」

「醉古には何か描いて遣れば宜いさ、とにかく是れは僕が貰つた」

「ほんとに困る、醉古が憤るよ」

「憤つたつて構はんさ」

山陽はそれを持つて歸つてしまつて、自分で其の後へ跋を書いて「奪三人有爲三已有亦復一樂」と記して、喜んでゐた。醉古は果して大いに憤つた。

「山陽といふ男は怪しからん奴だ、私が行つて談判して、取り戻して来る」と言ふと、竹田は笑つて、

「いや、貴下にはもつと面白い物を描いて差し上げるから、打つ捨つて置きなさい」と言つて留めて、更に「亦復一樂帖」と題して、前よりも數等意匠を凝らした畫を作つた。

丁度花どきで、山陽は二三の人と知恩院へ行つて花見をしてゐた。酒宴の半ばへ竹田が遣つて來た。

「宜い處へ來て呉れた」と山陽は喜んだ。

「頼君、又恁んな物が出來たから、お目に掛けやうと思つて持つて來た」

と言つて、竹田は懐から畫帖を出して前に置いた。

「今度のは誰れに遣るんだね」

「松本醉古に遣る爲めに描いたのさ。此の前足下に横取りされたので、その代りに描いたの  
でね」

山陽は畫帖を開いて見て、

「うん、是れは名作だ」

と言つた。そして凝つと見てゐるうちに山陽は「こいつも一つ横取りして遣らう」と考へた。が併し、今度は竹田も油斷が無かつた。其の色が山陽の眉間に現はれた途端に、竹田は素速く畫帖を取り上げて、懐ろへ入れてしまつた。

「ははははは」と竹田は笑つた。

山陽も、仕方がないので苦笑ひをした。

竹田が餘り永く京都に居るので、郷里の親友伊藤喜一郎といふ人が書面を寄越して「定めて都で美しい花でも手に入れたのだらう」と云つて冷やかして來た。それに對して竹田は、自身の品行方正であることを縷々辯解して、

「有頼山陽贈予之詩、今掲結二句爲證曰、書冊一囊茶一鼎、東山獨不醉紅裙。一書賈朝夕往來、紅裙翠袖は不足動情候へども、扱々書物はほしくなり困り申候」と御丁寧に頼山陽まで引き合ひに出して、身の潔白を證明した。が、それは最後迄は續かなかつた。山陽等と交遊して花街狹斜の巷に出入する機會が重なる毎に、此の田園の老畫師でも、

都の婦女の濃粧盛飾に何時となく心を動かすやうになつてしまつた。竹田は淨瑠璃が好きだつた。酔ふて陶然となると、自慢の喉を鳴らして淨瑠璃を唱つた。三味線も心得てゐた。其の頃祇園に飛珊と呼ぶ名妓があつた、一日竹田は、山陽社中の誰彼と鴨涯の一樣に會した時、初めて飛珊を聘んでその歌を聽いた。飛珊は、浮川竹に育つた女ではあるけれど、多少文字もあり、風流を解し才氣流るゝが如きものがあつた。田舎者の竹田も飛珊に對しては少なからず心を動かした。其の席で竹田は、本調子の「おきこたつ」といふ歌曲を

作つて飛珊に與へた。それが縁となり、竹田と飛珊との間には情事が成り立つたのであつた。しかし、それから間もなく竹田は歸國しなくてはならなくなつた。歸國の前に竹田はこんな手紙を飛珊に贈つたのだつた。

十三日朝かきそへ

十六日立にきわめ申候、おきこたつは本調子にて、もはや手がつき候哉。

きのふはわけてせわしきお日がらのよしに、わざとの御文、ゆふべは殘燈の影にて、くりかへし／＼よみあかし候。あさましの田舎人を、かくあはれと見給ふは、うれしきやうにて、なか／＼かなしくおぼえて、すゞろになみだこぼれ候。氣のあうたどうし、ひざとひざとすりあはせかたらふは、をのこだにたぐひなきことにこそ侍ふを、かゝる打とけたる御ことばをうけ給はらんとは、夢にだも思はずかし。このたびきふに國に參り候も、又々のほり申し候心ぐみゆへ、ぜひことしのうちにのぼりて、花を見月をながめ、歌よみ酒のみ御あそび申さんと、今よりたのしみ申候。此ごろの文句のはしに申上候やうに、此世はあだのかりまく

ら、思ふまゝにならぬは常のならひに候へば、たゞ御心やすらかに御わたり候へかし、御やまひのかさなり候はんかと、そののみ御あんじ申上候、古歌にも、

命あらばあふよもあらん世の中に、などしぬばかり思ふころぞ

とにかく御身を御大事になされ候やうに存入候。又々なによりの品ども御おくりください候、色紙もいろ／＼とうつろふいろにそめなされ、御うつりがさへ、いと身にしみておぼえ候、御くわしも、須磨明石なぞいへるおもしろき浦々にてたべ可申候。御歌は、おせわしき内にも、かならずして給はぬやうにと存候。よき便りには御見せ被下候へかし。申上度事は山々なれども、

思ふこところの内にのこしおきて、又逢ふまでのなぐさめにせむ  
なにもめでたく、かしこ。

むつまじき月十一日

なにぞあけ度と存じ候へども、しかるべき品もなし、朝な夕なに手なれ候て、あさましきまでによこれ候へども、御ねざめの枕の上のときにと、金葉集一部、筆者極添へ上候。

夢に見る人はあやなし春の夜の、おぼろ月よりなほおぼろにて  
今一度するがらの火でおかほも見たし、御しらべの聲もききたいナア、なんとせうしたつゞみ。今までかけてあるさみせんのを、ちよとはづして御もらひ申上度、あたらしきはどこにもあり、手なれたがほし。

(八) 竹田の詩、畫

竹田は初め畫を岡藩の渡邊蓬島と淵野真齋に就いて學んだ。真齋は名は世龍、字は玉麟、禮園と號した。江戸で渡邊を對に學び、岡藩の畫員となつた。豊後の南宗畫は此の人から創まつたのだつた。竹田は、此の二人に就いて六法を學び、其の後は、江戸へ出ては文晁の門に遊び、大阪の浦上玉堂、岡田米山人、京都の皆川淇園、村瀬栲亭、紀州の野呂介石……と當時名のあつた文人畫の大家は餘す處なく歴訪して指教を受けた。此の外に彼は土佐、狩野の風に至るまで手に任せて模寫した。元明清諸家の筆法を研究撫仿したことは勿論だつた。さうして竹田は一番最後に、元の四大家の一人玉淑明に私淑するに及んで、其處に初めて自己の安住の境地を發

見するに至つたのだつた。

竹田も、他の一般の文人畫家がさうであるやうに、山水が主であつたが、人物花鳥も描いた。彼が三十四歳の時の作である「明皇觀女樂圖」は、未だ竹田の特徴を發揮したものではなかつたけれども、濃彩精緻にして絶て浮薄の氣がなく、世に稀なる名畫として後世に残つた。

天保三年、竹田は藩侯の命に依つて、「華陽歸馬」「桃林放牛」の二圖を畫いて獻じた。それは彼の畢世の傑作であつた。

竹田の畫は、南畫の神髓であるところの、氣韻生動が生命であつた。筆墨は精神の映する處、精神にして見るべくんば、筆墨は筌蹄のみといふのが、所謂文人畫の主張であつた。胸中萬卷の書あり、深遠の意おのづから現はれて兼素の上に躍るやうな畫を、彼等は理想としたのだつた。竹田の畫の妙所も其處にあつた。彼は非常な讀書家で、和漢の有らゆる書を涉獵して讀破することを終生やめなかつた。

竹田の畫は、決して巧妙なものではなかつた。寧ろ彼は自分から拙を以て任じてゐたくらゐだつた。併しそれは、後世の南畫家が、徒らに墨を飛ばして拙を誇るが如きものではなかつた。

た。拙なるが故に、竹田は容易に畫かなかつた。彼は畫を作る時には必ず朽筆くびを用ひて下圖を取つた。それが、公衆の前で、いさゝかの合作をする時でも、必ず別室に退き、一々朽筆を用ひて然る後に畫くのだつた。勿論興が到らなければ圖案を作らず、意が十分に熟さぬ間は筆を執らなかつた。だから、三年も五年も十年も経つても、一つの畫題が描けずにあるやうなことがあつたり、或ひは、一つの遠山を描き入れるだけでも、意匠を求めて容易に筆を下さないやうなことが屢々あつた。所謂一夕に嘉陵江を描かずして、五日に一水を畫くの類だつた。

肥後の人緒方竹外は、竹田の門人だつた。竹外が初めて竹田の許へ教を乞ひに來た時、

「試しに先づ畫いて御覽なさい、私が觀て居るから」と竹田が言つた。

「承知しました」

と竹外は答へて、紙に向つたが、彼は自身の筆力を見せようとするので、筆を把るが否や、其の駛きこと電の如く、瞬間にして描き上げた。すると竹田は、

「足下は吾徒でない、形容畫史である、紙は筆を受け、筆は墨に和し、二者が相合して初めて畫が成り立つのである」と言つた。

そこで竹外は些か悟る所があつて、もう一枚畫いて見た。今度は行筆が稍々緩になつた。「宜ろしい、其の分なら見込みがある」

と言つて、竹田は初めて入門を許した。

或る人が竹田に畫を依頼したところが、久しい間出来なかつた。度び／＼督促をすると、漸く出来上つたと言つて贈り届けて來た畫を見ると、たゞ筆を幾つか描いてあるばかりだつた。其の人は不平で、

「是れ位な物を描いて呉れるなら、何もあんなに永く待たせるにも及ぶまいに」と言つた。

竹田はそれを聞くと、其の人を自分の家へ招んで、

「私はあの畫を描く爲めに、いろ／＼と苦心してゐるのです、どうか是れを御覽下さい」と言つて、水に浸した椎茸を、大きな籠に溢れるほど入れたのを持ち出して來て見せたの

で、其の人も初めて驚嘆して、厚く禮を述べて歸つた。

さういふ風で、竹田の畫に對する熱心には時々人が駭かされた。小石元瑞の宅には、竹田は上京する毎に泊るのが例だつたが、小石の宅に居ても、晝間は畫作をしたり、人に會つたりし

て、夜は二三の人々と詩酒歡娛して、醉後に主と床を並べて睡りにつくのだつた。すると夜半に呻くような聲がするので、小石は夢を破られて飛び起きて聞いてゐると、それは竹田が、半醒半睡で、晝間畫いたところの題語を口にしてゐるのだつた。それが毎度のことなので、小石は冗談に、

「どうも君と一緒に寝ると、寢言の詩が喧ましいので閉口だ」と言つた。

天保三年に藩主中川侯から、華陽歸馬、桃林放牛の二圖を命ぜられた時には、竹田は竹田町から二三里隔つた惠良の原といふ處の牧場へ毎日のやうに通つて行つて、牛馬放遊の狀を寫生して來て、やがてそれを絹に描いて見たが、まだ意に充たないところがあつた。で、又もや牧場へ通つて、一層研究をして、十分悟る處があつてから、再び筆を執つて描き上げたのだつた。

竹田の畫は、神韻縹渺として、餘りに高尚に過ぎるので、俗畫を喜ぶ世人の翫賞には適しなかつた。或る年別府に滞在してゐた時、費用に宛てようと思つて、半切の紙本に、花卉、竹石などを十枚ばかり畫いて、人を頼んでそれを一枚一朱づゝに賣らせようとした。處が、頼まれ

た人は其の繪を持ち歩いて終ひには豊前地方迄も行つたけれども、漸う二三枚賣つたばかりで残りは持つて歸つて來てしまつた。そして言ふことには、

「何分先生の繪は汚くて、恁んな物は繪ではない化物だと云つて買手がありません。併しお氣の毒ですから、残りの分は私が貰ひます」

と言つて懐中から錢を出すと、竹田は手を揮つて、

「否々、それには及びません、残りは貴下に上げるから保存して置きなさい、百年も経てば價が出るかも知れないから」

「先生、私は百年はとも生きられません」

と言つて、大笑ひになつた。

日田で書畫會があつた時、竹田も出席したが、竹田がかすれ筆で徐々として描いて居るのを見て、

「あの畫工は墨を澤山に磨らす、少しづつ磨つて、乾いた筆でそつとなすつてゐるところを見ると、餘程の吝嗇家に相違ない」

と言つて、依頼する人が殆んど無かつた。

竹田は或る時自畫に題して「我畫在自娛、不在使他人娛、運毫無矩度、行墨只模糊、秋容知水冷、晚影覺雲孤、寫終看且笑、可見拙而迂」と曰つた。彼の畫の眞意はまさしく其處にあるのだつた。傳へ曰ふ、倪雲林、一日燈下竹樹を作り、傲然自得した。曉に起きて昨夜作る處の畫を展見すれば、全く竹に似てゐない。雲林笑ふて曰く、全不似處、不容易到耳と。それは同じく竹田の心境でもあつた。

古來の南畫家を通じて、竹田のやうに、詩畫書三つともに能くした者は我國では現はれなかつた。

竹田の後半生は全く詩畫三昧の境地であつた。彼の詩は即ち畫であり、畫は直ちに詩であつた。彼は自著「山中人饒舌」に於てかう謂つた。

余詩畫外、無復嗜好、以詩意寫畫、畫作詩、二者相須以寓閑興、聊爲自娛、自幼遂至今日、白首紛紜、仍不知止、溺愛之於人、亦深矣哉。

彼の詩は、其の畫と同じやうな軌道を通つて來た。彼の少壯時代の畫に有らゆる流派の影響



が現はれてゐたやうに、詩も中年頃迄は、樂天や寰王や東坡や小杜や、それらの臭味が隨所に現はれて、霸氣横溢するものがあつた。が、文政以後、性情高逸、命意清澹の詩を得て、初めて詩畫相調和して、神韻飛動の幽趣を現はすやうになつた。

竹田は、嘗て門人草坪に落款の法を訓へて謂つた。

「元の以前は落款といふ物に重きを置かなかつたが、倪雲林、文衡山、沈石田、陳白楊等の時代から、それが畫圖のうちの重要なものになつて來た。彼等の字は餘りに遒勁である爲めに、時には畫位を侵すこともあるが、それが反つて奇趣を添へてゐる、一幅の中には必ず天然に落款を容るゝべき妙所があるのだ、若し其の位置を失へば、則ち全局を傷けることになるのである」

草坪は竹田門下で一頭地を抜いた秀才だつた。が、或る時賴山陽が草坪に向つて、

「足下の筆は已に十分だけれども、但し書卷の氣に乏しい」と言つた。

草坪は大いに悟る處があつて、其の後は毎日の日課に、作詩十首、讀書若干、習字一千字、と極めて、必ずそれを了へないうちは寝ないことにして勉強した。

竹田は、青年時代には非常に字が拙だつた。彼は初めは明清諸家を學び、中頃は東坡に私淑し、後に長崎に遊んで清人江芸閣等と交るに及んで書道益々進み、細勁老道自ら一家を成すに至つたのであつた。竹田は常に人に語つて、

「私の手跡は元來非常に拙劣である、只多年法帖に依つて、聊か古意を得たに過ぎない」と言つた。

山陽は嘗て竹田が字を書く處を見て、驚いて「運腕の法が其の妙に達してゐる、吾輩の速く及ぶ處でない」と言つて、其の後は竹田が字を作る毎に、山陽は容を改めて見物した。

竹田は、茶道に於ても、高遊外、上田秋成の後を受けて斯道の大家と稱せられた。初め千家の門に入り、紹鷗、利休の跡を究め、後に茶經茶疏の説を取つて、泡茶新書を著はし、製茶、藏茶、擇水、辨器、湯候、冲泡、飲啜、湯滌、得趣等の諸法を説いて、細かに茶訣を開示した。本邦の煎茶式は、竹田に依つて啓發せられたものが多かつた。其の他茶に關して「葉うらの記」「竹田莊茶説」等の著述をした。

或る人が竹田の所持した茶入れを手に入れた。袋は粗末な白木綿で作つてあつて、其の函に

竹田の自筆で、

一文の錢にもならぬこの茶入れわが身のほどにくらべてぞ見る。  
一笑々々、この袋の木綿はわが姉の手作なり。  
と、認めてあつた。

(九) 文人去來

文政九年の春、竹田は又もや京都に遊び、其の年の秋、尾の道馬關を経て長崎に行き、冬に入つてから家に歸つた。翌十年の春は、熊本を経て、長崎に再遊した。

長崎では、多くの文人墨客と交つた。或ひは蘭船唐船を見物して見聞を廣めた。彼が最も利益を得たことは、此の土地で清人江芸閣等と交つたことだつた。

竹田の長崎滞在が餘り永引くので、彼の妻は、定めて夫が金に困つてゐるだらうと思つて、若干の金を工面して送り届けて遣つた。すると其の返事にかう言つてあつた。

「舊冬は金子御遣はし辱く存候、をりふし周文と申す繪を一兩一步にて賣りにまゐり居候ゆ

へ、直ちに遣はされし金子へ一步添へ調へ、元日はそれにて樂み申候、その上古きるり色の花生けを二步二朱にて調へ、それに梅の花をいけて見申候、御禮は別に詩を作り申候、則したゞめ遣し候間、啓太郎君に讀みてもらひ可申候。

行香子

曆尾年殘、燭跋宵闌、家人有信自郷關、寄金零碎、思我飢寒、出、井臼餘、機杼裡、  
剪封間。

除夕

自咲癡呆、依然故我、任塵途步步蹣跚、不<sub>レ</sub>上酒闌、不<sub>レ</sub>買歌鬻、債、周文畫、筆頭水、  
墨餘山。

竹田は一日劍雲泉の生れた村を訪ねて見た。其の村へ行つて、村人に尋ねたところが、誰れも知つてゐる者はなかつた。漸う其の屋敷の趾を尋ね當て、あたりに居た農夫に對つて此の屋敷の事を訊いて見ると、矢張り知らないと言つた。竹田は慚然として、低徊して去ることが出来なかつた。

翌年の冬竹田は、長崎を去つて肥州に向つた。途中天草洋を望んで、頼山陽を憶つて一詩を賦した。

天草洋險天下無、東博鳴門不<sub>レ</sub>少輪、崖崩石出急潮怒、  
盤渦旋起舞<sub>二</sub>天吳<sub>一</sub>、天吳視<sub>レ</sub>人如<sub>二</sub>土苴<sub>一</sub>、折<sub>レ</sub>檣碎<sub>レ</sub>舵笑<sub>レ</sub>椰撻、  
維時十月歲將暮、海氣蕭條雲滿樹、兩肥野曠夕陽沈、  
路遙村遠少<sub>二</sub>人住<sub>一</sub>、洛陽才子曾過<sub>レ</sub>此、手數青錢買<sub>レ</sub>舟去。  
肥後から薩摩に入り、鹿兒島に足を留めて、翌年の春家に歸つた。

文政十二年四月、竹田は高橋草坪を從へて東遊して、大阪に秋の終り迄滞在して、年の暮れが近づいてから京都へ行つた。

數年振りで山陽とも逢つた。此の前來た時には、山陽は廣島へ行つてゐて、逢ふことが出来なかつたのだつた。此の頃山陽は日本政記を起稿しつゝあつた。近來、彼は宿病の肺患の爲めに餘程健康が衰へてゐるやうであつた。併し、元氣だけは毫も衰へなかつた。

其の年は、十二月改元されて、天保元年となつた。除夜には、竹田は山陽を訪ふて、二人し

て靜かに歳を守つた。

除夕君彝來同守<sub>レ</sub>歲

山陽

當<sub>二</sub>我相思夕<sub>一</sub>、知<sub>二</sub>君來宿心<sub>一</sub>、孤燈歲共守、兩鬢霜同侵、  
鄉土枋榆遠、京城鐘漏深、較存<sub>二</sub>慈母在<sub>一</sub>、關意信<sub>二</sub>浮沈<sub>一</sub>。

春、竹田は歸國の途についた。山陽は竹田を送つて伏見に到り、共に大阪迄行つた。

送<sub>二</sub>君彝赴<sub>二</sub>浪華<sub>一</sub>

山陽

一支港水匯容<sub>レ</sub>刀、野菜香中撐<sub>二</sub>短篙<sub>一</sub>、昨共看<sub>レ</sub>花知<sub>レ</sub>那處、  
半山斜照塔稍高。

草坪も師に從つて國へ歸つて、竹田莊に寄寓してゐた。

五月には、鐵翁と逸雲とが、相携へて竹田莊を訪れて來た。

清客江稼圃が長崎に渡來してから、我が邦の南宗畫に一生面を開いた。其の衣鉢を襲ぐ者に、僧鐵翁、木下逸雲、菅井梅關等があつた。其の中鐵翁最も勝れ、山水花卉に長じ、殊に四君子に至つては、筆力の勁健、氣韻の超逸、海内其の比を見なかつた。鐵翁名は祖門、長崎春徳寺

に住してゐた。春徳寺は臨濟宗の名刹で、幕府の御朱印地であつた。鐵翁は其の住持で、切支丹の取締役を兼てゐた。彼はもと長崎近村の桶屋の子であつたのを、前住が樞樞の中から養ひ取つて我が子として、後を嗣がしたのだつた。鐵翁は幼い時から畫が好きで、初め石崎融思に學び、後ち稼圃に問ふたのである。江稼圃が日本へ來たのは、進士の試験に落第したので、志を官途に絶つて、東海に漫遊を志したのだつた。其の時、唐通詞游龍梅村といふ人が、稼圃の畫に巧みなことを知つて、鐵翁と逸雲を紹介して、彼について學ばしめたのであつた。鐵翁は其の時二十八歳だつたが、初めのうちは稼圃の説く所を少しも解することが能きなかつた。で、稼圃のはふで先きに倦きてしまつて「お前は宗門の徒である、丹青の爲めに其の本分をおろそかにするのは悪い事である」と言つて、暗に諷して畫を廢めさせようとしたが、鐵翁は頑として肯かず、益々勉強して終に稼圃の筆意を得るに至つたのであつた。

鐵翁は非常に無邪氣な人だつた。其の頃長崎に八百屋總右衛門といふ者があつて、畫を好んで鐵翁とは至つて懇意だつた。總右衛門は、鐵翁が大變蕎麥が好きなることを知つてゐるので、或る日午近い時刻に蕎麥を持つて鐵翁を訪ねて、窃かにそれを隣室に置いて暫らく雜談をして

わた。蕎麥の香氣が座に入つて來た。

「蕎麥の香がする、はてな」と鐵翁は鼻をひこつかせて言つた。

「私が持つて參つたのです、和尚、召し上りますか」

「食べよう、丁度午時で、腹もへつて來た」

そこで總右は隣室から蕎麥を取り出して鐵翁に供した。鐵翁は大いに喜んで食べ終つて、

「どうも有難かつた、一つお禮に畫を描いて進ぜよう」と言つた。

總右は心中非常に悦んだが、色にも出さず、

「なにそれには及びません、此の次ぎ描いて戴きませう」

「否、氣持のよい時でない、畫がうまく出來ないからな」

と言つて、鐵翁は興に乗じて幾枚も描いて與へた。其の後も總右は度び／＼蕎麥を持つて行つて、鐵翁の畫を手に入れたのだつた。

竹田が長崎へ行つて、初めて鐵翁を訪問すると、

「これは暫らく、いつもお變りなうて結構ぢや」と鐵翁は言つた。

「はて、何處でお目に掛りましたかな」  
鐵翁は起つて軽く竹田の肩を叩き乍ら、

「先生、最早お忘れか。前世には仲善しだつたではムらぬか」と言つた。  
鐵翁と逸雲は數日竹田莊に滞在した。

木下逸雲も畸人だつた。彼は曾て支那の商人に頼んで、西湖の蓮根を手に入れた。かねての望みであつたので、彼はそれを鉢に植ゑて、時々肥料を與へ、非常に大切に育てた。三年目で其の蓮が花を開いた。逸雲は喜ぶこと限りなく、一日門人知己を招いて披露の宴を催した。酒酣の時、逸雲は庭に下り、鍬を持つて來て、地を掘つて數尺の穴を作つた。人々はそれを見て怪んだ。すると逸雲は、荷花を鉢のまゝ其の穴に投げ込んで、忽ち埋めてしまつてから、扱て人々に向つてかう言つた。

「是れで私の望みは足りたのです。今日の私の所爲は、狂氣に近いと云つて晒ふ人もあるでせうが、私は、今から此處へ畫室を建て、其の内で起臥したならば、此の身は荷花の裡にあると同じで、愉快極まりなからうと思ふのです」

逸雲は其の言葉通り其處へ畫室を建てた。そして、其の後の畫の落款には多く「何年何月荷花深き處に宿す」云々と記したのでつた。

逸雲は、慶應元年江戸に上り、翌年五月歸國の爲めに、横濱から亞米利加の帆船黒龍丸に搭乗した。其の時は船中に、長崎奉行服部左衛門佐の一行もあつた。船客は全部で五十人ばかりあつた。處が、其の船は、横濱を離れた後杳として消息が無かつた。途中海上で颶風に逢つて船が覆つてしまつたのであるらしかつた。逸雲の生死も其の儘判明らなくなつてしまつたのだつた。

運といふものは仕方がなかつた。かの八百屋總右衛門も其の時逸雲に従つて江戸へ上つて、同じ船で歸國する筈だつたが、彼は其の時吉原の青樓に流連をしてゐて、たうとう船に乗りそくねてしまつたお蔭で、危く命を取り留めたのだつた。

(十) 巨星墜地

天保三年の秋、竹田は中津を経て、馬關に遊んだ。中津、馬關の地には文墨の士が多かつた

ので、竹田は日々それらの人々と會遊して日を過ごした。馬關では、廣江秋水の宅に滞在した。秋水は山陽の門人であつた。

九月二十三日であつた。中津から竹田に隨遊して來た津小石が明日は歸ることになつたので、其の晩は知友が集まつて小石の爲めに留別の宴を催した。

其處へ、京都から飛脚が到來した。秋水が出て行つたが、間もなく眞つ蒼な顔をして戻つて來て、だしぬけに、

「山陽先生がおかくれになりました」と言つた。

一座は駭然として、暫らく聲を發するものもなかつた。

留別の宴は、譬へん方なくしめやかなものになつた。竹田は、小石の爲めに詩を作つた。

留別津小石

故人有<sub>レ</sub>計<sub>レ</sub>自<sub>二</sub>京師<sub>一</sub>、恰是君來別<sub>一</sub>我時、離酒盈<sub>レ</sub>觴不<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>醉、

強將<sub>レ</sub>醒<sub>レ</sub>面夜臨<sub>レ</sub>岐。

しかし、山陽の死は突然ではなかつた。彼は肺患が重つて、二度までも咯血してゐた。其の

餘命が幾許もあるまい事は誰れにも豫知されてゐたのだつた。山陽は日々政記の稿を急いでゐた。或る日、山陽は小石元瑞に來診を求めた上で、

「僕の政記の稿も餘程進んだが、命のあるうちには是非共脱稿させ度いと思つてゐる。が、僕の命数は今日以後幾日間保たれるだらうか」と言つて訊いた。

「左様、今日以後三十日の壽命だらう」と、元瑞は答へた。それは八月十五日のことだつた。

「さうですか、それぢやいそいでやらねばならぬ」

さう言つて山陽は日夜筆を走らせた。九月十五日になつた。政記の稿もほと脱稿に近付かうとした。そこへ元瑞が來た。

「君はあゝ言つたが、今日で丁度一ヶ月目だが、まだ死なゝいではないか」と山陽は笑つて言つた。元瑞は首を振つて答へた。

「さや、もう四五日、とても十日とは保たないから、仕事は十分にやつて置きたまへ」

山陽は、日夜詰め切つてゐる門人達に、二名宛交替で筆記をさせつゝ稿を續けた。論文八十餘、全篇十六卷、殆んど完成した。

九月二十三日、未刻から山陽は危篤に陥つた。それでも彼は仕事を止めなかつた。暮六つ時に、左右の者を顧みて、

「一寸と睡りするからな」

と言つて、筆をさしおき、眼鏡を掛けた儘、枕に頭を載せたが、其のまゝ靜かに、永遠の睡に入つてしまつたのだつた。

山陽の死は、今更のやうに竹田の胸に悲痛な感を起させた。山陽が歿して半歳経つてから竹田は上京した。京都の土を踏むと、ひとしほ故人を憶ふ心が強くなつた。

或る年の秋、竹田は故人と共に山紫水明處に座して、夕陽影裏に杯を傾けつゝ詩作に耽つたことがあつた。其の時の山陽の詩の「疎柳斷橋山影長、漲痕猶帶夢花香、家鳧戀水歸來晚、一半秋川已夕陽」といふのを憶ひ出して、竹田は柳陰鳧雛の圖を作つて、それに題して曰つた。

癸巳春晚寫意、有所感、因書小詩於旁。

沙間氷盡水微茫。

坡上柳枝芽欲黃、

憶與險朋倚窓坐、

同喚家鳧看夕陽。

山陽歿後八ヶ月経過した或る日、竹田は其の家を訪問して、山紫水明處に一泊した。

重叩柴門感何勝、

一聲認得內人磨、

亭依水處昔同座、

欄凝紫時今獨憑、

荒徑春殘花落地、

虛堂晝暗壁挑燈、

老來怕聽傷心話、

使我觀空欲學僧。

或る日竹田は千本街を通つた。其處には一軒の酒店があつた。昔山陽と一緒に其の邊を歩くと、山陽は必ず其の家へはいりこんで、酔を買つて詩を論ずるのだつた、酒店は依然として舊の儘だつた。竹田は懷舊の情に堪へなくて一詩を賦した。

二條城畔路多岐、

散步猶看舊酒旗、

曾與故人論句處、

菜黃麥綠想當時。

竹田は一日木米を訪ねた。其の時竹田は、松巒古寺の圖を携へて行つたが、木米に向つて、「この畫は山陽に頼まれて描いたのでしたが、山陽が歿したので贈る人が無くなりました、豫て貴下から頼まれてゐる畫も何時出来るか分らないから、是れを貴下に差し上げることにした」と言つた。

木米は喜んで受けた。

其の木米も、翌年五月に歿したのだつた。

竹田は、自分の師友の人々が、一人づつ亡くなつて行くのを見ると、自身の齒が一本づつ缺けて行くやうな氣持がした。故人を悼む心は、やがては自己を傷む心だつた。彼は、數年前から心掛けて、自分の幼時から今日に至る迄に交つた多くの師友の人々の小傳を作つてゐたが、それが、天保四年の季になつて「師友畫錄」と題して二卷の書に纏め上げられた。それは一百四名の列傳で、我邦の繪畫史上最も重要な著述となつた。

天保五年といふ年も、竹田に取つては非常に不幸な年だつた。其の年の春彼は大阪に行つて、夏西下したが、間もなく、伊丹に住んでゐた門人高橋草坪が病篤しとの通知に接したので、取る物も取り敢へず引き返した。

草坪の病も肺患であつた。齡が若いだけに、病勢が急進して、療養の效も無く、梧桐の葉が落ちるやうに逝つてしまつた。竹田の悲嘆は譬へやうもなかつた。山陽や木米の死はまだしもであるが、若い盛りの草坪がまだ功も遂げずして、花の散るやうに散つてしまつたことは、ど

う思ひ返してもあはれで、傷ましくてならなかつた。

高橋草坪は、豊後の杵築の生れで、家は商家だつたが、天性畫が好きだつたので、文政五年に竹田が杵築に遊歴した時其の弟子になつた、其の時草坪は十九歳だつた。其の後彼は大概師匠の手許でばかり暮らした。竹田が旅行すれば必ず從遊して、殆んど師の側を離れたことはなかつた。彼は天稟の畫才を具へてゐて、山水花卉翎毛人物、悉く善くし、筆墨老成、既に大家を凌ぐ處があつた。先年大阪へ行つた時、竹田は草坪を伴れて浦上春琴を訪問した。其の時竹田が草坪の描いた畫を示すと、春琴はそれを見て、

「是れは清乾隆以上の畫だが、一體何びとの筆ですか」と尋ねた。

そこで竹田が、それは今爰へ伴れて來てゐる草坪の筆だと言つたので、春琴は一驚を喫したのでつた。春琴は、草坪の將來に囑望して、養子にして自分の後を嗣がせ度いと考へ其の事を草坪に話したのだが、草坪は人の後を襲ぐことを屑く思はなかつたので、國許に老母があるのを口實にして、その相談を謝絶した。すると其の後で、篠崎小竹が、其の姪を草坪に娶せ度いと言つて相談を掛けた。此の方は至極良縁であるので、竹田も賛成して、華燭の典を擧げた。



が、草坪は、其の時分からすでに肺を犯されてゐたのだつた。草坪はわづかに三十一歳で逝つたのだつた。

其の年、竹田の繪畫論「山中人饒舌」の刻がなつて上梓された。

(十一) 望郷山兒未到

文政六年の春竹田は東上した。彼は、今年は久しぶりで江戸へ行く心組みだつたが、大阪へ行くと、例に依つて長くなつてしまつた。

竹田は、豫て大鹽平八郎から依頼されてゐた王陽明の肖像を畫き上げた。その肖像畫は稀れなる傑作だつた。畫とは云ひながら、面部の七星がおのづから現はれて、神光人を射るものがあつた。

平八郎は大いに喜んで、それを壁間に掲げ、毎朝香を焚いて禮拜した。中齋は人に向つて言つた、

「あの肖像の前へ行くと、自然に畏敬の念が起つて、頭が下つて来る。此の平八に、畏敬の

餘り頭を下げさせうる者は竹田ばかりだらう、吳道元が再生しても、おそらくかうは畫けませう

六月十三日、竹田は洗心洞を訪ねた。其の日は天滿の祭禮だつた。前日迄の風雨が今朝は名残なく霽れたので、天滿の氏子は勇み立つて、街は何處へ行つても華やかに賑はつてゐた。

中齋は欣んで竹田を迎へて、酒を置いて歡待した。中齋は非常な元氣で、いろ／＼の談をしたが、頼山陽の事に及ぶと、暗然として眼を曇らせて、山陽が歿年の四月に、病衰の身で大阪へ來て洗心洞を訪ねた時の事などを語つた。

併し、其の夜の歡談は、竹田に取つても近來の快事だつた。談論湧くが如くで、晝の七つ頃から、夜の八つ迄遊んで、大いに酔つて駕に乗つて宿へ歸つた。翌日竹田は其の事を手紙に認めて、國許にゐる太一の處へ送つた。

大阪府外の吹田村といふ處の代官井内右門といふ人は書畫を好んで、豫てから竹田に自分の家へ遊びに來て貰ひ度いと云つてゐたので、竹田は七月の十一日に其の家に遊びに行つた。

其の年の暑さは殊の外酷しかつた。竹田は、自分が追ひ／＼老衰に赴くので、今年のやうに

暑さを酷しく感じるのだらうと思つた。併し、吹田村に移つてからは大いに凌ぎよかつた。其の地は大阪城を去ること東へ二里ばかりの處にあつて、田園沃野が東西に擴がり、江口・神崎玉・江長柄の名所が左右に續いてゐて、村落の風景が大いに彼の眼を娛ませた。

併し彼は、此の春以來故郷からの音信が一回も來ないのでひどくそれを氣にしてゐた。此の前太一に送つた手紙の中にも「毎月一回須寄書」と書いて遣つたにも關はらず、未だに便りが來ないところを見ると、太一がそれを讀み落したのだらうか、それとも若い者の常で遊びにほうけて手紙書く間も無いのだらうか……なぞと考へて、獨りで氣をいらつてゐた。同じ田舎と云つても、都會間近の此の吹田村と、自分の故郷の村とは、田野の光景でも風俗人情でも、まるで異つた趣きがあるが、しかし、夕陽地に墮ちて、鴉はねぐらに歸り、農夫は小川に鍬を洗ひ、炊煙しきりに地に這つて低迷する頃、殘光を浴びた空を眺めて佇んでゐると、しきりに家郷が戀しく思ひ出されるのだつた。其の戀しい故郷に落ちつくいとまもなく、老來の今日迄東遊西流席の温まる時はなく、放浪の旅を續けてゐる自分の運命を沁々と考へて見たりした。

七月二十四日の晩は、暑氣中りの氣味で急に熱が出て、下痢もともなつて、大變苦しんだ。

井内の家族が手を盡して看病して呉れた效があつて、病氣は直きに快方に向つた。彼は起きられるやうになると、其の事を手紙に書いて故郷へ送つた。

村中所見

家ことの蚊遣の煙たちつゞきにぎほふ村の夕すゞみかな

といふ歌を、手紙の端へ書き添へて遣つた。

それから數日後のこと、或る日彼は茄子の焼いたのを食した。中に、少し生焼のやうなのがあつたが、好物のことなので何の氣なしに食べてしまつた。すると間もなく劇しい腹痛が起つた。今度は前の時よりも一層病氣は劇しかつた。

大阪から、篠崎小竹や浦上春琴等が見舞ひに來て、醫者も大阪から招いた。其の病氣もやがて納まつて、日増しに苦痛は薄くなつたが、いつになつても食慾が付かなかつた。體が衰弱してゐた。併し、田舎では療養に不便を感じるので、少し加減のよい日に、竹田は駕に乗せられて、大阪の中の島の藩邸へ送られた。

八月の初めになつてから初めて家信を手にした。竹田は、太一が書いた其の手紙を病床で幾

度びも出して見た。彼は寢てゐて筆を取つて、國許への手紙を書いた。

拙事前月中旬より、中暑の處、前症將除時、誤喫三茄子未熟者、絶無食氣候、最早生三涼氣一時節に相成候、追々快復可申候、只今得便候ゆへ、此段申遣候、尙追々可申上候。

閏十四日

太一どの

老竹

しかし竹田は、どこまでも自分が死ぬだらうとは思はなかつた。病氣が全快したならば、九月頃から江戸へ發足しようと思つてゐた。

其の手紙を出すの間もなく、竹田は俄かに重態に陥つた。其の時、彼は初めて自分の不起を覺つた。又もや彼は太一に手紙を書いた、筆を執る手が顫へて、字體がしどろに亂れた。

其方上阪日々待居候、此狀參次第、萬事取りすて、直ちに上り可申、小生死に目に逢可申、甚申置事有之候、只々早々々。

太一へ

竹田

其の手紙は早飛脚で國許へ送られた。

竹田は、太一が来る迄は決して死んではならぬと思つた。太一が来るのが、一日千秋の思ひ

で待たれた。死に面して、心に懸る事は、吾が兒の上ばかりだつた。

京阪地方にゐた門人達や、知友の人々が、大勢詰め掛けて来て、交るゝ看病した。衰弱はますます加はるばかりだつた。

秋雨がしとくと降つてゐた。竹田は疲勞の睡りから眼を醒ました。いつの間にか日が暮れて、燈火が枕べを照らしてゐた。

「太一は、まだ見えませぬか」と竹田は言つた。

「まだお見えになりませんが、もう追つ付け御到着になるのでございませう」

と、一人の門人が答へた。石川といふ男で、長州萩の者だが、近年竹田に師事して畫を學んでゐるのだつた。

「石川君、筆と紙を取つて呉れ」

「お書きになるのでございますか」

「さうぢや、一絶出來たから書いて置く、半紙では駄目ぢや、半切を」

「畏りました」

石川は、筆と紙を持つて来て、墨を磨つた。

「宜しうございますか」

「大丈夫ぢや、お前、紙を持つてゐて呉れ」

竹田は筆を把つて書いた。

八月初八夜、示<sub>ニ</sub>石川生。

同人扶<sub>レ</sub>病護<sub>ニ</sub>柴荆、雨氣帶<sub>レ</sub>秋吟骨醒、西望<sub>ニ</sub>郷山兒未到、

一燈映<sub>レ</sub>我瘦顔青。

満座の人々、泣かぬ者はなかつた。

それほどこがれてゐた太一が漸く到着した。太一は二十六歳の若者だつた。

竹田は、吾が兒の顔を見たので安心した。言ひ置く事が甚だ澤山あると云つて遣つたが、逢へば何も言ふ事は無かつた。

八月二十八日といふ日に、竹田は太一を初め多くの門人知友に護られつゝ、息を引き取つたのであつた。

遺骸は南區朽繩坂の淨春寺に葬つた。そして郷里の竹田の胡麻生峠には齒と遺髪とを埋め、兩地に同じ墓石を建てた。碑面は篠崎小竹の筆で「竹田先生墓」と記された。